

**IBM WebSphere Business Integration
Connect Enterprise and Advanced Editions**



管理者ガイド

**IBM WebSphere Business Integration
Connect Enterprise and Advanced Editions**



管理者ガイド

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、115 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Connect Advanced Edition (5724-E75) および Enterprise Edition (5724-E87) バージョン 4、リリース 2、モディフィケーション 2、および新しいバージョンで明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Business Integration Connect Enterprise and
Advanced Editions
Administrator Guide

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.7

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

本書について	vii
このリリースの新機能	vii
本書の対象読者	vii
関連資料	viii
本書で使用する表記規則および用語	viii
用語	viii
ヘルプの参照先	x
お客様サービス	x
ソフトウェア・サポート	x
パスポート・アドバンテージ	x
製品資料	x
第 1 章 Community Console へのログイン	1
Business Integration Connect Console の始動	1
Community Console へのログイン	1
Community Console 内の移動	3
Community Console のアイコン	3
Community Console へのログイン	5
Community Console の停止	5
Document Manager and Receiver の停止	5
第 2 章 ハブ管理者のタスク	7
パスワード・ポリシーの管理	7
ターゲットの管理	8
ターゲットの詳細の表示および編集	8
ターゲットの使用可能化または使用不能化	9
ターゲットの削除	9
対話の管理	9
アラート・メール・アドレスの更新	10
XML 形式の管理	10
XML 形式の値の編集	10
XML 形式の削除	10
アクションの使用可能化または使用不能化	11
イベント・コードの管理	12
イベント・コードの表示および編集	12
イベント・コード名の保管	13
システム・アクティビティの表示	13
イベント送達の管理	13
ハンドラーの管理	14
ハンドラーのインポート	14
ハンドラーの削除	14
API 呼び出しの管理	14
データベース、データベース・ユーザー、およびパスワードの変更	15
第 3 章 アカウント管理タスク	17
参加者プロファイルの管理	17
参加者プロファイルの表示および編集	17
参加者の検索	18
参加者の削除	18
ゲートウェイ構成の管理	19

ゲートウェイの表示および編集	19
デフォルト・ゲートウェイの表示および編集	20
ゲートウェイ構成の削除	20
トランスポートの削除	21
トランスポートおよびゲートウェイの再試行	21
ゲートウェイ構成のために必要な情報	22
証明書管理	23
証明書がロードされていない場合	23
デジタル証明書の表示および編集	24
デジタル証明書の使用不能化	24
B2B 属性値の変更	25
参加者接続管理	25
接続コンポーネント	26
接続の重複	26
接続の検索	27
接続構成の変更	29
除外リスト管理	30
除外リストへの参加者の追加	30
除外リストの編集	31
第 4 章 ゲートウェイの管理	33
ゲートウェイ・リストの表示	33
キュー内の文書の表示	34
キューからの文書の削除	35
ゲートウェイの詳細の表示	35
ゲートウェイ状況の変更	35
第 5 章 文書フローの分析	37
文書分析	37
文書状態	38
システム内の文書の表示	38
プロセスおよびイベント詳細の表示	39
文書ボリューム・レポート	39
文書ボリューム・レポートの作成	39
文書ボリューム・レポートのエクスポート	40
レポートの印刷	40
参加者接続のテスト	41
Web サーバー結果コード	41
第 6 章 イベントおよび文書の表示	45
イベント・ビューアー	46
イベント・タイプ	47
イベント・ビューアー・タスクの実行	47
イベントの検索	47
イベント詳細の表示	48
AS1/AS2 ビューアー	49
AS1/AS2 ビューアーのタスクの実行	49
メッセージの検索	49
メッセージの詳細の表示	50
RosettaNet ビューアー	51
RosettaNet ビューアーのタスクの実行	51
RosettaNet プロセスの検索	52
RosettaNet プロセスの詳細の表示	52
ロー文書の表示	53
文書ビューアー	53
文書の検索	54

文書の詳細、イベント、およびロー文書の表示	55
データ検証エラーの表示	56
プロセスの停止機能の使用	57
第 7 章 実動トラフィックのシミュレーション	59
テスト・プロセスの準備	60
テスト・シナリオの設定	61
サンプル・シナリオ	61
要求と応答のアップロードおよび表示	63
文書フローの開始および表示	64
オープン文書の検索	65
オープン文書への応答	65
オープン文書の削除	65
第 8 章 アーカイブ	67
アーカイブ・データ	67
ファイル・システム・ログとデータベース・ログのアーカイブおよびパージ	69
アプリケーション・ログ・ファイルのパージ	70
否認防止ディレクトリーのパージ	70
データベース・テーブルのパージ	70
データの復元	73
旧ファイルの除去	74
状態エンジン・テーブルからのデータの除去	74
要約テーブルからのデータの除去	75
ロギング・テーブルからのデータの除去	75
第 9 章 トラブルシューティング	77
データベース照会効率の最適化	77
Receiver タイムアウト設定の増加	77
DB2 エージェント用の不十分な仮想メモリー	78
メモリー不足エラーの回避	78
暗号化された大容量 AS 文書の処理時間の長期化防止	79
データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス文書の再処理	79
データ検証エラーが生成された 0A1	79
低性能およびシステム・イベントの非作動	80
シャットダウン	81
マシン・シャットダウン後のシステムの始動	81
DB2 の始動	81
WebSphere MQ の始動	81
Community Console、Receiver、および Document Manager の開始	81
破損後のルーターの再始動	82
付録 A. パフォーマンスの考慮	83
イベント・フィルター	83
要約データの生成	83
付録 B. 障害発生時イベント	85
付録 C. BCG.Properties	95
特記事項	115
プログラミング・インターフェース情報	117
商標	117
索引	119

本書について

本書では、企業間 (B2B) 取引コミュニティの要件にあわせて Business Integration Connect を保守する方法について説明します。

このリリースの新機能

このセクションでは、このガイドの前のリリース (4.2.1) 以降の変更内容を説明します。

- このガイドは、WebSphere Business Integration Connect 環境の管理および保守に必要な情報のみを記載することを目的として変更されました。この環境を構成するための情報は、すべて新規の「ハブ構成ガイド」に移行されました。
- 製品パフォーマンスの機能拡張情報が追加されました。83 ページの『付録 A. パフォーマンスの考慮』を参照してください。
- データのアーカイブ情報が追加されました。67 ページの『第 8 章 アーカイブ』を参照してください。
- 参加者の削除オプションが文書化されました。18 ページの『参加者の削除』を参照してください。
- トランスポートの削除オプションが文書化されました。21 ページの『トランスポートの削除』を参照してください。
- スクリーン・リーダーをサポートするために Community Console に追加された新規のアクセシビリティ機能が文書化されました。

本書の対象読者

Business Integration Connect を保守する管理者。本書では、次の 2 種類の管理者を想定しています。

- ハブ管理者
- アカウント管理

ハブ管理者は、コミュニティのスーパー管理ユーザーです。ハブ管理者は、参加者の構成と接続を含む、ハブ・コミュニティ全体の構成および管理を担当します。オペレーター管理者は、ハブ管理者とほとんど同じ機能にアクセスできますが、ハブ管理機能にはアクセスできません。

注: 一部の機能には、コミュニティ参加者およびコミュニティ・マネージャーもアクセスできます。ハブ管理者およびオペレーター管理者が使用できるのと同じ制御機能が共用されている場合でも、コミュニティ参加者およびコミュニティ・マネージャーが常にその制御機能を認識したり、アクセスできるわけではありません。

関連資料

この製品に付属する資料一式では、WebSphere Business Integration Connect Enterprise and Advanced Edition の機能およびコンポーネントについて説明します。

この資料は、次のサイトからダウンロードするか、オンラインで直接閲覧できます。

<http://www.ibm.com/software/integration/wbiconnect/library/infocenter/>

注: 本書を発行後に発生した本製品についての重要な情報が、Technical Support Technotes および Flashes で入手できます。これらは次の WebSphere Business Integration サポート Web サイトにあります。

<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>

関係するコンポーネント領域を選択して、「Technotes」および「Flashes」セクションを参照します。

本書で使用する表記規則および用語

本書では、次の表記規則を使用しています。

太字	画面上での選択を示します。
青色のテキスト	青色のテキストは、マニュアルをオンラインで表示した場合にのみ表示されますが、これは相互参照のハイパーリンクを示しています。参照先のオブジェクトにジャンプするには、青色のテキストをクリックしてください。
イタリック	変数を表します。
/	本書では、ディレクトリー・パスの表記法としてスラッシュ (/) を使用しています。Windows 環境では、スラッシュを円記号 (¥) に置き換えてください。WebSphere Business Integration Connect のすべてのパス名は、この製品がインストールされているシステムのインストール先の相対ディレクトリーです。

用語

次の用語は、この製品および文書処理に固有の用語です。

アクション (Action) ビジネス・アクションとも呼ばれる。購入注文や見積依頼など、業務的な内容の性質を持つメッセージ。ビジネス・アクションやビジネス・シグナルの交換は、RosettaNet PIP で指定されたビジネス・アクティビティを完了するために必要なメッセージの振り付けによって構成される。

ビジネス・アクション (Business action) アクションを参照。

ビジネス・プロセス (Business process) ビジネスの目的を達成するために必要とされるステップを表す、定義済みのビジネス・トランザクション。

Community Console Business Integration Connect を構成したり、コミュニティ・マネージャーとコミュニティ参加者との間でやりとりするビジネス文書のフローを管理するために使用される Web ベースのツール。

コミュニティ・マネージャー (Community Manager) Business Integration Connect を購入し、ハブ・コミュニティのメンバーに配布した会社。コミュニティ・マネージャーには、マネージャー管理者と呼ばれる一人の管理ユーザーがいる。マネージャー管理者は、コミュニティにおけるコミュニティ・マネージャーの部分の正常性およびメンテナンスの責任を持つ。コミュニティ・マネージャーのビューから除外される Community Console 機能は、システム構成に関連する。

コミュニティ・オペレーター (Community Operator) ハブ規模のシステム構成や、システムの全体的な正常性および保守に責任を持つ責任者 (ハブ管理者)。ハブ管理者はすべての機能にアクセスできる。

コミュニティ参加者 (参加者) (Community Participant (Participant)) 参加者は、コミュニティ・マネージャーとの間でビジネス・トランザクションを送信および受信する。参加者は、コミュニティ内での参加者の役割をサポートする機能にアクセスできる。参加者のビューから除外される機能は、システム構成に関連する。

文書 (Document) 組織の規則に従った情報の集合体。Business Integration Connect では、複数の文書でプロセスを構成する。

文書プロトコル (Document protocol) コンピューター・ネットワークを経由する情報のフォーマット設定および送信に使用される一連の規則および手順。例としては、RosettaNet、XML、フラット・ファイル、EDI などがある。

ハブ・コミュニティ (Hub Community) コミュニティ・マネージャー、コミュニティ・オペレーター、およびコミュニティ参加者で構成される Business Integration Connect システム。

パッケージ (Package) Business Integration Connect では、インターネット上で伝送するために暗号化され、フォーマット設定された文書。

参加者接続 (Participant connection) 2 つのコミュニティ・メンバー環境間の接続で、関連アクションに従って 1 つのプロセスが実行される。

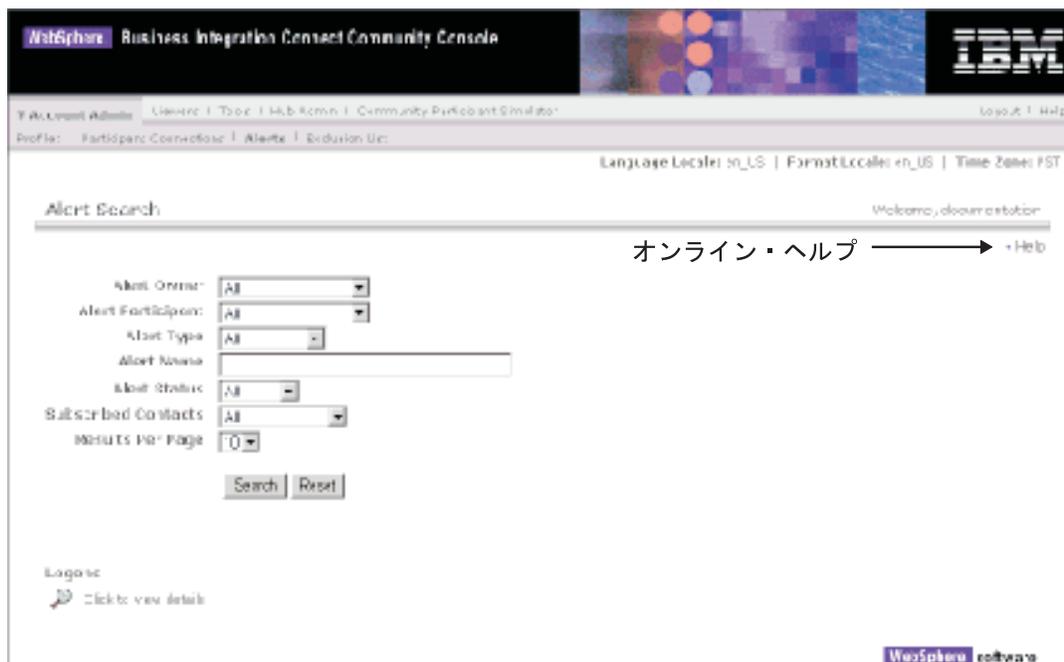
プロセス (Process) Business Integration Connect では、コミュニティ・マネージャーとコミュニティ参加者との間で実行される一連の文書またはメッセージ。全体として捕らえると、文書は全ビジネス・プロセスで構成されている。

RosettaNet PIP (Partner Interface Process) サプライ・チェーンの 2 つのパートナー間でのビジネス・トランザクションを満足するアクティビティ、決定、およびパートナーの役割の相互作用を説明するモデル (Business Integration Connect では、パートナーを参加者と呼ぶ)。PIP (Partner Interface Process) の各参加者は、PIP インスタンスに指定されている義務に従う必要がある。関係者が PIP インプリメンテーション・ガイドで指定されているサービスを実行できない場合、このビジネス・トランザクションはヌルで無効である。

ヘルプの参照先

オンライン・ヘルプにアクセスするには、「ヘルプ」リンクをクリックします。

注: ヘルプをクリックしてもヘルプ・ウィンドウが表示されない場合は、ポップアップ抑止機能を実行していないことを確認してください。



お客様サービス

ソフトウェア・サポート

www.ibm.com/software/support

パスポート・アドバンテージ

www.ibm.com/software/howtobuy/passportadvantage/

製品資料

www.ibm.com/software/integration/wbiconnect/library/infocenter

第 1 章 Community Console へのログイン

このガイドで説明するタスクは、WebSphere Business Integration Connect Community Console を使用して実行されます。Community Console は、セキュア・アクセス・ポイントを提供する Web ベースの機能です。

この章で説明するトピックは次のとおりです。

- 『Business Integration Connect Console の始動』
- 『Community Console へのログイン』
- 3 ページの 『Community Console 内の移動』
- 3 ページの 『Community Console のアイコン』
- 5 ページの 『Community Console へのログイン』
- 5 ページの 『Community Console の停止』
- 5 ページの 『Document Manager and Receiver の停止』

Business Integration Connect Console の始動

Business Integration Connect を始動するには、次のいずれかのスクリプトを実行します。

- UNIX - INSTALLATION_DIRECTORY/console/was/bin/startServer.sh server1
- Windows - INSTALLATION_DIRECTORY/console/was/bin/startServer.bat server1

注: このコマンドを実行すると、警告メッセージが表示されます。無視してもかまいません。

Community Console へのログイン

Community Console には、次のいずれかの Web ブラウザーが必要です。

- Microsoft Internet Explorer バージョン 5.5 以降
- Netscape Navigator バージョン 6.x 以降

使用しているブラウザーについて、利用できる最新の Service Pack とアップデートを必ずインストールしてください。

注: Community Console では、セッション情報を保守するために Cookie サポートをオンにする必要があります。Cookie には個人情報は保管されず、ブラウザーがクローズすると有効期限が切れます。

表示を最適にするため、画面解像度は 1024 x 768 DPI に設定してください。

Community Console にログインするには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザーの場所フィールドに次の URL を入力します。

`http://hostname.domain:58080/console (unsecure)`

http://hostname.domain:58443/console (secure)

hostname および domain は、Community Console コンポーネントをホスティングするコンピューターの名前およびロケーションです。

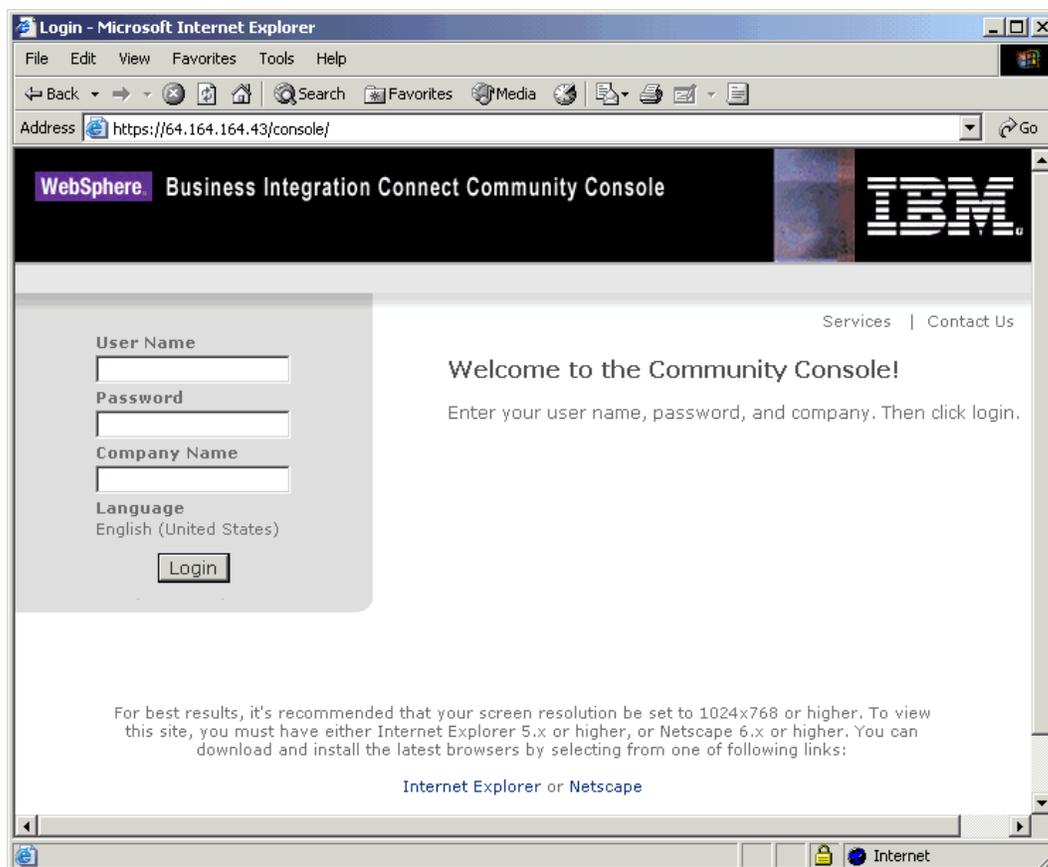


図 1. Community Console のログイン画面

- Community Console ログイン画面の「ユーザー名」フィールドに、適切な名前を入力します。
 - ハブ管理者の場合、デフォルトのユーザー名は **hubadmin** です。
 - オペレーター管理者の場合、デフォルトのユーザー名は **Admin** です。
- 「パスワード」フィールドに、サイトのパスワードを入力します。デフォルトのパスワードは Pa55word です。
- 「会社名」フィールドに、管理者ログイン名を入力します。ハブ管理ユーザーおよびオペレーター管理ユーザーのデフォルトのログイン名は、いずれも **Operator** です。
- 「ログイン」をクリックします。
- 初めてログインした場合は、新規パスワードの作成を要求されます。新規パスワードを入力し、「確認 (verify)」フィールドにパスワードを再度入力します。
- 「保管」をクリックします。

Community Console 内の移動

Community Console は、Business Integration Connect の構成に使用するさまざまなメニューで構成されています。

各画面の右上隅に 2 つのリンクが表示されます。

- 「ログアウト」を使用すると、現在の WebSphere Business Integration Connect セッションからログオフできます。アプリケーションは、引き続きバックグラウンドで実行されます。再度ログインするには、1 ページの『Community Console へのログイン』の手順を実行します。
- 「ヘルプ」を使用すると、Business Integration Connect のオンライン・ヘルプにアクセスできます。

注: ヘルプをクリックしてもヘルプ・ウィンドウが表示されない場合は、ポップアップ抑止機能を実行していないことを確認してください。

Community Console のアイコン

便宜のために、Community Console ではさまざまな画面でアイコンが使用されています。クリックするとタスクを実行できるアイコンと、情報を示すアイコンがあります。表 1 に、Community Console 画面全体を通して使用されるアイコンを一覧で示します。

表 1. Community Console のアイコン

アイコン	説明
タスク・アイコン	
	詳細情報を表示します。
	選択した項目を変更します。
	1 つ以上の選択した項目を削除するかまたは関連する非アクティブ項目をアクティブにします。
	ロー文書を表示します。
	検証エラーを表示します。
	続行します。
	一時停止します。
	文書またはレポートを印刷します。
	レポートをエクスポートします。
	カレンダー日付を選択します。
	ユーザーが所属するグループを表示します。
	グループ内のユーザーを表示します。

表1. Community Console のアイコン (続き)

アイコン	説明
	クリックすると、選択したアクションに基づいて新規アクションを作成します。
	システムから情報をエクスポートします。
	関連するアクティブ項目を非アクティブ化します。
	文書フロー定義を編集します。
	文書フロー定義の属性セットアップを表示します。
	新規マップがアップロードします。
	マップをダウンロードします。
	属性値を編集します。
	RosettaNet 属性値を編集します。
	重複する文書イベントが存在する場合、以前に送信された元文書を表示します。
	検索条件を非表示にします。
	アクセス権を表示します。
	役割を作成します。役割はアクティブではありません。
	ヘルプ・システムを表示します。
情報アイコン	
	ユーザーからの入力が必要なフィールドです。
	TPA (Trade Participant Agreement) が入力されています。
	参加者またはゲートウェイが使用不可です。
	文書の処理が現在進行中です。
	文書の処理が正常終了しました。
	文書の処理に失敗しました。
	同期データ・フロー。非同期のトランザクションの場合、アイコンは表示されません。
	クリックすると項目が使用される場所を確認できます。
	データが含まれています。
	データが含まれていません。

表 1. Community Console のアイコン (続き)

アイコン	説明
	階層ツリーが「折りたたみ」表示になっています。
	階層ツリーが「展開」表示になっています。

Community Console へのログイン

Community Console の使用を終了したら、コンソール画面の右上にある「ログアウト」をクリックします。ログアウトが実行され、コンソールのログイン画面が表示されます。

Community Console の停止

Community Console を停止するには、次のいずれかのスクリプトを実行します。

- UNIX - `INSTALLATION_DIRECTORY/console/was/bin/stopServer.sh server1`
- Windows - `INSTALLATION_DIRECTORY/console/was/bin/stopServer.bat server1`

注: このコマンドを実行すると、警告メッセージが表示されます。これは無視できます。

Document Manager and Receiver の停止

Document Manager および Receiver を停止するには、次のいずれかのスクリプトを実行します。

- UNIX - `INSTALLATION_DIRECTORY/router/was/bin/.shutdown_bcg.sh`
- Windows - `INSTALLATION_DIRECTORY/router/was/bin/shutdown_bcg.bat`
- UNIX - `INSTALLATION_DIRECTORY/receiver/was/bin/.shutdown_bcg.sh`
- Windows - `INSTALLATION_DIRECTORY/receiver/was/bin/shutdown_bcg.bat`

注: 警告メッセージが表示されても無視できます。

第 2 章 ハブ管理者のタスク

この章では、ハブ管理者ユーザーのみが実行できるタスクについて説明します。タスクの内容は次のとおりです。

- 『パスワード・ポリシーの管理』
- 8 ページの『ターゲットの管理』
- 9 ページの『対話の管理』
- 10 ページの『アラート・メール・アドレスの更新』
- 10 ページの『XML 形式の管理』
- 13 ページの『イベント送達の管理』
- 11 ページの『アクションの使用可能化または使用不能化』
- 12 ページの『イベント・コードの管理』
- 13 ページの『システム・アクティビティの表示』
- 13 ページの『イベント送達の管理』
- 14 ページの『ハンドラーの管理』
- 14 ページの『API 呼び出しの管理』
- 15 ページの『データベース、データベース・ユーザー、およびパスワードの変更』

パスワード・ポリシーの管理

「パスワード・ポリシー」画面では、ハブ・コミュニティのパスワード・ポリシーをセットアップできます。

- パスワード有効期限の制限を含む厳格なパスワード・ポリシーを実装できます。
- パスワードに特殊文字を使用して、ディクショナリー・アタックの影響を抑制することができます。
- 以前使用していたパスワードと似ているパスワードや、ユーザーのログイン名またはフルネームと似ているパスワードを使用できないようにすることもできます。

以下の手順では、パスワード・ポリシーの詳細の表示方法およびポリシー・パスワード (最小長、有効期限、固有性、特殊文字、名前との差異の検査の各パラメーター) の設定方法を説明します。

1. 「ハブ管理」>「コンソール構成」>「パスワード・ポリシー」の順にクリックします。
2. 「パスワード・ポリシー」画面で、 アイコンをクリックして、内容を編集します。

3. 表 2 に示すように、次のパラメーターを設定します。

表 2. パスワード・ポリシーの詳細

パラメーター	説明
最小長	パスワードに必要な最小の文字数。
有効期限	パスワードの期限が切れるまでの日数。
固有性	以前に使用したパスワードの数字の履歴。旧パスワードが履歴・ファイルに存在する場合、このパスワードは再使用できません。
特殊文字	このボックスを選択した場合、パスワードには次のタイプの特殊文字を 3 文字以上使用する必要があります。 <ul style="list-style-type: none">• 大文字• 小文字• 数字• 特殊文字 <p>この設定により、英文字 (ASCII) で構成されるパスワードを使用する場合のセキュリティ要件の設定を厳しくすることができます。デフォルトの設定は「オフ」です。</p> <p>国際文字で構成されるパスワードを使用する場合はオフにします。英語以外の文字セットでは、4 つの文字タイプのうち必要な 3 タイプが含まれない場合があります。システムによってサポートされている特殊文字は、「#」、「@」、「\$」、「&」、「+」です。</p>
名前との差異の検査	このボックスを選択すると、ユーザーのログイン名やフルネームから容易に推測できる名前で作成されたパスワードは使用できなくなります。

4. 「保管」をクリックします。

ターゲットの管理

「ターゲット・リスト」画面を使用すると、既存のターゲット詳細内容の表示と編集、およびターゲットの使用可能、使用不可の設定、または削除を行うことができます。

ターゲットの詳細の表示および編集

次の手順では、ターゲットの詳細を表示する方法について説明します。この手順の一部として、ターゲットのパラメーターを編集できます。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「ターゲット」の順にクリックします。
2. 「ターゲット・リスト」画面で、詳細を表示するターゲットの横にある  アイコンをクリックします。「ターゲットの詳細」画面が表示されます。
3. 「ターゲットの詳細」画面で、 アイコンをクリックして、ターゲットのパラメーターを編集します。
4. 必要に応じてパラメーターを編集します。
5. 「保管」をクリックします。

ターゲットの使用可能化または使用不能化

「ターゲット・リスト」画面からターゲットを使用可能または使用不可にするには、「状況」列で「使用可能」または「使用不可」をクリックします。これを実行するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「ターゲット」の順にクリックします。
2. 「ターゲット・リスト」画面で、 アイコンをクリックして、ターゲットを編集します。
3. 状況を変更するターゲットの横にある「使用可能」または「使用不可」をクリックします。

ターゲットの削除

不要なターゲットは削除できます。削除は即時実行されます。このステップの確認を求める警告メッセージは表示されません。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「ターゲット」の順にクリックします。

注: 次の手順では、警告メッセージが表示されることなく、ターゲットは即時に削除されます。このターゲットが削除の対象であることを確認してください。

2. 「ターゲット・リスト」画面で、削除するターゲットの横にある  アイコンをクリックします。

対話の管理

対話を使用可能、使用不可に設定、または編集するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書フロー定義」の順にクリックします。
2. 「対話の管理」をクリックします。
3. Business Integration Connect が使用可能化、使用不能化、または編集する対話の検索に使用する検索条件を入力します。
4. 「検索」をクリックします。検索条件に一致するすべての対話が検出されます。
5. 対話を使用可能にするには、使用可能化する対話の横にある赤色の  アイコンをクリックします。確認を求める確認メッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。 アイコンが  に置き換えられ、対話が使用可能に設定されたことが示されます。
6. 対話を使用不可にするには、使用不可に設定する対話の横にある  アイコンをクリックします。確認を求める確認メッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。Business Integration Connect により、 アイコンが  アイコンで置き換えられ、対話が使用不可に設定されたことが示されます。
7. 対話を編集するには、対話の横にある  アイコンをクリックします。編集ウィンドウで、対話を編集して、「保管」をクリックします。

アラート・メール・アドレスの更新

アラートは、テキスト・ベースの E メール・メッセージで、参加者にシステム・イベントの発生を通知します。

インストール後、アラート・メール情報の更新が必要になる場合があります。

1. <install_root>/wbic/config ディレクトリーにある BCG.Properties ファイルを編集して、アラート通知用の SMTP ホスト E メール・アドレスを変更します。BCG.Properties ファイルの要素は、次のとおりです。
 - bcg.alertNotifications.mailHost
 - bcg.alertNotifications.mailFrom
 - bcg.alertNotifications.mailReplyTo
 - bcg.alertNotifications.mailEnvelopeFrom
2. 変更内容を有効にするためにルーターを再始動します。

XML 形式の管理

「XML 形式の管理」画面で既存の XML 形式を編集および削除できます。XML 形式の作成については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

XML 形式の値の編集

XML 形式の値を編集するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「XML 形式」の順にクリックします。
2. 「XML 形式の管理」画面で、編集する XML 形式の横にある  アイコンをクリックします。
3. 「XML プロトコルの表示 (View XML Protocol)」画面で、該当する値を編集します。
4. 「保管」をクリックします。

XML 形式の削除

XML 形式が不要になった場合、次のステップに従って削除します。

重要: XML 形式を削除すると、このプロトコルに基づく既存の接続は使用不可になります。この接続を使用して交換された文書では、不明な文書イベントが発生して失敗します。ただし、削除されたプロトコルに関連した文書フロー定義は、システムに残ります。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「XML 形式」の順にクリックします。
2. 「XML 形式の管理」画面で、削除する XML 形式の横にある  アイコンをクリックします。XML 形式が削除されます。

注: XML 形式を削除する前に警告メッセージは表示されません。したがって、削除する前に XML 形式が必要ないことを確認してください。

アクションの使用可能化または使用不能化

「アクション」画面に、変換マップまたは接続に使用できるすべてのアクションが表示されます。システム提供のアクション（「プロバイダー」列に「製品」のラベルあり）とユーザー作成のアクションの両方がリストされます。

「ハブ管理」>「ハブ構成」>「アクション」の順にクリックして、「アクション」画面を表示します。図2を参照してください。

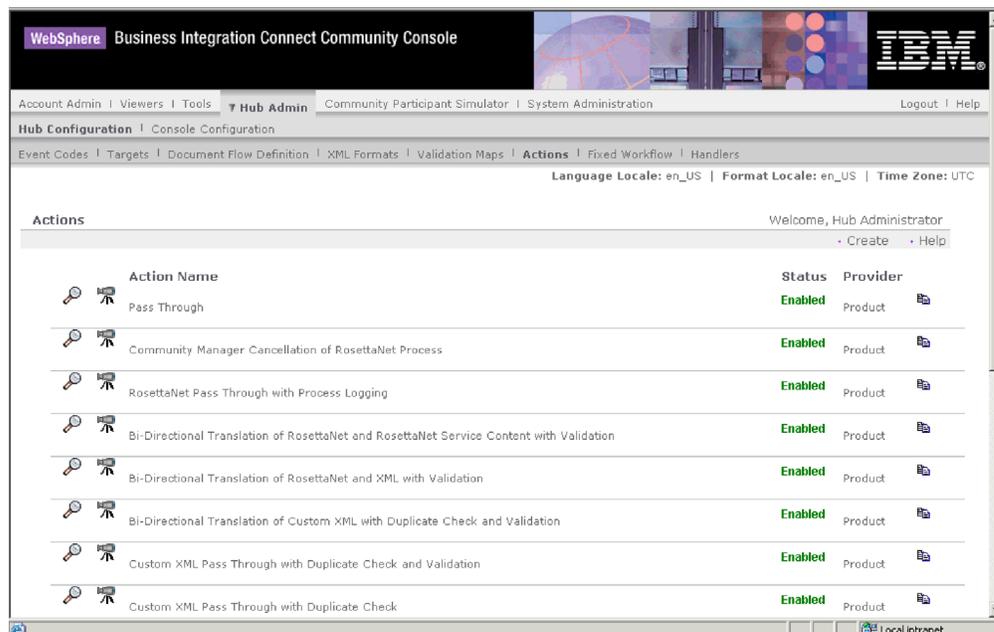


図2. 「アクション」画面

次のパラメーターは、アクションごとに表示されます。

- アクションの名前
- アクションの状況（使用可能または使用不可）
- アクションのプロバイダー - 「製品」で示された Business Integration Connect またはユーザー

アクションの詳細を表示するには、 アイコンをクリックします。ユーザー作成アクションの情報は変更できます。

現在アクションを使用している変換マップおよび接続を表示するには、 アイコンをクリックします。

選択したアクションに基づいて新規アクションを作成するには、 アイコンをクリックします。

「作成」をクリックすると、新規アクションを作成してそれを使用可能にすることができます。

イベント・コードの管理

Business Integration Connect 内でイベントが発生すると、イベント・コードが生成されます。「イベント・コード」画面を使用すると、生成されたイベント・コードを参照して、ほかのアプリケーションにエクスポートできます。

イベント・コードの表示および編集

次の手順では、イベント・コードの詳細を表示する方法について説明します。イベント・コードの可視/不可視およびアラート可能な状況を編集したり、イベント・コードの重大度を表示できます。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「イベント・コード」の順にクリックします。
2. 「イベント・コード」画面で、詳細を表示するイベント・コードの横にある  アイコンをクリックします。
3. 「イベント・コードの詳細」画面で、表 3に示すパラメーターを設定します。

表 3. イベント・コードの詳細

パラメーター	説明
イベント・コード	このイベント・コードに固有の番号を示す読み取り専用フィールド。
イベント名	イベントを起動したアクションに関連したイベントを識別するために使用する名前を示す読み取り専用フィールド。
内部での記述 可視/不可視	イベントを起動した環境を説明する読み取り専用フィールド。 イベント・コードを表示できるユーザー (コミュニティー・オペレーター、コミュニティー・マネージャー、コミュニティー参加者、またはこの 3 つの任意の組み合わせ) を選択します。
重大度	このイベント・コードに関連した重大度を示す読み取り専用フィールド。次に示すように、「デバッグ」(最低の重大度) から「重大」(最高の重大度) までがあります。 <ul style="list-style-type: none">• デバッグ - 下位のシステム操作およびサポートに使用。可視性およびデバッグ情報の使用は、ユーザーのアクセス権レベルによって異なります。• 情報 - 正常終了したシステム操作に使用。これらのイベントは、処理中の文書の状況も示します。通知イベントにはユーザー処置は必要ありません。• 警告 - 文書の処理やシステム機能において、操作を継続できる重大ではない異常に使用。• エラー - 文書処理において、プロセス終了の原因となる異常に使用。• 重大 - システム障害によって終了するサービスに使用。重大イベントが生成されると、サポート要員による操作が必要になります。
アラート可能 (Alertable)	選択すると、「アラート」画面の「定義」タブにあるリストにイベント名が表示されます。これにより、このイベントに対してアラートを設定できます。

イベント・コード名の保管

イベント・リストにあるイベント名のみを保管する（「名前のエクスポート」）か、またはイベント・リストにある内部の記述をテキスト形式で保管する（「リストのエクスポート」）かを選択できます。次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「イベント・コード」の順にクリックします。
2. 「イベント・コード」画面で、「名前のエクスポート」をクリックしてイベントのリストをイベント名のみで保管します。または、「リストのエクスポート」をクリックして、イベントのリストを内部記述のみで保管します。

システム・アクティビティの表示

Business Integration Connect は、システム・アクティビティについてのデータを定期的に要約します。この要約サービス・データは、文書分析または文書ボリューム・レポート機能を使用するときに表示される情報です。

「要約サービス・プロパティ」画面で、要約データを表示し、データを生成する頻度を編集できます。この画面には、要約データが最後に更新された日時も表示されます。

時間間隔を変更するには、次のステップを実行します。

1. 「システム管理」>「イベント処理」>「要約サービス」の順にクリックします。
2. 「要約サービス・プロパティ」画面で、「処理間隔 (分)」の横の  アイコンをクリックします。
3. データを再度要約するまでに経過する秒数の値 (1 から 60) を入力します。デフォルト値は 30 です。
4. 「保管」をクリックします。

イベント送達の管理

Business Integration Connect では、システム生成イベントのアプリケーション (例えば、モニター・アプリケーション) へのパブリッシュを選択できます。これらのイベントを JMS キューにパブリッシュします。「イベント・パブリッシュ・プロパティ」ページから、イベント・パブリッシュおよび関連 JMS 構成 (存在する場合) の状況の表示、または状況の変更が行えます。

イベント・パブリッシュをアクティブにするには、次のステップを実行します。

1. 「システム管理」>「イベント処理」>「イベント送達情報 (Event Delivery Information)」の順にクリックします。
2. 「イベント・パブリッシュ・プロパティ」画面で、「イベント・パブリッシュの使用可能化」の横の  アイコンをクリックします。JMS プロパティの値を入力または変更します。
3. 「保管」をクリックします。

ハンドラーの管理

「HandlersList」画面に、アクション、ターゲット、ゲートウェイ、または固定ワークフローで使用できるすべてのハンドラーが表示されます。システム提供のハンドラー（「プロバイダー」列に「製品」のラベルあり）とアップロードされたすべてのユーザー定義ハンドラーの両方がリストされます。

「HandlersList」画面を使用すると、ハンドラーのタイプ、そのクラス名、およびそれが WebSphere Business Integration Connect またはユーザーのどちらから提供されるかなどの、使用可能なハンドラーについての情報を表示できます。ハンドラーをインポートまたは削除することもできます。

ハンドラーのインポート

新規のハンドラーをご使用の環境にインポートするには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」 > 「ハブ構成」 > 「ハンドラー」の順にクリックします。
2. 「HandlersList」画面で、「インポート」をクリックします。
3. 「ファイル」で、インポートするハンドラーを表す XML ファイルの名前を入力するか、または「参照」ボタンを使用してファイルにナビゲートします。
4. オプションで、ハンドラーをデータベースにコミットするかどうかを指定します。「はい」をクリックすると、ハンドラーは使用可能になります。「いいえ」をクリックすると、ハンドラーは使用できません。デフォルトは「はい」です。
5. オプションで、同じ名前のファイルに上書きするかどうかを指定します。「はい」をクリックして、アップロードするファイルの名前が既存のハンドラー・ファイルの名前と一致すると、既存のファイルはアップロードしたファイルで置き換えられます。この機能は、ユーザー提供のハンドラー変更して、既存のハンドラーを更新したバージョンで置き換える場合に使用します。デフォルトは「いいえ」です。
6. 「アップロード」をクリックします。

ハンドラー・ファイルがアップロードされると、使用可能ハンドラーのリストに表示されます。

ハンドラーの削除

ハンドラーを削除するには、次のステップを実行します。

1. 「ハブ管理」 > 「ハブ構成」 > 「ハンドラー」の順にクリックします。
2. 「HandlersList」画面で、削除するハンドラーの横にある  アイコンをクリックします。

API 呼び出しの管理

参加者は、(Community Console を使用する代わりに) アプリケーション・プログラム・インターフェース (API) を呼び出して特定のタスクを実行できます。

管理 API の設定を変更するには、以下のステップを実行します。

1. 「システム管理」 > 「機能の管理」 > 「管理 API」の順にクリックします。

2. 「管理 API プロパティ」画面で、「管理 API の使用可能化」の横にある



アイコンをクリックします。

3. チェック・ボックスを選択して、API を使用可能にするか、またはチェック・ボックスをクリアして API を使用不可にします。
4. 「保管」をクリックします。

データベース、データベース・ユーザー、およびパスワードの変更

インストール後、Business Integration Connect コンポーネントが使用するデータベースを変更できます。データベース・ユーザーの名前やデータベース・ユーザーのパスワードも変更できます。

- Windows プラットフォームでは、`server_root\bin` ディレクトリーに移動して、次のコマンドを入力します。

```
wsadmin.bat -f bcgdbup.jacl -conntype NONE db_type dbName dbUserID  
dbPassword nodeName serverName
```

- 他のすべてのプラットフォームの場合は、次を入力します。

```
./wsdadmin.sh -f bcgdbup.jacl -conntype NONE dbType dbName dbUserID  
dbPassword nodeName serverName
```

このコマンドの使用例を次に示します。

```
./wsdadmin.sh -f bcgdbup.jacl -conntype NONE DB2 hub_db george  
ABCD123 DefaultNode server1
```

第 3 章 アカウント管理タスク

この章では、次の Business Integration Connect アカウント管理タスクについて説明します。

- 『参加者プロフィールの管理』
- 19 ページの『ゲートウェイ構成の管理』
- 23 ページの『証明書の管理』
- 25 ページの『B2B 属性値の変更』
- 25 ページの『参加者接続の管理』
- 30 ページの『除外リストの管理』

タスクは、ハブ管理ユーザー、マネージャー管理ユーザー、および参加者管理ユーザーによって次の制限のもとに実行されます。

- **参加者の管理:** マネージャー管理ユーザーおよび参加者管理ユーザーは、参加者タイプ、親、およびアクションの各パラメーターを編集できません。
- **ゲートウェイの管理:** マネージャー管理ユーザーおよび参加者管理ユーザーは、パラメーターのサブセットのみを編集できます。

参加者プロフィールの管理

アカウント管理参加者機能を使用すると、ハブ管理ユーザーは参加者プロフィールを作成、表示、編集、および削除することができます。参加者プロフィールは、システムに対して会社 (参加者) を識別します。参加者プロフィールの作成については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

注: 参加者管理ユーザーおよびマネージャー管理ユーザーが編集できるのは、自分の参加者プロフィールのみです。

参加者プロフィールの表示および編集

参加者プロフィールを表示および編集するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「コミュニティ参加者」の順にクリックします。
2. 「検索」をクリックします。
3. 詳細を表示する参加者の横にある  アイコンをクリックします。
4. 「参加者の詳細」画面で、 アイコンをクリックして、プロフィールの詳細を編集します。
5. 必要に応じて、参加者プロフィールを変更します。

注: 「ユーザー・パスワードのリセット」をクリックすると、Community Console に 18 ページの図 3 に示すメッセージが表示されます。「OK」をク

リックして続行するか、または「キャンセル」をクリックしてパスワードを保存します。



図3. 「ユーザー・パスワードのリセット」メッセージ

6. 「保管」をクリックします。

参加者の検索

「参加者」画面では、指定した検索条件に一致する参加者を検索できます。参加者を検索するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「コミュニティー参加者」の順にクリックします。
2. 参加者名またはビジネス ID を該当するフィールドに入力します。
3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致する参加者が検出されます。
4. 参加者の状況を変更するには、「状況」列の「使用可能」または「使用不可」をクリックします。
5. 参加者の詳細を表示するには、その参加者の横にある  アイコンをクリックします。
6. 参加者プロフィールを編集するには、 アイコンをクリックします。
7. 「保管」をクリックします。

参加者の削除

参加者を削除するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「コミュニティー参加者」の順にクリックします。
2. 参加者名またはビジネス ID を該当するフィールドに入力します。
3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致する参加者が検出されます。
4.  アイコンをクリックして、参加者を削除します。
5. 削除を確認して、変更内容を保管します。

ゲートウェイ構成の管理

ゲートウェイは、ハブ・コミュニティの適切な宛先に文書をルーティングするときに使用するトランスポート情報を管理します。ゲートウェイの構成時にどの情報が使用されるかは、アウトバウンド・トランスポート・プロトコルによって決まります。ゲートウェイの作成の詳細については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

ゲートウェイの表示および編集

ゲートウェイを表示および編集するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「ゲートウェイ」の順にクリックします。
2. ゲートウェイのアクセスを変更するには、「アクセス」列の「オンライン」または「オフライン」をクリックします。
3. ゲートウェイの状況を変更するには、「状況」列の「使用可能」または「使用不可」をクリックします。
4. ゲートウェイの詳細を表示するには、 アイコンをクリックします。
5.  アイコンをクリックします。
6. 「ゲートウェイの詳細」画面で、19 ページの表 4 に説明されているゲートウェイの詳細を編集します。
7. 「保管」をクリックします。

「削除」をクリックして、ゲートウェイを削除することもできます。

表 4. 「ゲートウェイの詳細」画面

パラメーター	説明
ゲートウェイ名	ゲートウェイを識別するための名前。 注: 「ゲートウェイ名」は、ユーザー定義のフリー・フォーマット・フィールドです。一意である必要はありませんが、混乱を避けるため、各ゲートウェイには異なる名前を付けてください。
状況	ゲートウェイが使用可能または使用不可の状態であることを示します。使用不可にすると、文書はそのゲートウェイを通過できません。
オンライン/オフライン	ゲートウェイがオンラインまたはオフラインの状態であることを示します。オフラインにすると、文書はゲートウェイがオンラインになるまでキューに入れられます。
説明	ゲートウェイに関するオプションの説明
ゲートウェイ構成 トランスポート	文書をルーティングするためのプロトコル (22 ページの『ゲートウェイ構成のために必要な情報』を参照)。
ターゲット URI ユーザー名	参加者の URI。 参加者ファイアウォール経由のセキュア・アクセスのためのユーザー名。
パスワード	参加者ファイアウォール経由のセキュア・アクセスのためのパスワード。

表4. 「ゲートウェイの詳細」画面 (続き)

パラメーター	説明
再試行カウント	システムが失敗するまでに文書の送信を試行する最大回数。デフォルト値は 3 です。
再試行間隔	システムが、正常に送信できなかった文書の再送信を試行するまでに一時停止する秒数。デフォルト値は 300 (5 分) です。
スレッド数	文書のルーティングに割り当てられるスレッドの数。デフォルト値は 3 です。このパラメーターを使用できるのはハブ管理者のみです。
クライアント IP の検証	文書进行处理する前に、送信側パートナーの IP アドレスを検証します。
クライアント SSL 証明書の検証	文書进行处理する前に、文書に関連付けられている DUNS 番号と照合して、送信側参加者のデジタル証明書を検証します。
自動キュー	このパラメーターを使用可能にすると、ゲートウェイがオフラインになっている場合に文書が一時リポジトリに配置されます。このパラメーターが使用不可で、ゲートウェイがオフラインの場合、文書の送信は失敗してエラーが発生します。
認証が必要	このパラメーターを使用可能にすると、ユーザー名およびパスワードは JMS または SMTP メッセージとともに提供されます。
JMS ファクトリー名	JMS プロバイダーが JMS キューとの関連付けを生成するために使用する Java クラス名。
JMS メッセージ・クラス	メッセージのクラス。
JMS メッセージ・タイプ	JMS メッセージのタイプ。
JMS プロバイダー URL パッケージ	JMS コンテキスト URL を解釈するために Java が使用するクラスまたは JAR ファイルの名前。
JMS キュー名	JMS メッセージが格納されるキューの名前。
JMS JNDI ファクトリー名	ネーム・サービスに接続するために使用するファクトリー名。
接続タイムアウト	トラフィックのない状態でソケットが開いている秒数。デフォルト値は 120 (2 分) です。

デフォルト・ゲートウェイの表示および編集

システムに構成されているデフォルト・ゲートウェイを表示および編集するには、次のステップを実行します。

1. 「アカウント管理」>「プロファイル」>「ゲートウェイ」の順にクリックします。
2. 画面の右上隅にある「デフォルト・ゲートウェイの表示」をクリックします。すべてのゲートウェイ・タイプとそれに関連するゲートウェイのリストが表示されます。
3. デフォルト・ゲートウェイの関連情報を表示するには、そのゲートウェイの横にある  アイコンをクリックします。
4. 必要に応じて情報を編集し、「保管」をクリックします。

ゲートウェイ構成の削除

ゲートウェイ構成が不要になった場合は、次の手順に従って構成を削除します。ゲートウェイ構成を削除する前に確認メッセージは表示されません。そのため、削除する前に対象のゲートウェイ構成が必要ないことを確認してください。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「ゲートウェイ」の順にクリックします。
2. 削除するゲートウェイの横にある  アイコンをクリックします。
3.  アイコンをクリックします。
4. 「削除」をクリックします。

トランスポートの削除

トランスポートが不要になった場合は、次の手順に従って構成を削除します。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「ゲートウェイ」の順にクリックします。
2. 「トランスポート・タイプの削除」を選択します。
3. 「トランスポート」ドロップダウン・リストから「トランスポート・タイプ」を選択して、「削除」ボタンをクリックします。

トランスポートおよびゲートウェイの再試行

参加者のゲートウェイへの文書の配信が失敗すると、Business Integration Connect は文書の再配信を試行します。繰り返される試行を再試行と呼びます。Business Integration Connect の内部には、トランスポートとゲートウェイという 2 つの異なるレベルの再試行機能が存在します。

1. トランスポート再試行

トランスポート再試行は、ゲートウェイの仕様に関係なく常に適用される下位の組み込み再試行です。下位の再試行が実行される誘因としては、配信の試行で経由するネットワーク、とりわけインターネットで一時的な障害が多いことが挙げられます。このように配信システムは自動的に再試行するよう設計されており、ユーザーが再試行パラメーターを明示的に定義する必要はありません。トランスポート再試行の回数 (bcg.delivery.gwTransportMaxRetries) および再試行の時間間隔 (bcg.delivery.gwTransportRetryInterval) は、Document Manager の BCG.Properties ファイルに定義されており、すべてのゲートウェイに適用されます。デフォルト値は、3 秒間隔で再試行 3 回です。

2. ゲートウェイ再試行 (別名: 文書再試行)

ゲートウェイ再試行パラメーター (許容される再試行回数および再試行の間隔) は、ユーザーがゲートウェイ・プロパティを使用して構成します。通常、ゲートウェイ再試行間隔は、前述した組み込みトランスポート再試行よりも大幅に長くなります。これは、ユーザーが十分な時間を使用して、配信の障害を訂正できるようにすることを意図しています。例えば、宛先の Web サーバーがダウンしていたり、宛先の URL が誤っていたりすることがあります。パラメーター値を設定するには、それぞれのゲートウェイごとに適切な値をユーザーが判断する必要があります。

Business Integration Connect では、それぞれの (ユーザー定義の) ゲートウェイ再試行ごとにトランスポート再試行が自動的に実行されます。例えば、3 回のゲートウェイ再試行を指定すると、システムの再試行パターンは次のようになります。

最初の試行が失敗する

トラnsポート再試行 0 が失敗する
 トラnsポート再試行 1 が失敗する
 トラnsポート再試行 2 が失敗する
 ゲートウェイ再試行 1 が失敗する
 トラnsポート再試行 0 が失敗する
 トラnsポート再試行 1 が失敗する
 トラnsポート再試行 2 が失敗する
 ゲートウェイ再試行 2 が失敗する
 トラnsポート再試行 0 が失敗する
 トラnsポート再試行 1 が失敗する
 トラnsポート再試行 2 が失敗する
 ゲートウェイ再試行 3 が失敗する
 文書の配信障害

配信の試行に失敗するたびに、Community Console で表示可能な警告イベントが生成されます。

ゲートウェイ構成のために必要な情報

ゲートウェイのセットアップに必要な情報は、選択したトラnsポート・タイプによって決まります。X がマークされているボックスには構成情報が必要です。また、文字 O がマークされているボックスはオプションです。

注: 特定のゲートウェイ構成値を編集できるかどうかは、ユーザーのアクセス権レベルによって異なります。

トラnsポート	HTTP	HTTPS	FTP	FTPS	JMS	ファイル・ディレクトリー	SMTP
ターゲット URI	X	X	X	X		X	X
ユーザー名	O	O	O	O	O	O	O
パスワード	O	O	O	O	O	O	O
再試行カウント	X	X	X	X	X	X	X
再試行間隔	X	X	X	X	X	X	X
スレッド数	X	X	X	X	X	X	X
クライアント IP の検証	O	O	O	O			
クライアント SSL 証明書の検証		O					
自動キュー	O	O	O	O	O		O
認証が必要					O		O
JMS ファクトリー名					X		
JMS メッセージ・クラス					X		
JMS メッセージ・タイプ					O		
プロバイダー URL パッケージ					O		
JMS キュー名					X		
JMS JNDI ファクトリー名					X		

トランスポート	HTTP	HTTPS	FTP	FTPS	JMS	ファイル・ディレクトリー	SMTP
接続タイムアウト	X	X	X				

注:

1. ゲートウェイの「認証が必要」オプションがオンで、ユーザー名とパスワードが指定されている場合、ゲートウェイは、このユーザー名とパスワードを、文書の配信のために接続している WebSphere Business Integration Connect 以外の外部システムに渡します。ゲートウェイは認証を実行せず、これらの認証証明書を接続を試行しているシステムに渡すだけです。JMS ゲートウェイでは、ユーザー名とパスワードは JMS キュー接続ファクトリーの JNDI ルックアップの証明書として使用されます。ファイル・ベースの JNDI を使用して JMS キューに接続する場合、Websphere MQ 経由の JMS は JNDI 認証を実行しません。
2. ネゴシエーションしている FTPS サーバーが、提示されたクライアント証明書に基づいてユーザーをマッピングしていない限り、ユーザー名およびパスワードが FTPS 認証に必要です。実装の詳細については、FTPS サーバー管理者に問い合わせてください。

証明書の管理

デジタル証明書とは、運転免許証やパスポートと同様の、オンラインの身分証明書のことです。デジタル証明書により、身元の保証された個人であることが検証されます。デジタル証明書の一部にデジタル署名があります。デジタル署名とは、公開鍵暗号方式を使用した電子文書に基づいた計算のことです。この処理によって、デジタル署名は署名される文書および署名者と結合されるため、複製することはできません。連邦政府のデジタル署名法案が通過したことにより、デジタル署名のある電子取引には、手書きで署名された取引と同等の法的効力があります。

Business Integration Connect は、デジタル証明書を使用してコミュニティー・マネージャーとコミュニティー参加者間のビジネス文書トランザクションの認証性を検証します。デジタル証明書は、暗号化や復号化にも使用されます。デジタル証明書は、構成処理時にアップロードされ、識別されます。

注: このセクションの手順を使用する場合は、先に証明書をシステムにロードしておく必要があります。証明書のロードの詳細については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

証明書がロードされていない場合

証明書がシステムにロードされていない場合は、次のイベント・コードが 1 分ごとに生成されます。

- 240018 オペレーターのデジタル署名鍵がロードされていません
- 240019 オペレーターの暗号鍵がロードされていません

Business Integration Connect が証明書を必要としない場合、Document Manager の `bcg.properties` ファイルに次のプロパティを追加することによってこれらのイベントを抑制できます。

デジタル証明書の表示および編集

システムに定義されているデジタル証明書のリストを表示し、これらの証明書を編集するには、次の手順に従います。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「証明書」の順にクリックします。デジタル証明書リストが表示されます。

注: デジタル証明書の日付が赤色の場合は、この証明書が期限切れかまだ有効でないことを示しています。

2. 詳細を表示する証明書の横にある  アイコンをクリックします。「証明書の詳細を表示 (Viewing Certificate Details)」画面が表示されます。
3.  アイコンをクリックして、デジタル証明書を編集します。
4. 画面に表示された次のパラメーターを更新して、「保管」をクリックします。または、「削除」をクリックして、この証明書を削除することもできます。

表5. デジタル証明書のパラメーター

パラメーター	説明
証明書タイプ	デジタル証明書のタイプを以下に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • デジタル署名の検証 — 参加者から受信した文書のデジタル署名を認証します。 • 暗号化 — 参加者に送信する文書を暗号化するための公開鍵が格納されています。 • SSL クライアント — SSL 接続を開始するために使用する参加者の証明書を認証します。 • ルート証明書 — 証明書チェーンを確立するために認証機関から発行された証明書です。
説明	証明書を説明するテキスト
状況	証明書を使用可能または使用不可にします。
ゲートウェイ・タイプ	証明書に関連したゲートウェイのタイプを選択します。

デジタル証明書の使用不能化

デジタル証明書を使用しない場合は、次の手順に従って証明書を使用不可にします。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「証明書」の順にクリックします。デジタル証明書リストが表示されます。
2. 使用不可にする証明書の横にある  アイコンをクリックします。
3.  アイコンをクリックして、証明書の詳細を編集します。
4. 「状況」で、「使用不可」を選択します。
5. 「保管」をクリックします。

B2B 属性値の変更

文書フロー定義の属性値を変更するには、次の手順に従います。

注: 上位の文書フロー定義の属性値を変更すると、その内容は同じノード内にある下位の定義に継承されます。

1. 「アカウント管理」>「プロフィール」>「B2B 機能」の順にクリックします。「B2B 機能」画面が表示されます。
2. ノードをクリックして、適切な文書フロー定義レベルまでノードを個別に展開するか、0 から 4 までの数字または「すべて」を選択して、表示されているすべての文書フロー定義ノードを選択したレベルまで展開します。
3.  アイコンをクリックして、「更新」列の適切な属性値を変更します。

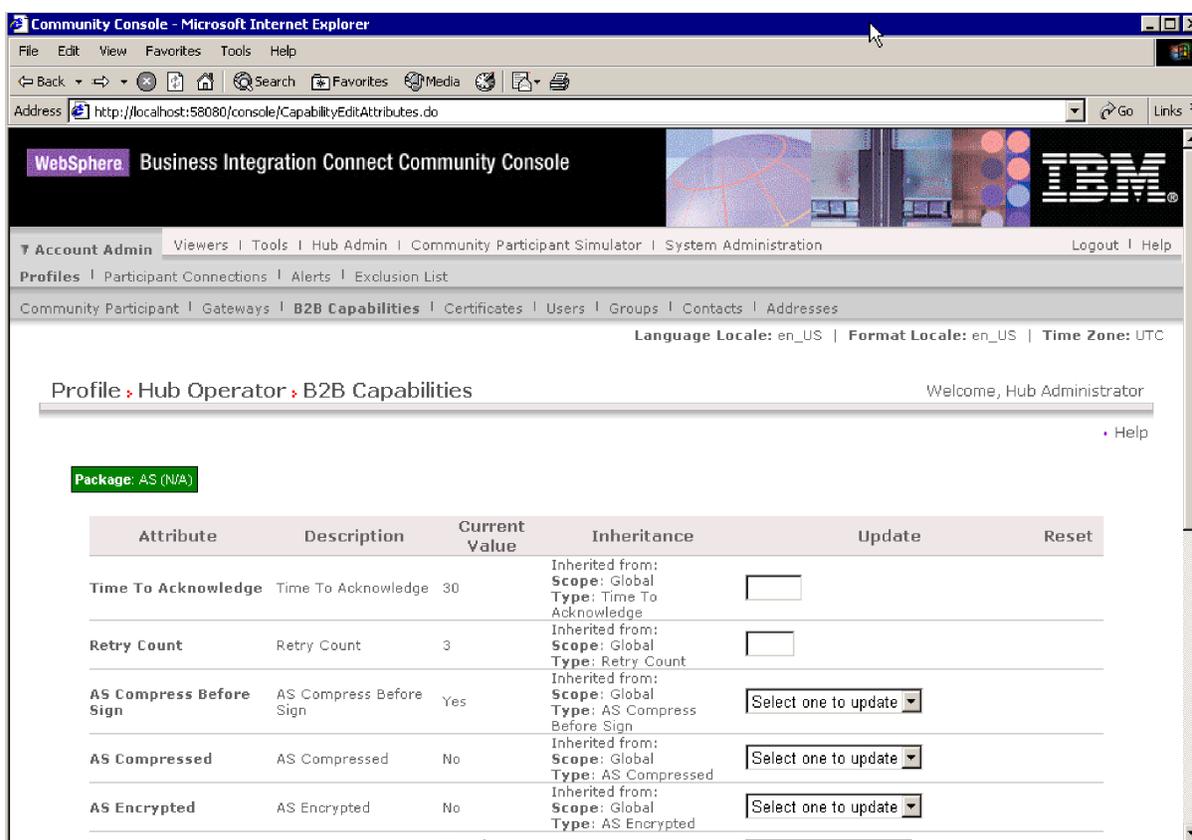


図 4. B2B 属性値を変更するための画面

4. 「保管」をクリックします。

参加者接続の管理

参加者接続とは、システムが文書を処理し、コミュニティー・マネージャーとそのさまざまな参加者との間で文書を送信できるようにする仕組みです。接続には、RosettaNet TPA 属性、トランスポート・プロトコル、文書処理アクション、ゲートウェイ・タイプ、参加者ゲートウェイなどの各文書フローの適切な交換に必要な情

報が含まれています。コミュニティー・マネージャーとその参加者の 1 人との間に接続が存在しないと、文書は送信できません。

コミュニティー・マネージャーとその参加者間の接続は、それらの B2B 機能に基づいて自動的に作成されます。Community Console の B2B 機能モジュールに入力されたデータによって、使用可能な各接続の機能が決まります。各接続の構成は、ハブ・コミュニティーのニーズに合わせて変更できます。

接続コンポーネント

個々の接続は、次の 4 つのコンポーネントで構成されています。

- 属性
- アクション
- ゲートウェイ
- ゲートウェイ・タイプ

接続が作成されると、そのルーティングおよび処理の機能に合わせてこの 4 つのコンポーネントすべてを変更することができます。表 6 では、各コンポーネントが説明されています。

表 6. 参加者の管理コンポーネント

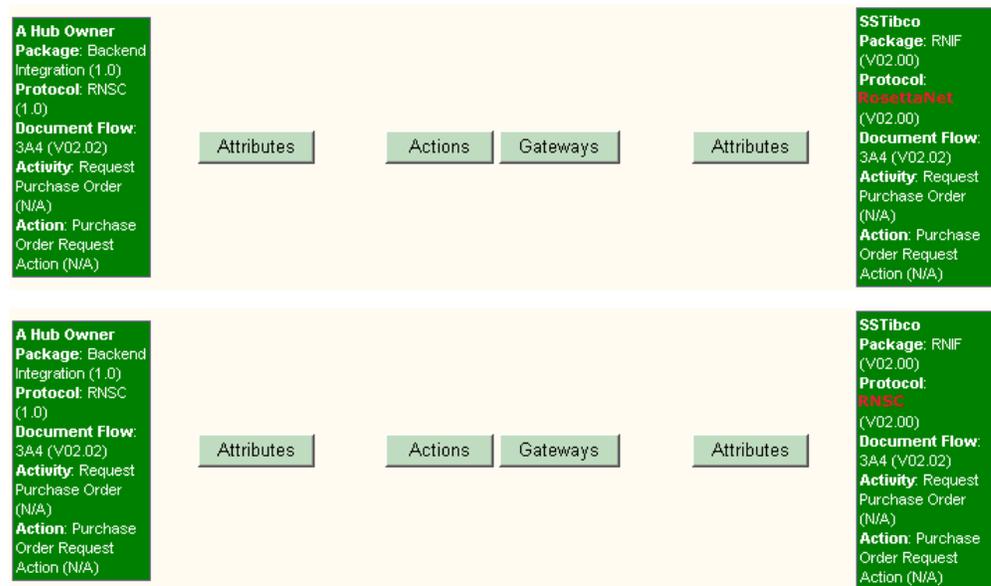
コンポーネント	説明
属性	属性とは、接続によって検証、暗号化検査、再試行カウントなどのさまざまな文書処理およびルーティングの機能で使用される情報です。
アクション	接続作成時の効率を向上させるために、新規接続の属性にマネージャーおよび参加者の B2B 機能が自動的に継承されます。アクションとは、特定文書の処理に使用される一連のステップです。各接続は通常、変換、重複検査、検証、またはパススルー・ルーティングなどの 1 つ以上のステップで構成されています。接続ごとに適切なアクションを選択できます。
ゲートウェイ	各接続には、ソース・ゲートウェイとターゲット・ゲートウェイが含まれています。ソース・ゲートウェイには、文書フローを開始する参加者の URI およびトランスポート情報が含まれています。受信確認や一般例外などのビジネス・シグナルは、ソース・ゲートウェイ経由で開始元の参加者に送信されます。ゲートウェイ・オプションの「クライアント IP の検証」および「クライアント SSL 証明書の検証」は、ソース・ゲートウェイに適用されます。
ゲートウェイ・タイプ	ターゲット・ゲートウェイには、文書フローを受信する参加者の URI およびトランスポート情報が含まれています。ゲートウェイ・タイプは、交換される文書の性質を示します。接続は、複数タイプのゲートウェイを使用して、同じ文書を複数のシステムに対して送信および処理できます。このため、1 つの組織内の複数システムで実動、テスト、またはルーティングに 1 つの接続を使用することによって、接続の効率が向上します。

接続の重複

不注意な接続の重複を避けるために、各接続は次のパラメーターに基づいて一意的に識別されます。

- ターゲット
- ソース
 - ソース・パッケージおよびバージョン
 - ソース・プロトコルおよびバージョン
 - ソース・プロセスおよびバージョン

例えば次の例では、同じソース参加者および属性と同じターゲット参加者を使用して 2 つの接続を活動化することはありません。このことは、ターゲット参加者が一方の接続で RosettaNet プロトコルを使用し、他方の接続で RNSC プロトコルを使用している場合でも同じです。この場合、ターゲットの RosettaNet プロトコルを含む接続は、ターゲットの RNSC プロトコルを含む他方の接続を使用する前に非活動化する必要があります。



接続の検索

接続にアクセスするには、接続を検索します。接続を検索するには、次の 2 通りの方法があります。

- 「接続の管理 (Managing Connections)」画面を使用して、ソースおよびターゲットを選択することによって接続を検索する。後述する『接続の基本検索の実行』を参照してください。
- システムの拡張検索機能を使用して、ビジネス ID、開始および受取のパッケージおよびプロトコル、開始および受取の文書フローなどの追加の検索条件を指定する。28 ページの『接続の拡張検索の実行』を参照してください。

接続の基本検索の実行

接続の基本検索を実行するには、次の手順に従います。ソースおよびターゲットを選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- ソースおよびターゲットは一意にする。

- ソースおよびターゲットを選択するときには、実動ゲートウェイとテスト・ゲートウェイを混用しないでください。混用するとエラーが発生します。ソースおよびターゲットは、両方とも実動ゲートウェイまたはテスト・ゲートウェイにそろえる必要があります。

1. 「アカウント管理」>「参加者の接続」の順にクリックします。「接続の管理」画面が表示されます。
2. 「ソース」の下で、ソースを 1 つ選択します。
3. 「ターゲット」の下で、ターゲットを 1 つ選択します。

注: 新規接続を作成するには、ソースおよびターゲットは一意である必要があります。

4. 「検索」をクリックして、指定した検索条件に一致する接続を検索します。
5. 接続をアクティブ化するには、「アクティブ化」をクリックします。「接続の管理」画面が表示されます。この画面には、ソースおよびターゲットのパッケージ、プロトコル、および文書フローが表示されます。ここには、クリックするとパートナー接続の状況およびパラメーターを表示して変更できるボタンも表示されます。
6. 次に示す項目を必要に応じてクリックします。

-  をクリックすると、接続が使用不可になります。

-  をクリックすると、接続が使用可能になります。

- 「属性」をクリックすると、「接続属性」画面が表示されます。ここでは、接続の属性を表示および変更できます。詳しくは、29 ページの『参加者の属性値の変更』を参照してください。

- 「アクション」をクリックすると、「接続の詳細」画面が表示されます。ここでは、アクションを表示および変更できます。詳しくは、30 ページの『新規アクションの選択』を参照してください。

- 「ゲートウェイ」をクリックすると、「接続管理ゲートウェイ」画面が表示されます。ここでは、ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイを表示および変更できます。詳しくは、30 ページの『ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイの変更』を参照してください。

接続の拡張検索の実行

接続の拡張検索を実行するには、次の手順に従います。ソースおよびターゲットを選択する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- ソースおよびターゲットは一意にする。
 - ソースおよびターゲットを選択するときには、実動ゲートウェイとテスト・ゲートウェイを混用しないでください。混用するとエラーが発生します。ソースおよびターゲットは、両方とも実動ゲートウェイまたはテスト・ゲートウェイにそろえる必要があります。
1. 「アカウント管理」>「参加者の接続」の順にクリックします。「接続の管理」画面が表示されます。
 2. 画面の右上隅にある「拡張検索」をクリックします。

3. 表 7 に示すように、次のパラメーターをすべて入力します。

表 7. 「拡張検索」画面

パラメーター	説明
参加者名で検索	ソースおよびターゲットの名前。
ビジネス ID で検索	ソースおよびターゲットのビジネス ID。DUNS、DUNS+4、および Freeform があります。
ソース・パッケージ (Source Package)	ソースによって使用されるパッケージ。
ターゲット・パッケージ (Target Package)	ターゲットによって使用されるパッケージ。
ソース・プロトコル (Source Protocol)	ソースによって使用されるプロトコル。
ターゲット・プロトコル (Target Protocol)	ターゲットによって使用されるプロトコル。
ソース文書フロー	ソースによって使用される文書フロー。
ターゲット文書フロー	ターゲットによって使用される文書フロー。
接続状況	使用可能と使用不可の両方の接続を検索できます。

4. 「検索」をクリックします。検索条件に一致する接続が検出されます。

接続構成の変更

接続の構成を変更するには、次の手順に従います。

1. 「アカウント管理」>「参加者の接続」の順にクリックします。「接続の管理」画面が表示されます。
2. 接続の基本検索 (27 ページの『接続の基本検索の実行』を参照) または接続の拡張検索 (28 ページの『接続の拡張検索の実行』) を実行します。
3. 次に示す適切なセクションを参照してください。
 - 参加者の属性値を変更するには、後述する『参加者の属性値の変更』を参照してください。
 - 新規アクションを選択するには、後述する 30 ページの『新規アクションの選択』を参照してください。
 - ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイを変更するには、30 ページの『ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイの変更』を参照してください。
 - 構成を使用不可に設定またはアクティブ化するには、30 ページの『接続の使用不能化または非アクティブ化』を参照してください。

参加者の属性値の変更

参加者の属性値を変更するには、次の手順に従います。

1. ソース参加者かターゲット参加者のいずれかの「属性」をクリックします。
2. 接続に関連したすべてのゲートウェイ・タイプに属性変更を適用する場合は、「スコープ」ドロップダウン・リストで、「接続」をクリックします。または、変更を適用するゲートウェイ・タイプを選択します。
3.  アイコンをクリックして、属性値を変更する文書フロー定義までノードを展開します。

4. 必要に応じて属性値を更新します。
5. 「保管」をクリックします。

新規アクションの選択

新規アクションを選択するには、次の手順に従います。

1. 「アクション」をクリックします。
2. ドロップダウン・リストから新規アクションを選択します。
3. 「保管」をクリックします。

ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイの変更

ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイを変更するには、次の手順に従います。

1. 「ゲートウェイ」をクリックします。
2. ドロップダウン・リストからソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイを選択します。
3. 「保管」をクリックします。

接続の使用不能化または非アクティブ化

接続を使用不可にするには、「使用可能」列の  をクリックします。接続の表示色が赤色に変わり、接続が使用不可になったことを示します。接続を再度使用可能にするには、 アイコンをクリックします。

接続を非アクティブ化するには、 アイコンをクリックします。接続の表示色がグレーに変わり、アイコンが非表示になります。接続を再度使用可能にするには、「アクティブ化」をクリックします。

除外リストの管理

除外リストを使用すると、コミュニティー・オペレーターが Document Manager を構成して、取引先からマネージャーに送信される通知を制限できます。取引先は、名前およびビジネス ID で識別されます。

次の通知をルーティング制限として選択できます。

- 0A1: 障害の通知 — 特定の文書フローを完了できない通知が参加者からマネージャーに送信されます。
- バックエンド・イベント — 参加者がビジネス文書を正常に受信したこと通知するシステム生成の XML ファイルがマネージャーに送信されます。

除外リストへの参加者の追加

参加者を除外リストに追加するには、次の手順に従います。

1. 「アカウント管理」>「除外リスト」の順にクリックします。「除外リスト」画面が表示されます。

2. 「参加者名」ドロップダウン・リストから参加者を選択します。参加者とそのビジネス ID のリスト、および除外の状況が表示されます。「すべての通知の送信」がデフォルトで選択されています。

除外リストの編集

除外リストの編集が必要な場合があります。例えば、通知をコミュニティ・マネージャーに送信するのを制限する場合があります。

1. 「アカウント管理」>「除外リスト」の順にクリックします。「除外リスト」画面が表示されます。
2. 「参加者名」ドロップダウン・リストから参加者を選択します。参加者のリスト、参加者のビジネス ID、および除外の状況が表示されます。
3. 編集する通知の横にある  アイコンをクリックします。
4. コミュニティ・マネージャーへの送信を制限する通知の下にあるチェック・ボックスをオンにします。「すべての通知の送信」を選択して、すべての送信制限を除去します。

第 4 章 ゲートウェイの管理

ゲートウェイ・キューを使用すると、ゲートウェイの配信キューに入っている文書を表示できます。配信キューに入っている文書を持つすべてのゲートウェイの表示、キュー内の文書の表示および削除、およびゲートウェイの使用可能化または使用不能化も可能です。

ゲートウェイ・キューは、時間依存の文書をキュー内に滞留させないために使用できます。また、キューに入れられる文書の数が増えないようにするためにも使用されます。ゲートウェイ・キューを使用すると、次の作業が可能になります。

- 配信キューに入っている文書を持つすべてのゲートウェイのリストを表示する。
- 長時間 (30 秒以上) ゲートウェイ・キューに置かれている文書を表示する。これにより、文書自体の問題が示されることもあります。キュー内の文書のトラブルシューティングや削除のために、文書の詳細を表示することもできます。
- ゲートウェイの詳細を表示して正常な動作を確認する。ゲートウェイ・キューでの文書バックアップは、Delivery Manager またはゲートウェイにおける障害を示している場合があります。
- ゲートウェイの状況を確認する。ゲートウェイがオフラインの場合、文書はゲートウェイがオンラインになるまでキューに集められます。ゲートウェイの状況は、接続の機能には影響を与えません。文書は継続して処理され、配信キューに置かれます。

ゲートウェイ・リストの表示

ゲートウェイに存在する文書のリストを表示するには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」 > 「ゲートウェイ・キュー」の順にクリックします。「ゲートウェイ・キュー」画面が表示されます。

2. 表 8 に示されているパラメーターを入力します。

表 8. 「ゲートウェイ・キュー」画面

検索条件	説明
キューの最小時間 (Queued at least)	文書がゲートウェイ・キューで待機する最小時間 (分)。例えば、6 分を選択すると、6 分以上配信待機している文書を持つすべてのゲートウェイが表示されます。デフォルト値は 0 です。
キューの最小数 (Minimum Queued)	ゲートウェイ・キュー内にある文書の最小数。デフォルト値は 1 です。
ソート基準	参加者 (デフォルト)、ゲートウェイ名、または最後に送信されたタイム・スタンプによって検索結果をソートします。
方向	「昇順」をクリックすると、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後から始まる文書から表示され、「降順」をクリックすると、最新のタイム・スタンプまたはアルファベットの先頭から始まる文書から表示されます。
最新表示 最新表示頻度	最新表示機能をオンまたはオフ (デフォルト) にします。 表示されているデータが更新されるまでコンソールが待機する時間 (秒)。

3. 「検索」をクリックします。ゲートウェイにある文書のうち、指定した検索条件に合致するすべての文書が検索されます。表 9 に、検索から戻される情報を示します。

表 9. ゲートウェイ・キュー検索の結果

検索条件	説明
参加者	ゲートウェイに関連した取引先。
ゲートウェイ	ゲートウェイの名前。
キュー中	ゲートウェイ・キューで配信を待つ文書の数。ゲートウェイ詳細にリンクします。
状態	ゲートウェイの状態がオンラインかオフラインかを示します。
最終送信時	文書がゲートウェイに正常に送信された最後の日時。

注: コンソールがゲートウェイを表示するには、対象となるゲートウェイは、検索条件のすべての要件を「and」で満たしている必要があります。

キュー内の文書の表示

指定した検索条件に合致するキュー内の文書を検索するには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」>「ゲートウェイ・キュー」の順にクリックします。「ゲートウェイ・キュー」画面が表示されます。
2. 「検索」をクリックします。

3. この画面で、次のパラメーターをすべて入力します。

表 10. ゲートウェイ・キューの検索条件

パラメーター	説明
参加者	文書を受信するパートナーの名前。
ゲートウェイ	ゲートウェイの名前。
参照 ID	システムによって文書に割り当てられた固有の識別番号。
文書 ID	送信元の参加者によって文書に割り当てられた固有の識別番号。
ソート基準	参加者 (デフォルト)、参照 ID、文書 ID によって検索結果、またはゲートウェイ・キューに入れられた時間依存文書によって検索結果をソートします。
方向	「昇順」をクリックすると、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後から始まる文書から表示され、「降順」をクリックすると、最新のタイム・スタンプまたはアルファベットの先頭から始まる文書から表示されます。

4. 文書の詳細を表示するには、「参照 ID」をクリックします。文書の詳細を表示しているときに表示される詳細な情報については、オンライン・ヘルプの『文書ビューアーについて (About document viewer)』というトピックを参照してください。

キューからの文書の削除

次の手順では、配信キューから文書を削除する方法について説明します。キューから文書を削除するには、ハブ管理者としてログインする必要があります。

1. 「ビューアー」>「ゲートウェイ・キュー」の順にクリックします。「ゲートウェイ・キュー」画面が表示されます。
2. 「検索」をクリックします。
3. 画面に表示されたパラメーターをすべて入力します (35 ページの表 10 を参照)。
4.  アイコンをクリックして、文書を削除します。

ゲートウェイの詳細の表示

キュー内にある文書のリストなど、特定のゲートウェイの情報を表示するには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」>「ゲートウェイ・キュー」の順にクリックします。「ゲートウェイ・キュー」画面が表示されます。
2. 検索条件を入力します (34 ページの表 8 を参照)。
3. 「検索」をクリックします。ゲートウェイのリストが表示されます。
4. 「キュー内」列にある文書カウント・リンクをクリックします。ゲートウェイの詳細とキュー内にある文書のリストが表示されます。

ゲートウェイ状況の変更

ゲートウェイをオンラインまたはオフラインにするには、次の手順に従います。

1. 「ビューアー」>「ゲートウェイ・キュー」の順にクリックします。「ゲートウェイ・キュー」画面が表示されます。
2. 検索条件を入力します (34 ページの表 8 を参照)。
3. 「検索」をクリックします。ゲートウェイのリストが表示されます。
4. 「キュー内」列にある文書カウント・リンクをクリックします。ゲートウェイの詳細とキュー内にある文書のリストが表示されます。
5. 「ゲートウェイ情報」の「オンライン」をクリックしてゲートウェイをオンラインにするか、「オフライン」をクリックしてゲートウェイをオフラインにします (ゲートウェイ状況を変更するには、ハブ管理者としてログインしている必要があります)。

第 5 章 文書フローの分析

文書分析ツールを使用すると、システム内の文書数の概要を状態別 (受信、進行中、失敗、および正常終了) に取得できます。検索条件には、日付、時刻、プロセスのタイプ (宛先プロセスまたは元プロセス)、ゲートウェイ・タイプ、プロトコル、文書フロー、およびプロセス・バージョンなどがあります。失敗した文書の特定および表示、失敗の原因の調査を行うには、検索結果を使用します。

文書ボリューム・レポートは有効なツールで、ビジネス文書のフローを管理、追跡、およびトラブルシューティングするのに使用されます。レポートでは、指定期間内にシステムで処理された文書のボリュームを表示します。レポートは表示、印刷、または保管 (エクスポート) して、他のスタッフ・メンバーに送信できます。このレポートをカスタマイズして、特定の検索条件に基づいて情報を表示できます。

参加者接続のテスト・ツールは、ゲートウェイまたは Web サーバーのテストに使用されます。

表 II. ツール

使用する機能	参照先
文書分析	37 ページ
文書ボリューム・レポート	39 ページ
参加者接続のテスト	41 ページ

文書分析

文書分析ツールを使用すると、指定期間内のシステム内の文書数の概要を状態別に取得できます。

検索条件を使用すると、失敗した文書の特定および失敗の原因の調査ができます。

「文書分析」画面には、アラームが組み込まれています。プロセスが失敗すると、失敗したプロセスを含む行が赤色で明滅します。

文書状態

次の表に、さまざまな文書状態を示します。

表 12. 文書状態

状態	説明
受信 進行中	文書はシステムに受信されて、処理待ちです。 文書は現在、次のいずれかの処理ステップにあります。 <ul style="list-style-type: none">• 未完了。例えば、他の文書を待っています。• データ検証。例えば、文書の内容を検査しています。• 変換。例えば、文書を別のプロトコルに変換しています。• キュー。例えば、文書は参加者またはコミュニティー・マネージャーに送信されるのを待っています。
失敗	文書処理は、システム、データ検証、または重複のエラーのために、中断されました。
正常終了	文書処理を完了する最終メッセージがシステムからターゲット参加者に送信されました。

システム内の文書の表示

1. 「ツール」 > 「文書分析」をクリックします。「文書分析の検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

表 13. 文書検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date & Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date & Time)	処理が完了した日時。
ソース参加者	ビジネス・プロセスを開始した参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。
ターゲット参加者	ビジネス・プロセスを受信した参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。
検索 (Search On) ゲートウェイ・タイプ	受信文書フローまたは送信文書フローを検索します。 実動またはテストなど。テストが使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル 文書フロー	参加者に対して使用できる文書プロトコル。 特定のビジネス・プロセス。
ソート基準 最新表示	受信参加者名または送信参加者名別ソート結果。 検索結果が定期的に最新表示されるかどうかを制御します (コミュニティー・マネージャーのみ)。
最新表示頻度	検索結果の最新表示頻度を制御します (コミュニティー・マネージャーのみ)。

3. 「検索」をクリックします。「文書分析の要約」が表示されます。

プロセスおよびイベント詳細の表示

1. 「ツール」 > 「文書分析」をクリックします。「文書分析の検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。「文書分析の要約」が表示されます。
4. 表示するソースおよびターゲット参加者の横の  をクリックします。選択された参加者のすべての文書が表示されます。文書数量は、文書処理状態別に列に整列されます。
5. 「受信」、「進行中」、「失敗」、または「正常終了」列の数量リンクを選択します。「文書分析レポート」に文書処理の詳細が提示されます。「失敗」を選択すると、レポートには「文書イベントの要約」も表示されます。

文書ボリューム・レポート

文書ボリューム・レポートは有効なツールで、ビジネス文書のフローを管理、追跡、およびトラブルシューティングするのに使用されます。レポートでは、指定期間内にシステムで処理された文書のボリュームを表示します。レポートは表示、印刷、または保管 (エクスポート) して、他のスタッフ・メンバーに送信できます。

このレポートをカスタマイズして、特定の検索条件に基づいて情報を表示できます。

文書ボリューム・レポートに、現在進行中の文書数が状態別に示されます。

表 14. 文書状態

値	説明
受信合計	システムに受信された文書の合計数。
進行中	進行中の文書はテストおよび検証されています。エラーは検出されませんでした。処理はまだ完了していません。
失敗	エラーのために、文書処理が中断しました。
正常終了	文書処理を完了する最終メッセージがシステムからターゲット参加者に送信されました。

次のタスクを実行するには、このレポートを使用します。

- 主要なビジネス・プロセスが完了したかどうかを判別する。
- コスト制御のために進行中ボリュームのトレンドを追跡する。
- プロセス品質を管理する - 正常終了または失敗。
- コミュニティー・マネージャーの場合は、参加者がプロセスを効率的に追跡するのを支援する。

文書ボリューム・レポートの作成

1. 「ツール」 > 「文書ボリューム・レポート」をクリックします。「文書ボリューム・レポートの検索」画面が表示されます。

2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

表 15. 文書ボリューム・レポート検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date & time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End date & time)	処理が完了した日時。
ソース参加者	ビジネス・プロセスを開始した参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。
ターゲット参加者	ビジネス・プロセスを受信した参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。
検索 (Search on) ゲートウェイ・タイプ	受信文書フローまたは送信文書フローを検索します。 実動またはテスト。テストを使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル	プロセス・プロトコルのタイプ。例えば、XML、EDI、フラット・ファイル。
文書フロー ソート基準	特定のビジネス・プロセス。 この基準 (文書フローまたはターゲット文書フロー) によるソート結果。
ページごとの結果件数	1 ページに表示されるレコードの数。

3. 「検索」をクリックします。レポートが表示されます。

文書ボリューム・レポートのエクスポート

- 「ツール」 > 「文書ボリューム・レポート」をクリックします。「文書ボリューム・レポートの検索」画面が表示されます。
- ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
- 「検索」をクリックします。レポートが表示されます。
- レポートをエクスポートするには、 をクリックします。ファイルを保管するには、必要なロケーションにナビゲートします。

注: レポートは、コンマ区切り値 (.CSV) ファイルとして保管されます。ファイル名には、サフィックス「.csv」が付きます。

レポートの印刷

- 「ツール」 > 「文書ボリューム・レポート」をクリックします。「文書ボリューム・レポートの検索」画面が表示されます。
- ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
- 「検索」をクリックします。レポートが表示されます。
- レポートを印刷するには、 をクリックします。

参加者接続のテスト

参加者接続のテスト機能を使用すると、ゲートウェイまたは Web サーバーをテストできます。コミュニティー・マネージャーの場合は、特定の参加者を選択することもできます。テストは、ゲートウェイまたは URL へのブランクの POST 要求の送信から構成されます。要求は、Yahoo の URL (www.yahoo.com) をブラウザのアドレス・フィールドに入力することと似ています。これは何も送信されず、空の要求です。ゲートウェイまたは Web サーバーから受信した応答に、その状況が示されます。

- 応答が戻される場合、サーバーは稼働しています。
- 何も戻されない場合は、サーバーは停止しています。

重要: 参加者接続のテスト機能は、接続パラメーターを必要としない HTTP で作動します。

参加者接続のテストは、次の手順で行います。

1. 「ツール」> 「参加者接続のテスト」をクリックします。「参加者接続のテスト」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストからテスト基準を選択します。

表 16. 参加者接続のテスト値

値	説明
参加者	テストされる参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。
ゲートウェイ	上記で選択した参加者に基づいて使用可能なゲートウェイを表示します。
URL	上記で選択したゲートウェイに基づいて動的にデータが取り込まれます。
コマンド	Post または Get。

3. 「URL のテスト」をクリックします。テスト結果が表示されます。戻された状況コードの詳細については、次のセクションを参照してください。

Web サーバー結果コード

200 シリーズ:

- 200 - OK - 伝送は正常終了しました。これはエラーではありません。これは要求したファイルです。
- 201 - Created - 要求は満たされて、新規リソースが作成されました。新たに作成されたリソースは、応答の URL ヘッダー・フィールドで戻された URL で参照でき、「ロケーション」ヘッダー・フィールドで指定されたリソースの最も具体的な URL を持ちます。
- 202 - Accepted - 要求は処理のために受信されましたが、処理はまだ完了していません。
- 203 - Non-Authoritative Information - エンティティ・ヘッダーで戻された META 情報は、元のサーバーから使用できる最終セットではありませんが、ローカルまたはサード・パーティーのコピーから収集されています。
- 204 - No Content - サーバーは要求を満たしましたが、送り返す新規情報はありません。

- 206 - Partial Content - ファイル内のバイトの範囲を要求しましたが、これがその範囲です。これは HTTP 1.1 の新機能です。

300 シリーズ:

- 301 - Moved Permanently - 要求されたリソースに新規の永続的な URL が割り当てられており、このリソースを将来参照するには、戻された URL の 1 つを使用します。
- 302 - Moved Temporarily - 要求されたリソースは、一時的に新規の URL に存在します。新規の URL にリダイレクトします。元のページは移動しました。これはエラーではありません。ほとんどのブラウザは、この結果が表示される場合、新規のページを隠した状態で取り出します。

400 シリーズ:

- 400 - Bad Request - 要求は誤った形式の構文なので、サーバーで認識できませんでした。クライアントにより、無効な要求が行われました。
- 401 - Unauthorized - 要求にはユーザー認証が必要です。応答には、要求されたリソースに適用できるユーザー確認を含む、WWW 認証ヘッダー・フィールドを組み込む必要があります。ユーザーは文書を要求しましたが、有効なユーザー名またはパスワードを指定していません。
- 402 - Payment Required - このコードは現在サポートされていませんが、将来の利用のために予約されています。
- 403 - Forbidden - サーバーは要求を認識しましたが、詳細不明な理由により、要求の実行を拒否しています。この文書に対するアクセスは、明示的に拒否されず (これは、要求するファイルに対して Web サーバーに読み取り権限がない場合に発生することがあります)。サーバーは、このファイルを送信することを拒否します。権限が明示的にオフになっている可能性があります。
- 404 - Not Found - サーバーは、要求された URL に一致するものを検出できませんでした。このファイルが存在しません。ブラウザに無効な URL を指定した場合に発生します。これは、許可されないユーザーに文書が存在しないと通知して、文書を保護するように指示されていた場合にも送信されます。404 エラーは存在しないページを要求した結果であり、間違っって入力した URL、その場所に存在しなくなったファイルをポイントするブックマーク、robots.txt (検索エンジンで索引付けしないページをマーク付けするのに使用される) を検索する検索エンジン、ファイル名を推測するユーザー、使用するサイトまたは他のサイトからの無効なリンク、などから発生する場合があります。
- 405 - Method Not Allowed - 要求行で指定されたメソッドは、要求 URL で識別されるリソースには許可されません。
- 406 - None Acceptable - サーバーは要求 URL に一致するリソースを検出しましたが、受け入れまたは受け入れエンコード要求ヘッダーで識別される条件を満たすリソースは検出できません。
- 407 - Proxy Authentication Required - このコードは、将来の利用のために予約されています。これは 401 (Unauthorized) と似ていますが、クライアントは最初にプロキシで自分自身を認証する必要があります。HTTP 1.0 には、プロキシ認証の手段はありません。
- 408 - Request Time out - クライアントは、サーバーが待機を準備していた時間内に要求を作成しませんでした。

- 409 - Conflict - 要求は、現在のリソースの状態と競合するために、完了できませんでした。
- 410 - Gone - 要求されたリソースはサーバーで使用できなくなり、転送先アドレスが不明です。
- 411 - Authorization Refused - クライアントから提供された要求証明書は、サーバーにより拒否されたか、またはリソースにアクセスする許可を認可するのに不十分です。
- 412 - Precondition Failed
- 413 - Request Entity Too Large
- 414 - Request URI Too Large
- 415 - Unsupported Media Type

500 シリーズ:

- 500 - Internal Server Error - サーバーは、要求を満たすことができない、予期しない条件を検出しました。Web サーバーで何か間違いがあり、意味のある応答を返せませんでした。このエラーを修正するためにブラウザ側から行えることは通常ありません。おそらくサーバー管理者がサーバーのエラー・ログを調べて、何が発生したかを確認する必要があります。これは、正しくコーディングされていなかった CGI スクリプトのエラー・メッセージであることがよくあります。
- 501 - Method Not Implemented - サーバーは、要求を満たすのに必要な機能をサポートしていません。アプリケーション・メソッド (GET または POST) が実装されていません。
- 502 - Bad Gateway - サーバーは、要求を満たそうとしてアクセスしたゲートウェイまたはアップストリーム・サーバーから無効な応答を受信しました。
- 503 - Service Temporarily Unavailable - サーバーは、一時的に過負荷または保守中なので、現在要求を処理できません。サーバーはリソース不足です。
- 504 - Gateway Time out - サーバーは、要求を完了しようとしてアクセスしたゲートウェイまたはアップストリーム・サーバーから時間どおりに応答を受信しませんでした。
- 505 - HTTP Version Not Supported

第 6 章 イベントおよび文書の表示

ビューアー・モジュールには、次の機能が組み込まれています。

- イベント・ビューアー
- RosettaNet ビューアー
- AS1/AS2 ビューアー
- 文書ビューアー

これらの機能により、システム全体の正常性を表示できます。イベント解決のためのトラブルシューティング・ツールでもあります。

特定のイベントを検索して、そのイベントの発生原因を調査できます。イベント・ビューアーを使用すると、時刻、日付、イベント・タイプ、イベント・コード、およびイベント・ロケーションごとにイベントを調査できます。ハブ管理者は、参加者、ソース IP、およびイベント IP ごとに検索することもできます。

イベント・ビューアーが生成するデータにより、特にイベント・コード、タイム・スタンプ、ソース IP を識別し、イベントや文書の詳細を表示して問題を診断できます。ロー文書を表示して、フィールド、値、およびエラーの理由を確認することもできます。

イベントを生成した特定のプロセスを検索するには、RosettaNet ビューアーを使用します。ターゲットのプロセスを特定すると、プロセスの詳細とロー文書を表示できます。

AS1 または AS2 通信プロトコルを使用して文書のトランスポート情報を検索および表示するには、AS1/AS2 ビューアーを使用します。メッセージ ID、MDN (Message Disposition Notification) の宛先 URI と状況、および文書の詳細 (文書およびラッパー) を表示できます。

文書ビューアーは、調査する特定の文書を検索して表示するときに使用します。文書は、日付、時刻、プロセスのタイプ (元プロセスまたは宛先プロセス)、参加者接続、ゲートウェイ・タイプ、文書の状況、プロトコル、文書の流れ、およびプロセスのバージョンに基づいて検索できます。検索結果には、検索条件に一致するすべての文書が表示され、タイム・スタンプ、プロセス、参加者接続、およびゲートウェイの種類を特定できます。ターゲットの文書を検索して、ロー文書を表示するビューアーの機能を使用します。

注: 参加者という用語は、ビューアー画面でコミュニティー・マネージャーなどのハブ・コミュニティー・メンバーを識別するのに使用します。

RosettaNet ビューアーおよび AS1/AS2 ビューアーには、ハブ管理者用の追加の検索条件が含まれています。詳細については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

表 17. ビューアー

使用する機能	参照先
イベント・ビューアー	46 ページ
RosettaNet ビューアー	51 ページ
AS1/AS2 ビューアー	53 ページ
文書ビューアー	53 ページ

イベント・ビューアー

イベントを表示および検索するには、イベント・ビューアーを使用します。

イベントは、システムに何らかの異常が発生したことを知ることができます。イベントにより、システム操作または機能が正常であったかどうか (例えば、参加者がシステムに正常に追加されたか、またはコミュニティー・マネージャーと参加者との間の参加者接続が正常に作成されたかなど) がわかります。イベントによって問題を確認することもできます (例えば、システムが文書进行处理できなかった、またはシステムが文書内で重要ではないエラーを検出したなど)。大半の文書は何回か再送されるため、文書に障害が発生してアラートが生成された場合、それは、以後同じような障害が発生するのを防ぐために調査および対応が必要な障害です。

WebSphere Business Integration Connect には、事前定義イベントが用意されています。イベント・ベースのアラートを作成するには、アカウント管理モジュールに含まれている、この製品のアラート機能を使用します。このプロセスは、ユーザーにとって重要なイベントを識別します。その後、同じくアカウント管理モジュールに含まれている連絡先機能を使用して、これらのイベントが発生した場合にシステムから通知されるスタッフのメンバーを識別します。

イベント・ビューアーは、特定の検索条件に基づいてイベントを表示します。特定のイベントを検索して、そのイベントの発生原因を調査できます。イベント・ビューアーを使用すると、時刻、日付、イベント・タイプ (デバッグ、通知、警告、エラー、重大)、イベント・コード (210031 など)、およびイベント・ロケーションごとにイベントを調査できます。

イベント・ビューアーを介して使用できるデータには、イベント名、タイム・スタンプ、ユーザー、および参加者の情報が含まれています。これらのデータは、イベントを作成した文書またはプロセスを識別するのに役立ちます。イベントが文書に関連している場合は、ロー文書を表示することもできます。これにより、フィールド、値、およびエラーの理由を確認できます。

イベント・タイプ

WebSphere Business Integration Connect には、次のイベント・タイプがあります。

表 18. イベント・タイプ

イベント・タイプ	説明
デバッグ・イベント	デバッグ・イベントは、下位システムの操作およびサポートのために使用されます。このイベントの可視性および用途は、ユーザーの権限レベルによって変わります。すべてのユーザーがデバッグ・イベントへのアクセス権を所有しているわけではありません。
通知	通知イベントは、システム操作が正常に終了すると生成されます。これらのイベントは、現在処理中の文書の状況を示すときにも使用されます。通知イベントにはユーザー処置は必要ありません。
警告	警告イベントが発生するのは、文書処理またはシステム機能において、動作を継続できる重大ではない異常が発生した場合です。
エラー	エラー・イベントが発生するのは、文書処理においてプロセス強制終了の原因となる異常が発生した場合です。
重大	重大イベントは、システム障害によってサービスが強制終了すると生成されます。重大イベントが生成されると、サポート要員による操作が必要になります。

イベント・ビューアー・タスクの実行

表 19. イベント・ビューアーのタスク

実行する作業	参照先
イベントの検索	47 ページ
イベント詳細の表示	48 ページ

イベントの検索

1. 「ビューアー」>「イベント・ビューアー」の順にクリックします。

イベントは、「イベント・ビューアー検索」画面の左から右へ重大度の順に編成されます。左側に表示される「通知」が最も重大度の低いイベント・タイプです。右側に表示されている「重大」は、重大度が最も高いイベント・タイプです(デバッグ・イベントは必ずしもすべてのユーザーに表示されるわけではありません)。イベントを選択すると、そのイベントと、それより重大度の高いすべてのイベントがイベント・ビューアーに表示されます。例えば、検索条件に警告イベント・タイプを選択すると、警告、エラー、重大のイベントが表示されます。通知イベントを選択すると、すべてのイベント・タイプが表示されます。

2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

表 20. イベントの検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date and time)	最初のイベントが発生した日時。デフォルト値は 10 分前です。
終了日および終了時刻 (End date and time)	最後のイベントが発生した日時。
参加者	すべての参加者または特定の参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ) を選択します。
イベント・タイプ	イベントのタイプ。デバッグ、通知、警告、エラー、重大のいずれかです。
イベント・コード	選択されたイベント・タイプに基づいて使用可能なイベント・コードを検索します。
イベント・ロケーション	イベントが生成された場所。すべて、不明、ソース (元)、ターゲット (先) があります。
ソート基準 降順	結果をソートするのに使用する値。 降順でソートするか昇順でソートするかの指定。
ページごとの結果件数	1 ページに表示されるレコードの数。
最新表示	デフォルト設定はオフです。「最新表示」をオンにすると、イベント・ビューアーはまず新規照会を実行し、その後最新表示モードを持続します。
最新表示頻度	検索結果の最新表示頻度を制御します (コミュニティー・マネージャーのみ)。

3. 「検索」をクリックします。イベントのリストが表示されます。

ヒント: イベント・リストは、「イベント・ビューアー」画面の上部で選択したイベント・タイプに基づいて、再度フィルター処理できます。次の画面の最新表示を実行すると、新たに選択されたイベント・タイプが反映されません。

イベント詳細の表示

- 「ビューアー」>「イベント・ビューアー」の順をクリックします。
- ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
- 「検索」をクリックします。イベントのリストが表示されます。
- 表示するイベントの横にある  アイコンをクリックします。イベント詳細と関連文書が表示されます。
- 表示する文書が存在する場合、文書の横にある  アイコンをクリックします。
- ロー文書が存在する場合、この文書を表示するには  をクリックします。
- 検証エラーを表示するには、 をクリックします。

ヒント: 「イベント・ビューアー詳細 (Event Viewer Detail)」に重複文書のイベントが表示された場合は、「文書の詳細」の  を選択して、以前に送信された元の文書を表示します。

AS1/AS2 ビューアー

AS1 または AS2 (Applicability Statement 1 または 2) 通信プロトコルを使用する、パッケージ化された B2B トランザクションおよび B2B プロセスの詳細を表示するには、AS1/AS2 ビューアーを使用します。B2B プロセスと、関連するビジネス文書、確認通知シグナル、プロセス状態、HTTP ヘッダー、および送信済み文書の内容の振り付けを表示できます。

SMTP を使用するデータ伝送の標準を定義する先行版の AS1 と同様に、AS2 は、HTTP を使用するデータ伝送の標準を定義します。

AS2 では、データの接続方法、配信方法、検証方法、およびデータへの応答方法が定められています。AS2 は、文書の内容とは関係なく、文書の伝送にのみ関係があります。AS2 では、HTTP または HTTPS を使用してインターネット経由で文書を伝送できるよう、文書を囲んでラッパーが作成されます。文書とラッパーをまとめてメッセージと呼びます。AS2 には、HTTP パケットのセキュリティーを確保し、暗号化を行なう機能があります。AS2 のもう 1 つの利点は、FTP には存在しないセキュリティー手段を提供することです。AS2 の暗号化では、暗号化の基本に確実な配信がプラスされています。

AS2 の重要なコンポーネントは、MDN (Message Disposition Notification) と呼ばれる受信メカニズムです。このメカニズムにより、文書の送信側は、受信側が文書を正常に受信したことを確認できます。送信側は、MDN の返送方法 (同期または非同期、署名付きまたは未署名) を指定します。

注: 暗号化された着信 AS2 文書の復号に失敗すると、障害 MDN は戻されません。この問題を訂正するには、2 つの参加者の AS バイナリー機能間の参加者接続を、使用するかどうかに関係なく、アクティブにする必要があります。AS バイナリー機能が使用可能でない場合は、両参加者間に対して使用可能にして、その参加者間の参加者接続をアクティブにする必要があります。

AS1/AS2 ビューアーを使用すると、文書の詳細だけでなく、メッセージ ID、タイム・スタンプ、文書フロー、ゲートウェイ・タイプ、同期の状況を表示できます。文書の詳細を表示すると、追加の文書処理情報が表示されます。

AS1/AS2 ビューアーのタスクの実行

表 21. AS1/AS2 ビューアーのタスク

実行する作業	参照先
メッセージの検索	52 ページ
RosettaNet プロセスの詳細の表示	52 ページ
ロー文書の表示	53 ページ

メッセージの検索

1. 「ビューアー」 > 「AS1/AS2 ビューアー」の順にクリックします。「AS1/AS2 ビューアー」画面が表示されます。

2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

表 22. AS1/AS2 ビューアーの検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date and Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date and Time)	処理が完了した日時。
ソース参加者およびターゲット参加者	ソース (開始) 参加者とターゲット (受取) 参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。 検索の適用範囲をすべての参加者にするか、コミュニティー・マネージャー (参加者のみ) にするかを指定します。
役割 (My role is the)	検索する文書の参加者がターゲットかソースか (参加者のみ) を指定します。
開始ビジネス ID ゲートウェイ・タイプ	ソース参加者のビジネス識別番号 (例: Duns)。 実動またはテスト。テストが使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
パッケージ	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
プロトコル	参加者に対して使用できる文書フォーマット (例: XML の RosettaNet)。
文書フロー メッセージ ID	特定のビジネス・プロセス。 AS1 または AS2 のパッケージ済み文書に割り当てられた ID 番号。検索条件には、アスタリスク (*) のワイルドカードを使用できます。最大長は 255 文字です。
同期フィルター (Synchronous Filter)	同期モードで受信した文書を検索します。これは、イニシエーターと文書マネージャーとの接続が、トランザクション (要求や MDN (Message Disposition Notification) など) が完了するまでオープン状態で維持されることを意味します。
ソート基準 降順または昇順 (Descend or Ascend)	この値によって結果を並べ替えます。 昇順では、最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後を最初に表示します。 降順では、最新のタイム・スタンプまたはアルファベットの先頭を最初に表示します。
ページごとの結果件数	1 ページに表示されるレコードの数を選択するのに使用します。

3. 「検索」をクリックします。メッセージのリストが表示されます。

メッセージの詳細の表示

1. 「ビューアー」 > 「AS1/AS2 ビューアー」の順にクリックします。「AS1/AS2 ビューアー」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。メッセージのリストが表示されます。
4. 表示するメッセージの横にある  アイコンをクリックします。メッセージとその関連文書の詳細が表示されます。

表 23. ASI/AS2 ビューアー: パッケージの詳細

値	説明
メッセージ ID	AS1 または AS2 のパッケージ済み文書に割り当てられた ID 番号。この番号で識別できるのは、パッケージのみです。文書自体には、文書の詳細を表示すると表示される個別の文書 ID 番号があります。最大長は 255 文字です。
ソース参加者	ビジネス・プロセスを開始する参加者。
ターゲット参加者	ビジネス・プロセスを受け取る参加者。
開始タイム・スタンプ (Initiating Time Stamp)	文書の処理が開始された日時。
ゲートウェイ・タイプ	実動またはテスト。テストが使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
MDN URI	MDN の宛先アドレス。このアドレスには、HTTP URI または E メール・アドレスを指定できます。
MDN 処理テキスト	このテキストは、発信メッセージの受信状況 (正常または失敗) を示します。例を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • Automatic=action/MDN-sent-automatically; processed. • Automatic-action/MDN-sent-automatically;processed/Warning;duplicate-document. • Automatic-action/MDN-sent-automatically;processed/Error;description-failed. • Automatic-action/MDN-sent-automatically;failed:unsupported MIC-algorithms.

5. (オプション) ロー文書を表示するには、 をクリックします。

RosettaNet ビューアー

RosettaNet は、e-ビジネス・トランザクションの業界標準を作成した企業グループです。PIP (Participant Interface Process) には、ハブ・コミュニティのメンバー間のビジネス・プロセスが定義されます。各 PIP では、特定のビジネス文書と、コミュニティ・マネージャーと参加者間のビジネス文書の処理方法が定められています。

RosettaNet ビューアーは、ビジネス・プロセスを構成する文書の振り付けを表示します。RosettaNet ビューアーを使用して表示できる値には、プロセスの状況、詳細、ロー文書、関連するプロセス・イベントなどがあります。

RosettaNet ビューアーは、特定の検索条件に基づいてプロセスを表示します。

RosettaNet ビューアーのタスクの実行

表 24. RosettaNet ビューアーのタスク

実行する作業	参照先
RosettaNet プロセスの検索	52 ページ
RosettaNet プロセスの詳細の表示	52 ページ
ロー文書の表示	53 ページ

RosettaNet プロセスの検索

1. 「ビューアー」 > 「RosettaNet ビューアー」の順にクリックします。
「RosettaNet ビューアー検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

表 25. RosettaNet の検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start Date and Time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End Date and Time)	処理が完了した日時。
ソース参加者およびターゲット参加者	ソース (開始) 参加者とターゲット (受取) 参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。 検索の適用範囲をすべての参加者にするか、コミュニティー・マネージャー (参加者のみ) にするかを指定します。
役割 (My role is the)	検索する文書の参加者がターゲットかソースか (参加者のみ) を指定します。
開始ビジネス ID ゲートウェイ・タイプ	開始参加者のビジネス識別番号 (例: DUNS)。 実動またはテスト。テストが使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
プロトコル 文書フロー プロセス・インスタンス ID	参加者に対して使用できるプロトコル。 特定のビジネス・プロセス。 プロセスに割り当てられた固有の識別番号。検索条件には、アスタリスク (*) のワイルドカードを使用できます。
ソート基準	例えば、受信時刻のタイム・スタンプなどで結果をソートします。
降順または昇順 (Descend or Ascend)	昇順 (Ascend) - 最も古いタイム・スタンプまたはアルファベットの最後を最初に表示します。 降順 (Descend) - 最新のタイム・スタンプまたはアルファベットの先頭を最初に表示します。
ページごとの結果件数	1 ページ当たりの結果の数を表示します。

3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致した RosettaNet プロセスが表示されます。

RosettaNet プロセスの詳細の表示

1. 「ビューアー」 > 「RosettaNet ビューアー」の順にクリックします。
「RosettaNet ビューアー検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

3. 「検索」をクリックします。検索結果が表示されます。

表 26. 文書処理の詳細

値	説明
参加者	ビジネス・プロセスに関与している参加者。
タイム・スタンプ	最初の文書の処理が開始された日時。
文書フロー	特定のビジネス・プロセス (例: RosettaNet (1.1): 3A7)。
ゲートウェイ・タイプ	例えば、実動など。
プロセス・インスタンス ID	開始コミュニティー・メンバーごとにプロセスに割り当てられる固有の番号。
文書 ID	送信参加者によって割り当てられる専有文書 ID。このフィールドの保管場所は固定されておらず、文書タイプによって異なります。
ソース参加者	開始参加者。
ターゲット参加者	受取参加者。

4. 表示する RosettaNet プロセスの横にある  アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細と関連文書が表示されます。

5. 表示する文書の横にある  アイコンをクリックします。文書とその関連イベントの詳細が表示されます。

ロー文書の表示

1. 「ビューアー」 > 「RosettaNet ビューアー」の順にクリックします。「RosettaNet ビューアー検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。プロセスのリストが表示されます。
4. 表示するプロセスの横にある  アイコンをクリックします。選択したプロセスの詳細と関連文書が表示されます。
5. 「文書フロー」の横にある  をクリックして、ロー文書を表示します。

制約事項: ロー文書のうち、100K を超える部分は切り捨てられます。例えば、署名がロー文書 (.rno ファイル) の末尾にあり、ロー文書のサイズが 100K を超えるか、または署名が .rno ファイルの先頭から 100K 以降に存在する場合、署名は文書ビューアーに表示されません。

ヒント:

- 処理できなかった文書のトラブルシューティングを行なうには、56 ページの『データ検証エラーの表示』を参照してください。
- ロー文書のビューアーは、HTTP ヘッダーを付けてロー文書を表示します。

文書ビューアー

プロセスを構成する個々の文書を表示するには、文書ビューアーを使用します。検索条件を使用すると、ロー文書や関連の文書処理の詳細およびイベントを表示できます。

cXML 文書の詳細を表示する場合、選択した要求または応答に関連するすべての文書は、「関連した文書」ヘッダーの下に表示されます。拡大鏡アイコンは、最初の文書には表示されなくなります。つまり、前述した詳細に現在表示されている文書のことです。

表 27. 文書ビューアーのタスク

実行する作業	参照先
文書の検索	47 ページ
文書の詳細、イベント、およびロー文書の表示	55 ページ
データ検証エラーの表示	56 ページ
プロセスの停止機能の使用	57 ページ

文書の検索

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。

表 28. 文書ビューアーの検索条件

値	説明
開始日および開始時刻 (Start date and time)	処理が開始された日時。
終了日および終了時刻 (End date and time)	処理が完了した日時。
ソース参加者およびターゲット参加者	ソース (開始) 参加者とターゲット (受取) 参加者 (コミュニティー・マネージャーのみ)。
役割 (My role is the)	検索の適用範囲をすべての参加者にするか、コミュニティー・マネージャー (参加者のみ) にするかを指定します。
検索 (Search on) ゲートウェイ・タイプ	検索する文書の参加者がターゲットかソースか (参加者のみ) を指定します。
文書状況	開始または受取の文書フローを検索します。
パッケージ	実動またはテスト。テストが使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
プロトコル	システムにおける現在の文書の状況。失敗、正常、進行中、またはすべて。
文書フロー	文書フォーマット、パッケージ化、暗号化、およびコンテンツ・タイプ識別番号について説明します。
文書 ID	参加者に対して使用できるプロセス・プロトコルのタイプ。
同期フィルター (Synchronous Filter)	特定のビジネス・プロセス。
ソート基準	ソース参加者によって作成されます。検索条件には、アスタリスク (*) のワイルドカードを使用できます。
ページごとの結果件数	同期モードで受信した文書を検索します。これは、イニシエーターと文書マネージャーとの接続が、トランザクション (要求と肯定応答、要求と応答など) が完了するまでオープン
降順	の状態を維持されることを意味します。
	結果をソートするのに使用する値。
	1 ページに表示されるレコードの数。
	降順でソートするか昇順でソートするかの指定。

注: 警告イベントはデフォルトで表示されます。すべてのイベントを参照するには、「デバッグ」を選択します。

3. 「検索」をクリックします。検索条件に一致する文書のリストが表示されます。

表 29. 文書ビューアーによって使用可能な文書情報

値	説明
参加者	ビジネス・プロセスに関与するソース (開始) 参加者とターゲット (受取) 参加者。
タイム・スタンプ	文書の処理が開始された日時および終了した日時。
文書フロー	トランザクション処理中のビジネス・プロセス。
ゲートウェイ・タイプ	実動またはテスト。テストが使用できるのは、テスト・ゲートウェイ・タイプをサポートするシステムのみです。
同期	同期モードで受信した文書を識別します。これは、イニシエーターと文書マネージャーとの接続が、トランザクション (要求と肯定応答、要求と応答など) が完了するまでオープン状態で維持されることを意味します。

文書の詳細、イベント、およびロー文書の表示

1. 「ビューアー」>「文書ビューアー」の順にクリックします。「文書ビューアー検索」画面が表示されます。
2. ドロップダウン・リストから検索条件を選択します。
3. 「検索」をクリックします。文書のリストが表示されます。

- 文書の詳細やイベントを表示するには、その文書の横にある  アイコンをクリックします。選択した文書のプロセスの詳細とイベントが表示されます。イベントの詳細を表示するには、青色の矢印アイコンをクリックしてください。
- HTTP ヘッダー付きのロー文書を表示するには、文書の横にある  をクリックします。ロー文書の内容が表示されます。

文書の詳細を表示すると、次に示す文書処理情報が表示されます。

表 30. 文書ビューアーによって使用可能な文書処理の値

値	説明
参照 ID	システムによって文書に割り当てられた固有の識別番号。
文書 ID	ソース参加者によって文書に割り当てられた固有の識別番号。
文書のタイム・スタンプ	参加者によって文書が作成された日時。
ゲートウェイ	文書が通過するゲートウェイ。
接続文書フロー	参加者のビジネス要件と文書との互換性を確保するために、システムによって文書に実行されるアクション。
ソースおよびターゲット (Source and Target)	ビジネス・プロセスに関与しているソース参加者およびターゲット参加者。
入力タイム・スタンプ	システムが参加者から文書を受信した日時。
終了状態タイム・スタンプ	システムがターゲット参加者に対して文書を正常に送信した日時。
ソースおよびターゲットのビジネス ID (Source and Target Business ID)	ソース参加者およびターゲット参加者のビジネス識別番号 (例: DUNS)。

表 30. 文書ビューアーによって使用可能な文書処理の値 (続き)

値	説明
ソースおよびターゲットの文書フロー (Source and Target Document Flow)	ソース参加者とターゲット参加者との間でトランザクションが処理される特定のビジネス・プロセス。

制約事項: ロー文書のうち、100K を超える部分は切り捨てられます。例えば、署名がロー文書 (.rno ファイル) の末尾にあり、ロー文書のサイズが 100K を超えるか、または署名が .rno ファイルの先頭から 100K 以降に存在する場合、署名は文書ビューアーに表示されません。

ヒント: 重複文書のイベントが表示されている場合は、重複文書イベントの横にある青色の矢印アイコンを選択して、以前送信された元の文書を表示し、 を選択します。

ヒント: 処理できなかった文書のトラブルシューティングを行なうには、56 ページの『データ検証エラーの表示』を参照してください。

データ検証エラーの表示

検証エラーが含まれている XML フィールドで色分けされたテキストを使用すると、処理できなかった文書をすばやく検索できます。検証エラーが含まれるフィールドは、**赤色**で表示されます。ネストされた XML フィールド内で異なる検証エラーが最大 3 種類発生した場合、エラー・フィールドを区別するために次の色が使用されます。

表 31. 色分けされた文書検証エラー

値	説明
赤色	第 1 の検証エラー
オレンジ色	第 2 の検証エラー
緑色	第 3 の検証エラー

ネストされた XML 検証エラーの例を次に示します。

Contact information
データ・エレメントは、このタグの位置が間違っているので、最初の検証エラーです。正しい位置は、*PartnerRoleDescription* の直後です。

FreeFormText
データ・エレメントは、このタグが重複しているため、2 番目の検証エラーです。

John
データ・エレメントは、少なくとも 6 文字が必要なフィールドなので、3 番目の検証エラーです。

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><!DOCTYPE Pip3 A7PurchaseOrderUpdateNotification
SYSTEM "3A7_MS_V02_00_PurchaseOrderUpdateNotification.dtd">
<Pip3A7PurchaseOrderUpdateNotification>
  <fromRole>
    <PartnerRoleDescription>
      <GlobalPartnerRoleClassificationCode>Seller<GlobalPartnerRoleClassificationCode>
    <PartnerDescription>
      <ContactInformation>
        <ContactName>
          <FreeFormText>John</FreeFormText>
          <FreeFormText>John</FreeFormText>
        </ContactName>
        <EmailAddress>John@example.com<EmailAddress>
        <telephoneNumber>
          <CommunicationsNumber>+1-234-567-8998-8</CommunicationsNumber>
          </telephoneNumber>
          <facsimileNumber>
            <CommunicationsNumber>+1-234-567-8998-7</CommunicationsNumber>
            </facsimileNumber>
          </ContactInformation>
        <BusinessDescription>
          <GlobalBusinessIdentifier>123456789</GlobalBusinessIdentifier>
          <GlobalSupplyChainCode>InformationTechnology</GlobalSupplyChainCode>
          <BusinessDescription>
            <GlobalPartnerClassificationCode>Carrier</GlobalPartnerClassificationCode>
          </BusinessDescription>
        </PartnerDescription>
      </PartnerRoleDescription>
    
```

ネストされていない XML 検証エラーの例は次のとおりです。

EmailAddress データ・エレメントは、このタグの位置が間違っているため、最初のネスト化されない検証エラーです。正しい位置は、*ContactInformation* の直後です。

```

<billTo>
  <PartnerRoleDescription>
    <EmailAddress>frances@sample.com</EmailAddress>
    <ContactInformation>
      <contactName>
        <FreeFormText>String</FreeFormText>
      </contactName>
      <facsimileNumber>
        <CommunicationsNumber>String</CommunicationsNumber>
      </facsimileNumber>
      <telephoneNumber>
        <CommunicationsNumber>+888-999-0000</CommunicationsNumber>
      </telephoneNumber>
    </ContactInformation>
  </billTo>
  
```

電話番号データ・エレメントは、このフィールドにはさらに国別コードの 2 文字が必要なので、2 番目のネスト化されない検証エラーです。

ロー文書の検証エラーを表示するには、53 ページの『ロー文書の表示』を参照してください。

制約事項: コンソールに表示される内容は、ロー文書の先頭の 100KB のみです。100KB を超える検証エラーは表示できません。

プロセスの停止機能の使用

現在進行中の文書の処理を途中で停止させるには、「プロセスの停止 (Stop Process)」をクリックします。この機能はハブ管理者ユーザーのみ使用可能です。

注: 文書の処理を途中で停止させるには、最大で 1 時間かかります。この間、文書ビューアーは文書の状況を進行中として表示し続けます。

第 7 章 実動トラフィックのシミュレーション

Community Participant Simulator (CPS) は、ハブ・コミュニティが稼働する前後に使用可能で、コミュニティ・マネージャーとコミュニティ参加者との実動トラフィック (要求、応答、および確認通知) のシミュレーションを実行します。

CPS の目的は、次のとおりです。

- RN 要求をハブを経由してコミュニティ・マネージャーに送信するコミュニティ参加者をシミュレートする手段を提供する。
- RosettaNet Service Content (RNSC) をハブを経由してコミュニティ参加者に送信するコミュニティ・マネージャー・エンタープライズ・システムをシミュレートする手段を提供する。

コミュニティ・マネージャーの管理者ユーザーであるマネージャー管理者は、CPS を使用して、文書のフォーマット設定が正しいことや、文書に有効なビジネス・コンテンツが含まれていることを確認します。

CPS を使用すると、コミュニティ・マネージャーは、バックエンド・アプリケーションからテストを開始したり、参加者にデータの送信を要求したりせずに、バックエンド・システム (ルーターおよび Receiver) をテストできます。その結果、コミュニティ・マネージャーはテスト・システムや技術サポート要員を確保しなくてもテストを実行できます。

テストを開始するには、マネージャー管理者がテスト文書をアップロードします。この機能が使用できるのは、RNIF v2.0 のみです。RNIF 1.1 との互換性はありません。テスト文書は、RosettaNet サービス・コンテンツ・ファイルである必要があります。RNO (RosettaNet オブジェクト) をアップロードすることはできません。サービス・コンテンツは、RosettaNet ビジネス・メッセージのペイロードの主要コンポーネントです。これは、特定の PIP によって指定されたビジネス・コンテンツを表す XML 文書です。ペイロードには、添付ファイルも含まれます。WebSphere Business Integration Connect は、テスト文書を使用してルーティング情報や処理情報を識別します。

CPS では、受信肯定応答は生成されません。3A4 確認が CPS に送信されると、Document Manager は 0A1 との交換を終了します。

インストール・プロセスは、テスト・プロセスの間に肯定応答を受け取るためにリンク・ゲートウェイ (つまり、ビット・パケット) を作成します。

```
http://<hostname>:<port#>/console/sink
```

または

```
https://<hostname>:<port#>/console/sink
```

テスト・プロセスの準備

テスト・プロセスを開始する前に、次のタスクを実行しておく必要があります。タスクは、シミュレートしている役割、コミュニティー・マネージャーからの要求または応答、参加者からの要求または応答によって異なります。詳しくは、61 ページの『テスト・シナリオの設定』を参照してください。

- VTP デジタル証明書を次のファイル・システムにコピーします。
`/opt/data/vcrouter/vms/security/vtp`

この証明書は、CA から取得するか、自己署名することができます。

`bcg_console.properties` ファイルにある `vtp` の値を編集します。

`bcg_router.properties` ファイルの `bcg.certs.vtp.CertificateDir` ロケーションを編集します。

Business Integration Connect は、データベース内の各参加者の VTP デジタル証明書を自動的に読み込むため、これによって管理者はすべての参加者に通知できません。これらの証明書はコンソール上には表示されません。

- ゲートウェイおよび接続が構成されていることと、これらが正常に機能していることを確認します。
- ターゲットが使用可能で、メッセージを受け取るための適切な URL で構成されていることを確認します。異なるターゲットには、異なるトラフィックが発生します。ターゲットの URL が誤っていると、文書は処理されません。

この要件が適用されるのは、応答が必要な文書をテストする場合のみです。

ターゲットの詳細については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

- テスト文書のヘッダーに表示されるビジネス ID を確認します。ビジネス ID は、ルーティング・プロセスを駆動します。ビジネス ID は、文書の送信先を制御します。

例えば、文書を自分自身、つまりコミュニティー・マネージャーに送信する場合は、文書ヘッダーの「宛先」ビジネス ID を自分自身のビジネス ID にする必要があります。システムは、「宛先」のビジネス ID を使用して、正しい接続を検索します。

次に示すのは、テスト文書中の「元」ビジネス ID と「宛先」ビジネス ID の例です (関係のない行は削除されています)。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE Preamble SYSTEM "3A4_MS_V02_02_PurchaseOrderRequest.dtd">
<Pip3A4PurchaseOrderRequest>
  <fromRole>
    <GlobalBusinessIdentifier>987654321</GlobalBusinessIdentifier>
  <toRole>
    <GlobalBusinessIdentifier>567890123</GlobalBusinessIdentifier>
```

テスト・シナリオの設定

CPS を使用すると、コミュニティ・マネージャーと参加者との間で、次のシナリオをテストできます。

表 32. テスト・シナリオ

シナリオ	接続の宛先	URL
コミュニティ・マネージャーから参加者への片方向アウトバウンド。	VTP_Owner	VTP_OWNER
コミュニティ・マネージャーをシミュレートします。 参加者からコミュニティ・マネージャーへの片方向インバウンド。	VTP_TP	このシナリオには適用されません。
参加者をシミュレートします。 コミュニティ・マネージャーから参加者への双方向アウトバウンド (アップロード要求)。	VTP_Owner	VTP_OWNER
コミュニティ・マネージャーをシミュレートします。 参加者からコミュニティ・マネージャーへの双方向インバウンド (アップロード要求)。	VTP_TP	VTP_TP
参加者をシミュレートします。 コミュニティ・マネージャーから参加者への双方向アウトバウンド (アップロード応答)。	VTP_TP	VTP_TP
参加者をシミュレートします。 参加者からコミュニティ・マネージャーへの双方向インバウンド (アップロード応答)。	VTP_Owner	VTP_Owner
所有者をシミュレートします。		

サンプル・シナリオ

ここでは、2 つの片方向 RosettaNet (RN) 対話をシミュレートするために、CPS の構成に関する手順を説明します。ここでは手順を詳細に説明していません。詳細については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

CPS で使用されるディレクトリーとハブ構成設定が分かり、参加者間のルーティングをデバッグするときに、CPS が役に立つことが良く理解できます。

コミュニティ・マネージャー:

マネージャー用の HTTP シンク・ゲートウェイをセットアップします。これは、次の URL に送信される HTTP ゲートウェイです。

```
http://<console-ip>:<console-port>/console/sink
```

シンク・ゲートウェイは、コミュニティ・マネージャーのデフォルトの CPS 参加者および CPS マネージャー・ゲートウェイとして指定する必要があります。

コミュニティ参加者:

マネージャー用にセットアップしたように参加者用の HTTP シンク・ゲートウェイをセットアップします。

RosettaNet PIP XML ファイル:

3A4 対話がここで説明するシナリオです。参加者からマネージャーへのシミュレーションでは、3A4 購入注文要求コンテンツを含む XML を使用します。

マネージャーから参加者へのシミュレーションでは、3A4 購入注文確認 RNSC コンテンツに適合する XML を使用します。これらの XML ファイルはローカル・ファイル・システムに存在します。

関連情報については、「ハブ構成ガイド」を参照してください。ファイルを作成する場合は、宛先および受信元 ID が、これらのファイルの該当する場所のマネージャーおよび参加者のものと一致する必要があります。

コンソールおよびルーター・サーバーの構成

シミュレーションで暗号化または署名を使用する場合は、公開鍵および秘密鍵証明書のペアが必要です。秘密鍵ストアには p8 フォーマット、公開証明書には der フォーマットを使用します。

1. p8 および der ファイルを common/security/vtp ディレクトリーにコピーします。
2. der ファイルを common/security/ca ディレクトリーにコピーします。
3. コンソールが開始し、ハブ管理者としてログインしたら、der ファイルをルート証明書としてアップロードします。
4. コンソール構成を変更して、証明書および鍵ストア・ファイルをポイントします。
5. エディターで、<console-root>/was/wbic/bcg_console.properties ファイルをオープンします。
6. bcg_console.properties ファイル内の VTP (仮想テスト参加者) セクションを特定して、以下の値をユーザーのシステムに該当する値に設定します。以下に示すように、der および p8 ファイル・フォーマットを使用する必要があります。

```
## VTP
ibm.bcg.certs.vtp.CertificateDir=C:/WBICConnect/common/security/vtp
ibm.bcg.certs.vtp.Certificate=testcert.der
ibm.bcg.certs.vtp.PrivateKey=testkey.p8
ibm.bcg.certs.vtp.Passwd=password
ibm.bcg.certs.vtp.VerifySig=false
ibm.bcg.vtp.RouterIn=C:/WBICConnect/common/router_in
```
7. bcg_console.properties ファイルを保管します。
8. コンソール・サーバーが実行中の場合は、再始動します。あるいは、今すぐ開始します。
9. ルーター構成が正しくセットアップされていることを確認します。
10. エディターで、<console-root>/was/wbic/bcg.properties ファイルをオープンします。
11. VTP セクションを特定し、vtp.CertificateDir プロパティーがコンソールと同じディレクトリーをポイントしていることを確認します。

12. 必要に応じて変更し、ファイルを保管します。
13. ルーター・サーバーが実行中の場合は、再始動します。あるいは、今すぐ開始します。

3A4 接続の構成:

RosettaNet ルーティングを熟知している場合は、以下の手順でコミュニティー参加者とコミュニティー・マネージャー間の RosettaNet 接続を構成します。

RosettaNet ルーティングを熟知していない場合は、以下のタスクを実行するときの支援として、「ハブ構成ガイド」を参照してください。

1. 3A4 対話をサポートする RN および RNSC ファイルをインポートします。

以下のファイルを示された順にアップロードします。ファイルは、インストール CD の /B2Bintegrate/rosettanet ディレクトリに存在します。

- Package_RNIF_V02.00.zip
 - BCG_Package_RNIFV02.00_3A4V02.02.zip
 - Package_RNSC_1.0_RNIF_V02.00.zip
 - BCG_Package_RNSC1.0_RNIFV02.00_3A4V02.02.zip
2. ハブを経由して送信される 3A4 購入注文要求および確認の機能 (対話と呼ばれる) を定義します。
 3. RNSC コンテンツを使用する参加者 3A4 要求および確認のソースおよびターゲットであるコミュニティー・マネージャーとコミュニティー参加者を構成します。
 4. シミュレートするシナリオをサポートするために、マネージャーと参加者間に参加者接続を確立します。
 5. システムに配置したセキュリティー成果物を使用して、オプションで署名および暗号化を指定するために、接続の属性を設定します。

ファイル・システムにサンプル 3A4 要求 XML と 3A4 RNSC XML ファイルが存在する場合は、コミュニティー参加者シミュレーターを使用してすべての内部ルーティング機能を実行できます。「コミュニティー参加者シミュレーター」タブをクリックして、「参照」ボタンをクリックします。送信するコンテンツを含むファイル・システムからファイルを選択して、「経路」ボタンをクリックします。

文書がファイル・システムから読み取られて、ハブにアップロードされます。その文書がルーティングのために文書マネージャーに渡され、ハブに構成した経路が使用されます。

要求と応答のアップロードおよび表示

要求および応答を送信するには、システムの機能をテストする必要があります。両タイプの文書のアップロードには、「文書のアップロード」画面が使用されます。

要求を送信する場合は、この機能の 2 番目の画面である「文書フローの表示」を使用して文書を調べ、この文書が正常に処理されたこと (応答が保留状態のオープン文書であること) を確認します。内部アプリケーションを調べて、文書の受信およ

び処理が正常に実行されたことを確認します。テキスト・エディターを使用して、要求の「宛先」と宛先セクションを編集し、応答を作成します。その後、応答をアップロードします。

応答を送信するときにも、「文書フローの表示」画面を使用して文書を調べることができます。応答を編集する必要はありません。

「文書フローの表示」には、肯定応答が保留状態の文書は表示されません。

アップロードが完了すると CPS ビューが変わり、ハブに残されたルーティング・トールを表示することができます。図 5 を参照してください。



図 5. ルーティング結果画面

これらの 2 つのリンクは、便宜のために設定されています。これにより、ルーティング結果を確認する 2 つのビューアーにアクセスできます。数秒間待って、文書マネージャーがメッセージを処理できるようになってから結果を表示します。

文書フローの開始および表示

1. 「**Community Participant Simulator**」 > 「**文書フローの開始**」の順にクリックします。「文書のアップロード」画面が表示されます。
2. アップロードする RosettaNet サービス・コンテンツ文書を探す場合は、「**参照**」をクリックします。この文書には、デジタル署名が必要です。
3. 「**送信 (Route)**」をクリックして、テスト・プロセスを開始します。文書は、文書のルーティング情報に基づいて、システムを介して適切な宛先に送信されません。
 - 文書が正常に送信されると、RosettaNet および文書ビューアーへのリンクのついたメッセージが表示されます。これらのリンクは、文書の送信の進行状況を追跡するときに使用します。
 - 文書送信中にエラーが発生した場合は、システム生成イベントのリストを含むメッセージが表示されます。この情報を使用して文書内のエラーを修正し、CPS を使用して文書を再送信します。
4. 片方向シナリオのシミュレーションをしている場合、テストはこれで完了です。

オープン文書の検索

1. 「Community Participant Simulator」 > 「文書フローの表示」の順にクリックします。
2.  をクリックして、オープン文書のフローを表示します。「オープン CPS 文書フロー (Open CPS Document Flow)」画面が表示されます。
3.  をクリックして、ロー文書を表示します。

オープン文書への応答

1. テキスト・エディターを使用して、応答文書が必要なプロセスの宛先や宛先セクションを編集 (VTP_OWNER を VTP_TP に変更、または VTP_TP を VTP_OWNER に変更) し、ターゲットの URL を適切に変更します。

表 33. テスト・シナリオ

シナリオ	接続の宛先	URL
コミュニティー・マネージャーから参加者への双方向アウトバウンド (アップロード要求)。	VTP_TP	VTP_TP
コミュニティー・マネージャーをシミュレートします。 参加者からコミュニティー・マネージャーへの片方向インバウンド。	VTP_OWNER	VTP_OWNER
参加者をシミュレートします。 コミュニティー・マネージャーから参加者への双方向アウトバウンド (アップロード応答)。	VTP_OWNER	VTP_OWNER
参加者をシミュレートします。 参加者からコミュニティー・マネージャーへの双方向インバウンド (アップロード応答)。	VTP_TP	VTP_TP
コミュニティー・マネージャーをシミュレートします。		

2. 「Community Participant Simulator」 > 「文書フローの表示」の順にクリックします。
3. 応答文書が必要な文書の横にある「応答」をクリックします。
4. 「参照」をクリックして、編集済みの文書を選択します。
5. 「送信 (Route)」をクリックします。文書は、文書のルーティング情報に基づいて、システムを介して適切な宛先に送信されます。
6. 「文書フローの表示」をクリックして、文書を表示します。

オープン文書の削除

1. 「Community Participant Simulator」 > 「文書フローの表示」の順にクリックします。
2. 表示されている文書の横にある「除去」をクリックします。文書がシステムから削除されます。

第 8 章 アーカイブ

この章には、WebSphere Business Integration Connect ユーザー用のデータ・アーカイブ管理情報が記載されています。タスクを実行する前には、この章全体をお読みください。

- 『アーカイブ・データ』
- 69 ページの『ファイル・システム・ログとデータベース・ログのアーカイブおよびパージ』
- 73 ページの『データの復元』
- 74 ページの『旧ファイルの除去』
- 74 ページの『状態エンジン・テーブルからのデータの除去』
- 75 ページの『要約テーブルからのデータの除去』
- 75 ページの『ロギング・テーブルからのデータの除去』

アーカイブ・データ

Business Integration Connect では、アーカイブを使用して非アクティブ (否認防止) コンテンツを安全なメディアに移動します。アーカイブは、LG_MSG_ARCHIVE および LG_CERT_ARCHIVE テーブルからの旧データを除去して構成されます。また、ペイロード・データ・ファイルをファイル・システム上の否認防止ストアからアーカイブに移動します。アーカイブ・ファイルは、否認防止データが必要な場合は復元できます。

注意: 特定のデータベース・テーブルをパージすると、システムに保管されているファイルについての情報が除去されます。データベース・テーブルをパージする前に、74 ページの『旧ファイルの除去』を参照してください。

1. export スクリプトを実行して、テーブルからアーカイブにデータをコピーします。

Oracle:

Oracle の場合、データベースをエクスポートするには、catexp.sql または catalog.sql スクリプトを実行する必要があります。詳細については、Oracle 資料を参照してください。catexp.sql または catalog.sql スクリプトは、データベースについて 1 回のみの実行が必要です。次のエクスポートを実行する前に、再実行する必要はありません。

注: スクリプト・ファイルの実際の名前は、オペレーティング・システムにより異なります。スクリプト・ファイル名とそれを実行するメソッドは、ご使用の Oracle オペレーティング・システム固有の資料に説明されています。

export を使用する前に、以下について確認してください。

- catexp.sql または catalog.sql スクリプトを実行する。

- エクスポート・ファイルを書き込むのに十分なディスクまたは磁気テープ・ストレージがある。
- 必要なアクセス権がある。

export スクリプトは、Oracle クライアントがインストールされているシステムから実行する必要があります。また、ORACLE HOME、ORACLE SID、および ORACLE PATH 環境変数を定義する必要もあります。スクリプトは、次の場所に存在します。

UNIX: /opt/IBM/WBICConnect/DBLoader/scripts/Oracle/export.sh

Windows: %WBICConnect_Install_Dir%\DBLoader\scripts\Oracle\export.bat

export スクリプトは、Oracle の場合、次のパラメーターを使用します。

- システム・パスワード (system password)
- 接続ストリング (connect string)
- 宛先ディレクトリー (destination directory)
- スキーマ名 (schema name)
- カットオフ日付 YYYYMMDD (cut off date YYYYMMDD)

構文: ./export <system password> <connect string> <destination directory> <schema name> <cut off date YYYYMMDD>

例: ./export password connectstring /tmp bcgapps 20030101

export.dmp という名前のアーカイブおよび export.log ファイルが /tmp/20030101 フォルダーに追加されます。

DB2:

export スクリプトは、データベースとの接続を確立後、DB2 コマンド・ウィンドウから実行する必要があります。スクリプトは、次の場所に存在します。

UNIX: /opt/IBM/WBICConnect/DBLoader/scripts/DB2/export.sh

Windows: %WBICConnect_Install_Dir%\DBLoader\scripts\DB2\export.bat

export スクリプトは、DB2 の場合、次のパラメーターを使用します。

- カットオフ日付 YYYY-MM-DD (cutoff date YYYY-MM-DD)
- アーカイブ・ロケーション (archive location)
- データベース名 (database name)
- データベース・ユーザー名 (database user name)
- データベース・パスワード (database password)

構文: ./export <cutoff date YYYY-MM-DD> <archive location> <database name> <database user name> <database password>

例: ./export 2003-01-01 /tmp bcgapps bcgapps db2inst1 pa55word

注: export で SQL3100W 警告が表示されますが、無視しても差し支えありません。

アーカイブおよび msgarchive.txt ログ・ファイルが、/tmp/2003-01-01 フォルダに追加されます。

2. archive スクリプトを実行して、ペイロード・データ・ファイルをファイル・システム上の否認防止ストアからアーカイブにコピーします。スクリプトは、否認防止ファイル・ストレージ・システムの存在するマシンで実行する必要があります。スクリプトは、次の場所に存在します。

UNIX: /opt/IBM/WBICConnect/bin

Windows: %WBICConnect_Install_Dir%bin

- a. setenv スクリプトを実行して、PATH および CLASSPATH 変数が正しく設定されていることを確認します。
- b. DBArchiveParams.properties ファイルは、すべての必要な情報を取得するために archive スクリプトで使用されます。DBArchiveParams.properties ファイルを編集して、正しいパラメーターが渡されることを確認します。詳細については、サンプル項目を参照してください。正しいデータベース・タイプに対応する項目を確認してください。カットオフ日付はステップ 1.e と同じでなければなりません。DB_ARCHIVE_TASK パラメーターは 1 に保持する必要があります。
- c. archive スクリプトを実行します。コピーの結果は、DBOutput.txt ファイルで指定されたように、宛先ディレクトリーに保持されます。

重要: 上記のステップ 1 および 2 では、データ・ストアからアーカイブ・ロケーションにデータをコピーします。これらのステップが正常に完了するとデータ・ストアからデータが除去されるので、次の 2 つのステップのみを実行します。

3. DBArchiveParams.properties の DB_ARCHIVE_TASK パラメーターを 0 に設定します。
4. archive スクリプトを再度実行して、ペイロード・データ・ファイルをファイル・システム上の否認防止ストアからパーズします。

スクリプトは、否認防止ファイル・ストレージ・システムの存在するマシンで実行する必要があります。また、スクリプトは管理者/root 特権で実行する必要があります。

5. AR_NONREP_MAINTENANCE ストアード・プロシージャを実行して、LG_MSG_ARCHIVE および LG_CERT_ARCHIVE テーブルからアーカイブ・データをパーズします。入力パラメーターとしてカットオフ日付を使用します。このストアード・プロシージャはデータベースで使用可能で、インストール時に追加されます。

Oracle: execute AR_NONREP_MAINTENANCE(YYYY-MM-DD)

DB2: call AR_NONREP_MAINTENANCE(YYYY-MM-DD)

ファイル・システム・ログとデータベース・ログのアーカイブおよびパーズ

WebSphere Business Integration Connect の運用効率を維持するには、次の手順を使用して、ファイル・システム・ログ・ファイルおよびデータベース・ログ・ファイルをアーカイブまたはパーズします。

アプリケーション・ログ・ファイルのパージ

アプリケーション・ログ・ファイルは、\$INSTALLATION_DIRECTORY/<Receiver、コンソール、ルーター>/was/logs/server1 の 3 つの領域に置かれています。

1. \$INSTALLATION_DIRECTORY/<Receiver、コンソール、および ルーター>/was/bin/stopServer.sh server1 に置かれている停止スクリプトを実行して、最初に適切なアプリケーションを停止します。
2. 必要に応じてログ・ファイルを削除します。

否認防止ディレクトリーのパージ

否認防止ファイルおよびディレクトリーは、\$COMMON_DIRECTORY/non_rep/ に配置されています。ディレクトリー内の 0 から始まるに最も古いファイルのアーカイブから始めて、番号を加算してより新しいファイルをアーカイブしていきます。

1. \$INSTALLATION_DIRECTORY/router/was/bin/stopServer.sh server1 というスクリプトを使用してルーター・サービスを停止します。
2. UNIX の tar コマンドまたは WinZip を使用して、ファイルを圧縮します。
3. 必要に応じて、オフサイトで保管するためにファイルを外部メディアに移動します。

データベース・テーブルのパージ

必要に応じて特定のデータベース・テーブルをパージできますが、適切なシステム機能性を維持するために、他のテーブルは変更しないでください。BP_ および LG_ で始まるテーブルはパージできますが、次の 2 つの例外があります。つまり、_QUE および _HIST で終わる BP_ テーブルは RosettaNet エンジンで継続して保守されるので、変更しないでください。_QUE で終わる BP_ テーブルはキュー・テーブルで、_HIST で終わる BP_ テーブルはアーカイブに使用されるヒストリー・テーブルです。例えば、BP_RNSTATEHDR_QUE テーブルは BP_RNSTATEHDR_HIST テーブルにアーカイブされます。

CG_ または PR_ で始まるテーブルには、構成データまたはプロファイル・データが格納されています。システムの機能を適正に維持するため、これらのテーブルも未変更の状態を保つ必要があります。

RosettaNet および AS1/AS2 状態エンジンのアーカイブ機能およびパージ機能

テーブル・データのパージ条件は、データをオンライン状態で保持する日数に基づいています。_HIST で終わるテーブル内のデータは、日次でアーカイブされ、パージされます。また、ログ情報もすべて毎日切り捨てられます。

パージ条件には、p_days という入力パラメーターが 1 つ含まれています。このパラメーターは、データがオンラインで保持される日数を表します。DBA が入力パラメーターを設定すると、このプロシーチャーは次のように機能します。

テーブル	ヒストリー・テーブル	アクション
RosettaNet		
BP_rmStateHdr	BP_rmStateHdr_Hist	パージ
BP_rmStateDtl	BP_rmStateDtl_Hist	パージ

テーブル	ヒストリー・テーブル	アクション
BP_Sponsor_State	BP_Sponsor_State_Hist	ページ
BP_rnStateHdrAuditLog	なし	切り捨て
AS1/AS2		
BP_State_Hdr	BP_State_Hdr_Hist	ページ
BP_AS_State_Hdr	BP_AS_State_Hdr_Hist	ページ
BP_AS_State_Dtl	BP_AS_State_Dtl_Hist	ページ

データ保存期間

プロシージャは、ヘッダーのレコード作成日と *p_days* 入力パラメーターとの組み合わせに基づいて、データをページします。TPA がヘッダーに保管した実行時間は考慮されません。*p_days* の値が最大値 (実行時間/1440) より大きいことを確認するのは DBA です。実行時間は分単位で保管されます。

BP_ テーブルのデータは、*p_days* または ((実行時間/1440) + 1 日) のいずれか長い方の期間、オンライン上に保持することをお勧めします。*BP_DupCheck* および *BP_RnMsgDigest* テーブルのデータは、7 日間保持してください。*BP_Process_Log* のデータは、2 日間保持してください。

DB で始まる名前のテーブルは、*DB_ProcAuditLog* 以外はメタデータ・テーブルです。*DB_ProcAuditLog* をオンにした場合、このログを毎日切り捨てるか、またはユーザーの必要に応じて切り捨てる必要があります。このログは、主に開発環境や QA 環境で使用するため、通常は実動環境ではオフにします。

ログ・テーブルとサマリー・テーブル

LG_ で始まる名前のテーブルは、ログ・テーブルおよびサマリー・テーブルで、その拡張子は *LG_EventCd*、*LG_Media*、および *LG_media_Cfg* です。これらはメタデータ・テーブルで、システムの機能を適正に維持するために、未変更の状態を保つ必要があります。*LG_Access_* で始まるテーブルは、4.2.1 および 4.2.2 では使用されません。

次のログ・テーブルのアーカイブおよびページは、アクティビティ ID に基づいて実行できます。駆動テーブルは *LG_Activity* になります。*createdate* または *RcvDocTS* を使用して、データをオンライン上に保持する日数を指定できます。*RcvDocTS* は索引付きの列であるため、選択した方がよいオプションです。データがオンライン上に保持される期間は、7 日間か ((実行時間/1440) + 1 日) のいずれか長い方になります。

テーブル 注

LG_ACTIVITY
LG_ACTIVITY_DTL
LG_ACTIVITY_ENDSTATE
LG_ACTIVITY_RNDTL
LG_ACTIVITY_RNHDR
LG_AS_DTL

LG_AS_HDR	
LG_ACTIVITY_EVENT	LG_Activity を LG_event にリンクします。
LG_EVENT	
LG_EVENT_EVENTSUMMARY	LG_Event を LG_EventSummary および LG_EventSummary にリンクします。DRILLDOWNFLG を使用して、ドリルダウンが使用できないことを指定できます (4.2.1 および 4.2.2 のプロシージャには実装されていません)。
LG_ACTIVITY_SUMMARY	LG_Activity を LG_Summary および LG_Summary にリンクします。DRILLDOWNFLG を使用して、ドリルダウンが使用できないことを指定できます (4.2.1 および 4.2.2 のプロシージャには実装されていません)。

次のログ・テーブルは、作成日に基づいてページできます。

テーブル	注
LG_Delivery_Log	createdate から 1 日以上経過したレコードをページできます。
LG_DM_Doc_Lock	createdate から 1 日以上経過したレコードをページできます。
LG_Msg_Archive	createdate から 7 日以上経過したレコードをページできます。
LG_STACKTRACE	createdate から 7 日以上経過したレコードをページできます。
LG_SYNCH_REQ_RESP	createdate から 7 日または (TimeToPerform/1440)+1 日) のいずれか長い期間が経過したレコードをページできます。
LG_VALIDATION	createdate から 7 日以上経過したレコードをページできます。
LG_VTP_STATUS	createdate から 7 日以上経過したレコードをページできます。

次のサマリー・テーブルは、システムの機能を適正に維持するために、未変更の状態を保つ必要があります。

テーブル	注
イベント・サマリー・テーブル	
LG_EVENTSUMMARY	
LG_EVENTSUMMARY_XREF	
プロセス・サマリー・テーブル	
LG_PROCESSSUMMARY_AS	
LG_PROCESSSUMMARY_AS_MI	

LG_PROCESSSUMMARY_AS_XREF

LG_PROCESSSUMMARY_RN

LG_PROCESSSUMMARY_RN_MI

LG_PROCESSSUMMARY_XREF

文書サマリー・テーブル

LG_DOCPROCESSING_SUMLG_MSGLENGTH_SUMMARY

LG_SUMMARY

LG_SUMMARY_MI

LG_SUMMARY_PROCESSSUMMARY

LG_Sum_Xref_Lnk を LG_ProcessSummary_Xref に
リンクします。

LG_SUMMARY_RN

LG_SUMMARY_RN_MI

LG_SUM_XREF_LNK

LG_SUM_XREF_PART および
LG_SUM_XREF_PRCS を LG_Summary にリンクし
ます。

LG_SUM_XREF_PART

LG_SUM_XREF_PRCS

メッセージ長サマリー

LG_MSGLENGTH_SUMMARY

データの復元

データベースにデータを復元するには、次のステップを実行します。

1. import スクリプトを実行して、データをデータベースにコピーして戻します。

Oracle:

このスクリプトは、Oracle クライアントが稼働するマシンから実行する必要があります。スクリプトは、次の場所に存在します。

UNIX: /WBICConnect_Install_Dir/opt/IBM/WBICConnect/DBLoader/scripts
/Oracle/import.sh

Windows: %WBICConnect_Install_Dir%\DBLoader\scripts\Oracle\import.bat

import スクリプトは、Oracle の場合、次のパラメーターを使用します。

- Oracle ユーザー・システム・パスワード (Oracle user system password)
- 接続ストリング (connect string)
- アーカイブ・ロケーション (archive location)

DB2:

このスクリプトは、データベースに接続後、DB2 コマンド・プロンプトから実行する必要があります。スクリプトは、次の場所に存在します。

UNIX: /WBICConnect_Install_Dir/opt/IBM/WBICConnect/DBLoader/scripts
/DB2/import.sh

Windows: %WBICConnect_Install_Dir%DBLoader%scripts%DB2%import.bat

import スクリプトは、DB2 の場合、次のパラメーターを使用します。

- アーカイブ・ロケーション (archive location)
- スキーマ名 (schema name)
- データベース名 (database name)
- データベース・ユーザー名 (database user name)
- データベース・ユーザー・パスワード (Database user password)

構文: ./import.sh <archive location> <schema name> <database name>
<database user name> <database password>

例: ./import.sh /tmp/2003-01-01 db2inst1 bcgapps db2inst1 pa55word

2. Restore スクリプトを実行して、ペイロード・ファイルを復元します。スクリプトは、次の場所に存在します。

UNIX: /WBICConnect_Install_Dir/opt/IBM/WBICConnect/bin

Windows: %WBICConnect_Install_Dir%bin

Restore スクリプトは、次のパラメーターを使用します。

- アーカイブのロケーション。例えば、C:%tmp
- 67 ページの『アーカイブ・データ』 ステップ 2 のログ・ファイル DBOutput.txt のロケーション。例えば、
C:%Installers%DBOutput.txt

このプログラムは、否認防止ファイル・ストレージ・システムの存在するマシンで、admin/root 権限で実行する必要があります。

旧ファイルの除去

DB_MODULE セットを MSGSTORE として指定して、archive スクリプトを使用します。これにより、旧ファイルがメッセージ・ストアから除去されます。このスクリプトは、メッセージ・ストアのファイル・ストレージ・システムの存在するマシンで実行する必要があります。

注意: LG_MSG_ARCHIVE がページ済みであると、ファイルのロケーションがデータベースから失われます。アーカイブする前にメッセージ・ストアをページすることをお勧めします。

状態エンジン・テーブルからのデータの除去

AR_STATEENGINE_MAINTENANCE ストアード・プロシージャを使用します。データを保存する日数が必要です。その日数より前のレコードはすべてデータベースから除去されます。

要約テーブルからのデータの除去

AR_SUMMARY_MAINTENANCE ストアード・プロシージャーを使用します。入力パラメーターとしてカットオフ日付を使用します。

ロギング・テーブルからのデータの除去

AR_PURGE_HEADERS ストアード・プロシージャーを使用します。入力パラメーターとしてカットオフ日付を使用します。

第 9 章 トラブルシューティング

この章では、問題を特定して解決するために使用できるトラブルシューティング情報を示します。障害発生時イベントおよびこれに対応する説明のリストは、付録 B を参照してください。

この章のトピックは次のとおりです。

- 『データベース照会効率の最適化』
- 『Receiver タイムアウト設定の増加』
- 78 ページの『DB2 エージェント用の不十分な仮想メモリー』
- 78 ページの『メモリー不足エラーの回避』
- 79 ページの『データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス文書の再処理』
- 79 ページの『データ検証エラーが生成された 0A1』
- 81 ページの『シャットダウン』
- 81 ページの『マシン・シャットダウン後のシステムの始動』
- 82 ページの『破損後のルーターの再始動』

データベース照会効率の最適化

RUNSTATS コマンドを実行すると、テーブルおよび索引ごとにデータベース照会アクセス・プランが更新されます。データベース照会効率を最適化するには、IBM WebSphere Business Integration Connect のアプリケーションおよびデータベースのアクティビティーが最小のときに、週に 1 度以上 RUNSTATS を実行します。データベースのトラフィックの増加に従って、RUNSTATS の実行頻度を上げてください(1日に 1 回が最高)。

注:

- RUNSTATS を実行するとデータベース・システム情報が更新されるため、特定の環境ではロック・タイムアウトが発生する可能性があります。WebSphere Business Integration Connect のアプリケーションは静止状態にして、データベース・アクセスは RUNSTATS の実行のみに制限することをお勧めします。
- RUNSTATS と db2rbind を同時に実行すると、ロック・タイムアウトが発生する場合があります。これらのコマンドは、毎日異なる時刻に実行することをお勧めします。

Receiver タイムアウト設定の増加

参加者が Business Integration Connect への接続を開始し、「接続がピアによって打ち切られました: ソケットの書き込みエラーです (Connection aborted by peer: socket write error)」というエラー・メッセージを受け取った場合、Business Integration Connect の Receiver では、参加者からの伝送速度が遅いためタイムアウトが発生し始めます。

この問題に対応するには、Receiver のインストール先ディレクトリーにある bcgHttp.jacl スクリプトを実行するして、Receiver のデフォルトのタイムアウト値である 5 秒を 30 秒に増加します。bcgHttp.jacl スクリプトを実行するには、次のコマンドを実行します。

```
$INSTALL_DIR/was/bin/wsadmin.sh -conntype NONE -f
$INSTALL_DIR/scripts/bcgHttp.jacl
```

DB2 エージェント用の不十分な仮想メモリー

Business Integration Connect ログに存在する以下のエラーは、データベース・エージェントがソート処理に使用できる仮想メモリーが不十分であることを示します。Business Integration Connect 用に作成したデータベースの SORTHEAP パラメーターの値を減らします。ご使用の環境にこのパラメーターを設定する方法の詳細については、データベース管理者にお問い合わせください。

```
Error[DBChannelCheck] [main Thread 2] - Error in channel check for
com.ibm.bcg.channel.CheckChannelParameters@ebda9664
com.ibm.ejs.cm.portability.ResourceAllocationException: DB2 SQL error:
SQLCODE: -955, SQLSTATE:57011, SQLERRMC: null
```

```
ERROR [BPEEngine] [main Thread 2] - BPE:
```

```
ERROR [BPEEngine] [main Thread 2] -
java.lang.ArrayIndexOutOfBoundsException: 0
```

```
ERROR [BPEEngine] [main Thread 2] - Error closing
transConn.com.ibm.ejs.cm.exception.WorkRolledbackException: Outstanding
work on this connection which was not comitted or rolledback by the user
has been rolledback.
```

メモリー不足エラーの回避

ルーティングのパフォーマンスを向上し、メモリー不足エラーを回避するには、次のスクリプトを使用してヒープ・サイズの初期値および最大値を変更します。

現在のヒープ・サイズを照会するスクリプト

```
• /WBICConnect_Install_Dir/console/was/bin/wsadmin.sh -conntype NONE -f
  $LOCATION_OF_SCRIPTS$/queryJVMAattrs.jacl
```

ヒープ・サイズの最小値/最大値を設定するスクリプト

```
• /WBICConnect_Install_Dir/console/was/bin/wsadmin.sh -conntype NONE -f
  $LOCATION_OF_SCRIPTS$/setJVMAattrs.jacl
```

setJVMAattrs.jacl を編集して、ヒープ・サイズを推奨値に変更します。

デフォルト値:

- Xms=50
- Xmx=256

第 1 の推奨値:

- Xms=256
- Xmx=512

第 2 の推奨値:

- Xms=256
- Xmx=1024

暗号化された大容量 AS 文書の処理時間の長期化防止

暗号化された大容量の AS 文書を一部の低位モデルのハードウェア構成で処理すると、処理に長い時間がかかることがあります。処理時間の長期化を防止する方法は、次のとおりです。

1. AS プロトコル構成で圧縮を選択して、送信する文書のサイズを小さくします。
2. メモリー不足エラーの回避のセクションに記載されている手順に従ってメモリー・サイズを増加し、暗号化された文書の処理速度を向上させます。

データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス文書の再処理

DATALOGQ JMS キューにあるイベントまたは文書は、データベースへのログ記録が 3 回失敗すると DATALOGERRORQ JMS キューに挿入され、後で問題が解決したときに再処理できるようになります。

ログ記録に失敗したこれらのイベントおよび文書を再処理するには、手動ユーティリティー `reprocessDbLoggingErrors.sh` を使用します。このユーティリティーを実行すると、DATALOGERRORQ キューにあるすべてのイベントおよび文書はデキューされ、DATALOGQ キューに再キューイングされるため、通常の `DocumentLogReceiver` によって再度データベースに記録されます。

このユーティリティーは、DATALOGERRORQ にある既存のすべてのイベントおよび文書を処理した後、停止します。ログ記録に失敗したイベントや文書は、最終的には DATALOGERRORQ に記録されます。ただし、今回の場合、イベントまたは文書が再処理されるのは 1 回のみです(つまり、ユーティリティーは失敗したイベントや文書のエンドレス・ループには入りません)。

`reprocessDbLoggingErrors.sh` ユーティリティーを実行するには、次の手順を実行します。

1. 次のように入力して、すべてのルーター・マシンの `reprocessDbLoggingErrors.sh` に `env` 変数が正しく定義されていることを確認します。

```
REPROCESSOR_HOME=Document Manager installation root
JAVA_HOME=$REPROCESSOR_HOME/java
LOG_REPROCESSOR_CLASSES=$REPROCESSOR_HOME/classes
```

2. 次のコマンド行からユーティリティーを実行します。
`./reprocessDbLoggingErrors.sh`

データ検証エラーが生成された 0A1

0A1 では、`GlobalSupplyChainCode` が `xml` に存在する必要があります。着信 3A7 にこの値が含まれていない場合は、属性として 0A1 に追加する必要があります。`GlobalSupplyChainCode` は 3A7 文書に存在するか、または文書フロー定義で属性として 0A1 に追加する必要があります。

属性を追加するには、次の手順を実行します。

1. 「ハブ管理」>「ハブ構成」>「文書フロー定義」の順にクリックします。コンソールに「文書フロー定義の管理」画面が表示されます。
2. 「パッケージ: RNIF (Package: RNIF)」>「プロトコル: Rosettanet (Protocol: Rosettanet)」>「文書フロー: 0A1 (DocumentFlow: 0A1)」をクリックして、アクション (青の矢印) を選択します。
3. グローバル・サプライ・チェーン・コード属性がそこに存在しない場合は、「属性の追加 (Add Attributes)」をクリックして追加します。
4. ドロップダウン・リストから値を選択します。
5. 「保管」をクリックします。

低性能およびシステム・イベントの非作動

システム性能がきわめて悪く、システム・イベントが作動していない場合は、WebSphere MQ のパブリッシュ/サブスクライブ・ブローカーに問題がある可能性があります。

1. ファイル `/var/mqm/qmgrs/<キュー・マネージャー名>/qm.ini` を開いて、次の行を探します。

```
MaxActiveChannels=1000Broker:
```

この項目を確認したら、Channels と Broker のパラメーターを次の項目に置き換えます。

```
Channels:
```

```
MaxChannels=1000
```

```
MaxActiveChannels=1000
```

```
SyncPointIfPersistent=yes
```

2. 変更内容を保管します。
3. Business Integration Connect をシャットダウンします (81 ページの『シャットダウン』を参照)。
4. 次の手順に従って、WebSphere MQ を停止します。
 - a. パブリッシュ/サブスクライブ・ブローカーを停止します。

```
endmqbrk -m <hostname>.queue.manager
```
 - b. リスナーを停止します。

```
endmq1sr -m <hostname>.queue.manager
```
 - c. キュー・マネージャーを停止します。

```
endmqm <hostname>.queue.manager
```
5. 「WebSphere Business Integration Connect インストール・ガイド」の説明に従って、WebSphere MQ を作成および始動します。ただし、手順 2 から 手順 4 は実行しないでください。
6. 「WebSphere Business Integration Connect インストール・ガイド」の説明に従って、Business Integration Connect を再始動します。

シャットダウン

システムをシャットダウンする場合は、先に Receiver をシャットダウンしてからルーターをシャットダウンします。この安全機能により、ルーターのシャットダウン中に文書がシステムに侵入するのを防ぐことができます。処理中の文書が大量に存在する場合は、シャットダウンに最大 15 分かかる場合があります。

マシン・シャットダウン後のシステムの始動

次のセクションでは、システム・コンポーネントが存在するマシンがサービス休止になった場合にシステム・コンポーネントを始動する方法について説明します。

Business Integration Connect のコンポーネントを始動するには、先に DB2 と WebSphere MQ を始動する必要があります。

DB2 の始動

DB2 を始動するには、次の手順に従います。

1. 次のように入力して、データベース所有者に変更します (デフォルトを使用した場合は db2inst1)。

```
su - db2inst1
```

2. 次のように入力して、データベース・インスタンスを開始します。

```
db2start
```

WebSphere MQ の始動

WebSphere MQ を始動するには、次の手順に従います。

1. 次のように入力して、WebSphere MQ ユーザーに変更します。

```
su - mqm
```

2. 次のように入力して、キュー・マネージャーを開始します。

```
strmqm <hostname>.queue.manager
```

3. 次のように入力して、リスナーを開始します。

```
runmqslsr -t tcp -p <port number> -m <hostname>.queue.manager &
```

4. 10 秒待ってから、Enter キーを押してコマンド・プロンプトに戻ります。

5. 次のように入力して、JMS Broker (パブリッシュ/サブスクライブ・ブローカー) を開始します。

```
strmqbrk -m <hostname>.queue.manager
```

Community Console、Receiver、および Document Manager の開始

Community Console、Receiver、および Document Manager を開始するには、次の手順に従います。

1. 次のように入力して、通常の Business Integration Connect ユーザーに変更します。

```
su - bcguser
```

2. 次のようにして、Community Console スクリプト・ディレクトリーに移動します。

```
cd <installation location>/console/was/bin
```

ここで、<installation location> は Business Integration Connect のインストール先です。

3. 次のように入力して、Community Console を開始します。

```
./startServer.sh server1
```

4. 次のように入力して、Receiver スクリプトのディレクトリーに移動します。

```
cd <installation location>/receiver/was/bin
```

5. 次のように入力して、Receiver を開始します。

```
./startServer.sh server1
```

6. 次のように入力して、Document Manager スクリプトのディレクトリーに移動します。

```
cd <installation location>/router/was/bin
```

7. 次のように入力して、Document Manager を開始します。

```
./startServer.sh server1
```

破損後のルーターの再始動

ルーターが破損した場合は、次の手順に従って再始動してください。この手順により、受信したすべての文書が処理されるようになります。

1. router_in ディレクトリーを調べて、vmd_locked という拡張子を持つファイルの有無を確認します。
2. 拡張子 vmd_locked を持つ経過時間が 2 分より長いファイルがある場合は、拡張子を vmd_restart に変更して、ファイル名を変更します。

注: ルーターのインスタンスが複数稼働している場合、ルーターのほかのインスタンスによってアクティブで処理されている拡張子 vmd_locked を持つファイルが存在します。これらのファイルは名前変更しないでください。

3. 文書の処理の状態によっては、文書の処理がイベント 210031「文書を否認防止できません」で失敗している可能性もあります。この状況が発生すると、文書のファイルはディレクトリー router_in/reject に置かれます。この場合、拡張子 vmd を vmd_restart に変更してファイル名を変更します。その後、文書のファイルを処理用のディレクトリー router_in dir に移動させます。

付録 A. パフォーマンスの考慮

この付録には、ご使用の特定の環境で最適なパフォーマンスを実現するための支援情報が含まれています。

イベント・フィルター

`bcg.event_log_exclude` プロパティを使用すると、イベント・ログ (DataLogQ) 内の選択したイベントの記録を除外できます。デフォルトでは、文書の通常および正常終了した処理で複数のイベントが生成され、これらはイベント・ログに記録されます。正常終了した文書処理で記録されるイベントの数を減らすと有効な場合があります。この数を減らすと、システムのパフォーマンスまたはトランザクション容量が向上することがあります。このパラメーターでは、一部のメッセージは除外できません。`bcg.event_log_exclude` プロパティのフォーマットは、除外するメッセージ番号をコンマで区切ったリストです。例えば、次のようになります。

```
bcg.event_log_exclude=210060,210062,230011,250004
```

除外すると便利なメッセージ:

```
210060 Passed destination parse.  
210062 Destination process successful.  
210100 Timing start event  
210101 Timing end event  
230011 Sequence validation successful  
250004 Document delivery successful
```

要約データの生成

WebSphere Business Integration Connect は、システム・アクティビティについてのデータを定期的に要約します。この要約サービス・データは、文書分析または文書ボリューム・レポート機能を使用するときに表示される情報です。

「要約サービス・プロパティ」画面で、要約データを生成する頻度を表示および編集できます。この画面には、要約データが最後に更新された日時も表示されます。

時間間隔を変更するには、次の手順を実行します。

1. 「システム管理」 > 「イベント処理」 > 「要約サービス」の順にクリックします。コンソールに「要約サービス・プロパティ」画面が表示されます。
2. 「処理間隔 (分)」の横の  アイコンをクリックします。
3. データを再度要約するまでに経過する秒数の値 (1 から 60) を入力します。デフォルト値は 15 です。
4. 「保管」をクリックします。

付録 B. 障害発生時イベント

文書の処理が失敗すると、WebSphere Business Integration Connect システムは、イベントを生成します。表 34 に障害発生時イベントのリストとこれに対応する説明を示します。

注: HTTP Receiver コンポーネントは、文書を維持できなくなると HTTP エラー・コードを返しますが、文書の内容は維持されません。それ以外の Receiver コンポーネント・タイプの場合、文書の内容は、現在の場所で障害発生時点のまま維持されます。

表 34. 障害発生時イベント

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG103201	ハブ所有者状態エンジン・エラー	エラーの理由:{0}	エラー	このイベントが生成されるのは、致命的なシステム・エラーが発生し、その結果、文書の処理が失敗した場合です。データベースの書き込みエラーなどがこの例です。
BCG103203	受信側処理エラー (Receiver Processing Error)	受信側 '{0},{1}' が文書の処理に失敗しました。エラー: {2}。(Receiver '{0},{1}' failed to processing document, error: {2}.)	エラー	このイベントは、文書エラーまたはシステム・エラーのために受信側が文書を処理できない場合に生成されます。
BCG200001	プロトコル変換プログラム・ビジネス・プロセスの取得に失敗しました	ファクトリーが、プロトコル変換プログラム・ビジネス・プロセスのインスタンスの取得に失敗しました。理由: {0}	重大	このイベントは、プロトコル変換プログラムのビジネス・プロセスのインスタンスの検索時にシステム障害が発生した場合に生成されます。
BCG200005	文書変換の失敗	文書の変換に失敗しました。理由 {0}	エラー	このイベントは、文書の変換時に障害が発生した場合に生成されます。
BCG200006	プロトコル変換プログラム入力ファイルの障害	プロトコル変換プログラム入力ファイル・エラー: {0}	重大	このイベントは、アクションの処理中に入力ファイルの障害が発生した場合に生成されます。例えば、ファイルの破壊などです。
BCG200007	プロトコル変換プログラム出力ファイルの障害	プロトコル変換プログラム出力ファイル・エラー: {0}	重大	このイベントは、出力ファイル・ディレクトリーへの書き込み時に障害が発生した場合に生成されます。
BCG200009	文書の解析に失敗しました	構文解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、文書の構文解析時に障害が発生した場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG200013	コミュニティ・マネージャー提供の RN Process-Instance-ID エラー	{0}	エラー	このイベントが生成は、無効なプロセス・インスタンス ID を受信し、システムで新規プロセス・インスタンス ID が生成されないことが構成プロパティーに示されている場合に生成されます。
BCG200015	コミュニティ・マネージャー提供の RosettaNet GlobalUsageCode エラー	{0}	エラー	このイベントは、x-aux-production ヘッダーの値が無効で、エラー発生時にデフォルト値が使用されないことが構成プロパティーに示されている場合に生成されます。
BCG210000	チャンネル検査エラー	チャンネル検査エラー	エラー	このイベントは、チャンネル検査関連のエラーがある場合に生成されます。
BCG210001	チャンネル検査エラー	チャンネル検査エラー	エラー	このイベントは、接続の検索に必要なデータが使用可能で、一致する接続が見つからない場合に生成されます。
BCG210002	接続のルックアップに失敗しました	接続検索が失敗しました {0}	エラー	このイベントは、接続の検索に必要なデータが使用不可の場合に生成されます。
BCG210007	アウトバウンド文書をパッケージできません	Outbound Processor のエラー	重大	このイベントは、パッケージャーがアウトバウンド文書で使用できない場合に生成されます。
BCG210008	IP アドレス検証の失敗	元 IP アドレスが参加者プロファイル {0} にありません	エラー	このイベントは、該当する参加者の未承認の IP アドレスから文書が送られた場合に生成されます。
BCG210009	SSL 証明書検証の失敗	クライアント SSL 証明書名が参加者プロファイル {0} にありません	エラー	このイベントは、文書の送付に使用される SSL 証明書が、該当する参加者の承認済み証明書リストに登録されていない場合に生成されます。
BCG210010	文書が大きすぎます	文書が大きすぎます: {0} バイト	エラー	このイベントは、受信した文書が大きすぎて処理できない場合に生成されます。
BCG210011	コミュニティ・マネージャー・トランスポートのアンパックの失敗	指定されたコミュニティ・マネージャー・トランスポート情報は不十分です: {0}	エラー	このイベントは、提供されたトランスポート情報が不十分な場合に生成されます。
BCG210012	B2B 機能が見つかりません	B2B 機能が見つかりません {0}	エラー	このイベントは、文書の転送に必要な B2B 機能が使用不可の場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210013	接続が完全に構成されていません	接続が完全に構成されていません {0}	エラー	このイベントは、文書の接続の構成が完了していない場合に生成されます。たいてい、文書の宛先に構成済みゲートウェイが指定されていないことが原因です。
BCG210014	MIME Multipart アンパックの失敗	MIME multipart 文書のアンパックに失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、システムが MIME multipart 文書のアンパックに失敗した場合に生成されます。
BCG210017	EDI 接続解析の失敗	EDI ルーティング情報の解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、システムが EDI ルーティング情報の解析に失敗した場合に生成されます。
BCG210019	この接続では同期操作はサポートされません	この接続では同期操作はサポートされません	エラー	このイベントは、文書によって同期操作が要求されたが、接続が同期操作をサポートしていない場合に生成されます。
BCG210031	文書を否認防止できません	文書 {0} を否認防止できません	重大	<p>このイベントは、システムが文書を否認防止できなかった場合に生成されます。</p> <p>システムに十分なディスク・スペースがあることと、次のディレクトリにシステム専用ファイルが格納されていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>/common information directory>/non_rep/</i> • <i>/common information directory>/msg_store/</i> <p>これら 2 つのディレクトリにユーザー生成ファイルが格納されている場合、文書の処理は失敗します。</p>
BCG210032	Inbound Processor でのシステム・エラー	文書での Inbound Processor でのシステム・エラー: {0}	重大	このイベントは、システムがインバウンド・プロセッサでエラーを検出した場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210033	メッセージの格納に失敗しました	文書をプレーン・テキストで保管できません。	エラー	<p>このイベントは、システムが文書をプレーン・テキストで保管できなかった場合に生成されます。</p> <p>システムに十分なディスク・スペースがあることと、次のディレクトリーにシステム専用ファイルが格納されていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • /<common information directory>/non_rep/ • /<common information directory>/msg_store/ <p>これら 2 つのディレクトリーにユーザー生成ファイルが格納されている場合、文書の処理は失敗します。</p>
BCG210034	Document Manager でのシステム・エラー (System Error in the document manager)	Document Manager での文書に関するシステム・エラー: {0} (System error in the document manager for document: {0})	重大	このイベントは、システムが Document Manager でエラーを検出した場合に生成されます。
BCG210051	複写処理に失敗しました	システム・エラー: プロセスの複写に失敗しました	重大	このイベントは、重複処理時にシステムがデータベース・サーバーにアクセスできなかった場合に生成されます。
BCG210052	重複する文書を受信しました	この文書は、{2} に送信された文書と重複しています	エラー	このイベントは、受信した文書が重複していて拒否された場合に生成されます。
BCG210061	宛先解析の失敗	宛先の構文解析でのエラー	重大	このイベントは、宛先の解析が失敗すると生成されます。通常はデータベースの問題が原因です。
BCG210063	宛先処理の失敗	宛先の処理に失敗しました	重大	このイベントは、宛先の処理が失敗すると生成されます。通常はデータベースの問題が原因です。
BCG210065	宛先判別の失敗	{0}	エラー	このイベントは、宛先の処理時に競合する入力が存在する場合に生成されます。
BCG210066	パッケージおよびコンテンツのビジネス ID を異なるパートナーにマップします	元パートナー ID = {0}、宛先パートナー ID = {1}、元パッケージ・パートナー ID = {2}、宛先パッケージ・パートナー ID = {3}	エラー	このイベントは、内容とパッケージのルーティング情報に不一致が存在する場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG210201	Doctype 処理中の PIP のロードに失敗しました	Doctype の処理中に、文書の PIP をロードできません	重大	このイベントは、PIP のスペックが見つからない場合に生成されます。構成の問題がなければ発生しません。
BCG210202	Doctype 処理中の例外	Doctype 処理中の例外: {0}	重大	このイベントは、DocType タグの挿入時にシステム障害が発生した場合に生成されます。
BCG210203	DoctypeProcess エラー: アクションが見つかりません	DoctypeProcess エラー: アクションが見つかりません	重大	このイベントは、PIP DocType のスペックが見つからない場合に生成されます。
BCG230004	検証の内部エラー	{0}	重大	このイベントは、検証処理中に内部システム障害が発生した場合に生成されます。
BCG230006	検証データベース・エラー	{0}	重大	このイベントは、検証処理中のデータベース・エラーが発生した場合に生成されます。
BCG230007	検証ビジネス・プロセス・ファクトリー・エラー	{0}	重大	このイベントは、システムが検証エンジンに送付するプロセスを判別できなかった場合に生成されます。
BCG230009	RosettaNet 検証エラー	{0}	エラー	このイベントは、文書が RosettaNet プロセスの検証を完了できなかった場合に生成されます。
BCG230010	データ検証エラー	文書のデータ検証に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、文書がデータ検証に失敗して拒否された場合に生成されます。
BCG230012	AS シーケンス検証エラー	{0}	エラー	このイベントは、文書が EDIINT プロセスの検証を完了できなかった場合に生成されます。
BCG240003	RosettaNet アンパック・エラー	RosettaNet アンパック・エラー	エラー	このイベントは、システムがアンパック時に RosettaNet プリアンプルを解析できなかった場合に生成されます。
BCG240005	RNPackager 送達ヘッダー・パーサーの失敗	送達ヘッダー・パーサー・エラー: {0}	エラー	このイベントは、システムがアンパック時に RosettaNet 送達ヘッダーを解析できなかった場合に生成されます。
BCG240007	RNPackager サービス・ヘッダーの失敗	サービス・ヘッダー・パーサー・エラー: {0}	エラー	このイベントは、システムがアンパック時に RosettaNet サービス・ヘッダーを解析できなかった場合に生成されます。
BCG240009	RNPackager MIME 解析の失敗	MIME 解析エラー: {0}	エラー	このイベントは、アンパック時に RosettaNet メッセージの MIME 構文解析でエラーが発生した場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240011	RNPackager 署名に失敗しました	デジタル署名の検証に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、アンパック時にデジタル署名の検証が失敗した場合に生成されます。
BCG240012	RN アンパック状態更新エラー	データベース・アクセスに失敗しました。RosettaNet 状態を更新できませんでした	重大	このイベントは、RosettaNet の状態の更新時に、アンパッカーがデータベース通信エラーを検出した場合に生成されます。
BCG240013	参加者証明書が署名者に一致していませんでした	署名者証明書の上の名前/シリアルがデータベース項目に一致しませんでした	エラー	このイベントは、DUNS 検査の証明書がデジタル署名に失敗した場合に生成されます。
BCG240014	文書に署名がありません	文書に署名がありません	エラー	このイベントは、TPA で署名が必要だが文書内に見つからない場合に生成されます。
BCG240015	RosettaNet 文書作成の失敗	{0}	重大	このイベントは、RosettaNet 文書の作成に失敗した場合に生成されます。
BCG240016	RosettaNet 否認防止エラー	{0}	エラー	このイベントは、受信肯定応答に前のメッセージの正しいダイジェストが格納されていないか、ダイジェストが欠落している場合に生成されます。
BCG240031	インスタンス・パッケージ化エラー	エラー: {0}	重大	このイベントは、システムが指定の文書タイプのパッケージャーを検出できなかった場合に生成されます。
BCG240036	インスタンス・アンパック・エラー	エラー: {0}	エラー	このイベントは、システムが文書のアンパッカーを検出できなかった場合に生成されます。
BCG240065	接続による XML の構文解析に失敗しました	XML 接続の構文解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、XML メッセージの接続情報が見つからなかった場合に生成されます。
BCG240068	接続パーサー RosettaNet の失敗	接続による RosettaNet の構文解析に失敗しました	エラー	このイベントは、RosettaNet 文書内に接続情報が見つからなかった場合に生成されます。
BCG240070	XML 接続解析の失敗	XML 接続の解析に失敗しました	エラー	このイベントは、システムが XML ファイルの接続情報を検出できなかった場合に生成されます。
BCG240071	フラット・ファイル接続解析の失敗	フラット・ファイル接続の解析に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、システムがフラット・ファイルの接続情報を検出できなかった場合に生成されます。
BCG240078	Web サービス接続の解析に失敗しました	Web サービス接続の解析に失敗しました	エラー	このイベントは、システムが SOAP メッセージの接続情報を検出できなかった場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240409	AS アンパッケージャーの失敗	AS アンパッケージャー・エラー: {0}	エラー	このイベントは、AS アンパッケージャーに障害が発生した場合に生成されます。
BCG240411	AS 署名の失敗	AS 署名検証エラー: {0}	エラー	このイベントは、AS 署名の検証が失敗した場合に生成されます。
BCG240412	AS 状態エンジン DB の失敗	AS 状態エンジン DB エラー: {0}	重大	このイベントは、AS 状態エンジンのデータベースに障害が発生した場合に生成されます。
BCG240415	AS パッケージャーの失敗	AS パッケージャー・エラー: {0}	重大	このイベントは、AS パッケージャーに障害が発生した場合に生成されます。
BCG240416	AS 否認防止エラー	{0}	エラー	このイベントは、AS 否認防止が失敗した場合に生成されます。
BCG240417	復号に失敗しました	{0}	エラー	このイベントは、復号に失敗すると生成されます。
BCG240418	Message Digest を生成できません	{0}	エラー	このイベントは、システムがメッセージ・ダイジェストを生成できなかった場合に生成されます。
BCG240419	サポートされない署名形式	{0}	エラー	このイベントは、システムがサポートされない署名形式を受け取った場合に生成されます。
BCG240420	サポートされない署名アルゴリズム	{0}	エラー	このイベントは、システムがサポートされない署名アルゴリズムを受け取った場合に生成されます。
BCG240421	予期しないエラー	{0}	重大	このイベントは、システムが予期しないエラーを検出した場合に生成されます。
BCG240422	この MDN の AS 文書が見つかりません	{0}	エラー	このイベントは、MDN が受信され、これに対応する文書が見つからない場合に生成されます。
BCG240423	入力ファイルの障害	文書で無効な入力ファイルが渡されました	エラー	このイベントは、無効な入力ファイルが検出された場合に生成されます。
BCG240424	メッセージ・セキュリティ不足	{0}	エラー	このイベントは、メッセージ・セキュリティ不足が発生した場合に生成されます。
BCG240500	RosettaNet 状態エンジン・エラー	RosettaNet 状態エンジン・エラー	重大	このイベントは、RosettaNet 状態エンジンによってシステム・エラーが検出された場合に生成されます。
BCG240600	AS 状態エンジン・エラー	AS 状態エンジン・エラー: {0}	重大	このイベントは、RosettaNet 状態エンジンによってシステム・エラーが検出された場合に生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG240601	AS 再試行の失敗	AS 属性の最大再試行制限に達しました	エラー	このイベントは、AS の再試行が失敗した場合に生成されます。最大再試行制限に達しています。
BCG250001	文書の送達に失敗しました	参加者ゲートウェイへの文書送達に失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、参加者のゲートウェイへの文書の送達が失敗し、文書が障害の状態に設定された場合に生成されます。
BCG250002	送達スケジューラーが失敗しました	Delivery Scheduler で内部エラーが発生しました: {0}	重大	このイベントは、Delivery Manager 内部に未分類の内部エラーが発生した場合に生成されます。これは、送達の失敗ではなく、ゲートウェイまたは文書データに問題があったことが原因です。
BCG250005	FTP 送達に失敗しました	参加者ゲートウェイへの FTP 送達に失敗しました。 例外: {0}	エラー	このイベントは、FTP プロトコル文書の送達が失敗したが、再試行の続行が可能な場合に生成されます。最後の失敗ではイベント 250001 が生成されます。
BCG260002	RosettaNet パススルー・ロギングに失敗しました	RosettaNet パススルー・プロセス表示ロギングに失敗しました: {0}	エラー	このイベントは、文書が RN パススルー・ロギングに失敗した場合に生成されます。
BCG800000	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセスの取得に失敗しました	ファクトリーが、コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセスのインスタンスの取得に失敗しました。理由: {0}	重大	このイベントは、ビジネス・プロセスのコミュニティ・マネージャー・アクションが見つからなかった場合に生成されます。
BCG800001	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセス入り口	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセス {0} 入り口	デバッグ・イベント	
BCG800002	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセス出口	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセス {0} 出口	デバッグ・イベント	
BCG800003	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセスが正常に終了しました	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセスが正常に終了しました	情報	
BCG800004	コミュニティ・マネージャー・ビジネス・プロセスがデータベース・エラーを検出しました	{0}	重大	このイベントは、コミュニティ・マネージャーのアクションを処理中にデータベース・エラーが発生すると生成されます。
BCG800005	コミュニティ・マネージャー・プロセスが内部エラーを検出しました	{0}	重大	このイベントは、コミュニティ・マネージャーのアクションを処理中に内部システム・エラーが発生すると生成されます。

表 34. 障害発生時イベント (続き)

イベント	イベント名	内部での記述	重大度	詳細な説明
BCG800006	コミュニティー・マネージャー・ビジネス・プロセスの警告	{0}	警告	
BCG800007	MSA ファイルの廃棄	MSA ファイルの廃棄	デバッグ・イベント	
BCG900001	0A1 サービス・コンテンツを受信しました	0A1 サービス・コンテンツを受信しました	情報	

付録 C. BCG.Properties

次の表には、コンソール、Receiver、およびルーターを制御する BCG.Properties ファイルのすべての構成可能パラメーターが記載されています。

表 35. コンソール固有のプロパティ

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
## DR モード標識プロパティ			
console.environment		空白または DR	コンソールに表示され、これが DR 環境かどうかを示すテキスト・ストリング
## バージョン標識			
console.version	4.2.1	バージョン番号	通知の目的で使用されるテキスト・ストリング
## DB プロシージャ監視デバッグ・レベル ## 0 = オフ、1 = オン			
ibm.bcg.db.debugLevel	0	0、1	データベースのデバッグをオンまたはオフに設定
##### log4j デバッグ・プロパティの開始 ##### # Viacore Log4J デバッグ・プロパティ # 可能なカテゴリー - debug/info/warn/error/fatal # デフォルトのカテゴリー「error」、出力先: STDOUT および RollingFile			
log4j.rootCategory	error, stdout, RollingFile	debug, info, warn, error, fatal	すべてのコンテナのルート・ロギング設定
log4j.appender.stdout	org.apache.log4j.FileAppender		Log4J ライブラリーに使用するロギング Java クラス
log4j.appender.stdout.File	System.out		
log4j.appender.stdout.layout	org.apache.log4j.PatternLayout		Log4J ライブラリーに使用するロギング Java クラス
log4j.appender.stdout.layout.ConversionPattern	%d{ABSOLUTE} %c{1} [%t] - %m%n		ログ・ファイルのロギング・パターン
log4j.appender.RollingFile	org.apache.log4j.RollingFileAppender		Log4J ライブラリーに使用するロギング Java クラス

表 35. コンソール固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
log4j.appender.RollingFile.File	\$CONSOLE_ INSTALL_DIR\$ /logs/server1 /wbic_console.log		ローリング・ログ・ファイル名およびパス
log4j.appender.RollingFile.MaxFileSize	1000KB		ローリング前のログ・ファイルの最大サイズ
log4j.appender.RollingFile.MaxBackupIndex	5		ローリング済みログ・ファイルの最大数
log4j.appender.RollingFile.layout	org.apache.log4j. PatternLayout		Log4J ライブラリーに使用するロギング Java クラス
log4j.appender.RollingFile.layout. ConversionPattern	%d{DATE} %c {2} [%t] - %m%n		ログ・ファイルのロギング・パターン
ibm.bcg.appserver.loggerClass	com.viacore. shared.logging. Log4jLogger		使用する適切なロギング・クラスを指定
## コンソール・グローバル appserver プロパティ			
ibm.bcg.appserver.ejbEnabled	TRUE	true、false	管理サービスが EJB と直接サービスのどちらを使用するかを指定
ibm.bcg.appserver.mgmt.pool. maxsize	20		EJB プールのサイズ
ibm.bcg.appserver.mgmt.ctx. instancepolicy	singleton		JNDI 初期コンテキスト・ポリシー
java.naming.security.principal	admin		JNDI セキュリティー・プリンシパル・パラメーター
## Websphere JNDI 設定			
ibm.bcg.appserver. jndiInitialContextFactory	com.ibm. websphere. naming.Wsn InitialContext Factory		JNDI コンテキスト・ファクトリー
ibm.bcg.appserver. jndiContextProviderURL	corbaloc:iiop: localhost:52809		JNDI プロバイダー URL
ibm.bcg.appserver.jdbcJndiPool	\$CONSOLE .JNDI\$	datasources/DB2 DS,datasources /OraclePool	データ・ソース JNDI プレフィックス
# データベース JDBC スキーマ			
ibm.bcg.db.product	\$CONSOLE.DB. TYPE\$	db2、oracle	データベース・タイプ
bcg.co.db.schema	\$CONSOLE.DB. SID\$		スキーマ情報 (DB2 - データベース所有者、Oracle - スキーマ所有者)

表 35. コンソール固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
## JMS ポスター・インスタンス ## 可能な値は次のとおりです。 ## com.ibm.bcg.shared.event.MQSeriesPoster			
ibm.bcg.jmsPosterInstance	com.ibm.bcg.shared.event.MQSeriesPoster		
## イベント通知用の JMS プロパティ ## JNDI プロバイダー URL			
ibm.bcg.jms_cntxt_url	file:\$CONSOLE_INSTALL_DIR\$/jndi		JMS 情報で使用される .binding ファイルの場所
ibm.bcg.jms_jndi_factory	com.sun.jndi.fscontext.RefFSContextFactory		
## 接続ファクトリー名			
ibm.bcg.jms.qconnFactory.name	WBIC/QCF		JMS キュー接続ファクトリー名
ibm.bcg.jms.topicconnFactory.name	WBIC/TCF		JMS トピック接続ファクトリー名
ibm.bcg.jms.queue.name	WBIC/datalogQ		JMS キュー名
## ゲートウェイ・キュー			
ibm.bcg.outbound.gatewayDirectory	\$SHARED_DATA_DIR\$/gateways		ゲートウェイ・ディレクトリー
## VTP			
ibm.bcg.certs.vtp.CertificateDir	\$SHARED_DATA_DIR\$/security/certs		w/ VTP を使用するためのクライアント証明書の場所
ibm.bcg.certs.vtp.Certificate			VTP 公開鍵 (DER、バイナリー・フォーマット)
ibm.bcg.certs.vtp.PrivateKey			VTP 秘密鍵 (pkcs8、バイナリー・フォーマット)
ibm.bcg.certs.vtp.Passwd			VTP 秘密鍵のパスワード
ibm.bcg.certs.vtp.VerifySig	FALSE	true、false	VTP が署名者を検証するかどうか (true、false) を指定
ibm.bcg.vtp.RouterIn	\$SHARED_DATA_DIR\$/router_in		Router In ディレクトリー
## EAI ディレクトリー管理			
ibm.bcg.EAIDocDir	Documents		コンソールにルーターが使用する EAI ディレクトリーの名前を付与

表 35. コンソール固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
## 特殊文字 (partnerLogin、Receiver、および宛先タイプ (ゲートウェイ・タイプ) の検証に使用) ## 注: / ¥ の文字を許容するキーと許可しないキーの 2 つのキーが定義されます。 ## 国際化対応のため、これらの値は OS の言語やディレクトリー名に許可される文字に応じて変わります。			
ibm.bcg.specialChars	!#;¥& /?.,		
ibm.bcg.specialCharsDir	!#;& ?.,		

表 36. Receiver 固有のプロパティ

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
##### これを設定すると bcg.prperties のロギング設定は無視されます。			
bcg.use_container_logging	TRUE	true、false	
##### BCG DB ##			
bcg.co.db.DBType	\$RECEIVER. DB.TYPE\$	db2、oracle	データベース・タイプ
bcg.co.db.DBPoolName	\$RECEIVER. JNDI\$	datasources/DB2DS, datasources/Oracle Pool	データ・ソース JNDI プレフィックス
bcg.co.jndiContextURL	corbaloc:iiop: localhost:57809		JNDI プロバイダー URL
bcg.co.jndiFactory	com.ibm. websphere. naming. WsnInitial ContextFactory		JNDI コンテキスト・ファクトリー
bcg.co.db.schema	\$RECEIVER. DB.SID\$		スキーマ情報 (DB2 - データベース所有者、Oracle - スキーマ所有者)
##### MQ PROPS			
bcg.use_oaq	FALSE	true、false	
bcg.jms.queue.factory	WBIC/QCF		JMS キュー接続ファクトリー名
bcg.jms.topic.factory	WBIC/TCF		JMS トピック接続ファクトリー名
bcg.jms.jndi_factory	com.sun.jndi. fscontext.RefFS ContextFactory		JNDI サーバーに接続するために使用されるクラス

表 36. Receiver 固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.context_url	file:\$RECEIVER _INSTALL_DIR\$ /jndi		JMS 情報で使用される .binding ファイルの場所
##### BPE			
bcg.oaq_log_q	WBIC/datalogQ		JMS キュー名
##### RECEIVER MBEAN			
bcg.vms_receiver_reject_dir	\$SHARED_DATA _DIR\$/receiver /reject		Receiver が拒否したメッセージを 格納するファイル・システム・パス
bcg.vms_receiver_tmp_dir	\$SHARED_DATA _DIR\$/receiver /tmp		Receiver が一時メッセージを保管 するファイル・システム・パス
##### END RECEIVER MBEAN			
bcg.receiver.persistpath	\$SHARED_DATA _DIR\$/router_in/		Receiver がインバウンド RosettaNet シグナルを保持するフ ァイル・システム・パス
bcg.receiver.sync.persistpath	\$SHARED_DATA _DIR\$/sync_in		Receiver が同期 RosettaNet シグ ナルの Receiver を保持するファ イル・システムのパス
bcg.receiver.sync.sync CheckClasses	com.ibm.bcg. server.sync. SyncRosettaNet Requestlcom.ibm .bcg.server.sync. SyncAS2Requestl com.ibm.bcg. server.sync.Sync SOAPRequestl com.ibm.bcg. server.sync.Sync cXMLRequest		
bcg.receiver.sync.responseURL	/bcgreceiver/ SyncResponse		同期応答の送信先 URI
bcg.receiver.sync. responseURL.port	\$RECEIVER _HTTP_PORT\$		Receiver の HTTP ポート
## サブレット・プロパティ ## Receiver のサブレットによって メタデータとして保持される HTTP ヘ ッダー ## 「viacore.http.hdrdef」で始まる すべてのプロパティは、 ## 保持されるヘッダーとして解釈さ れます。			

表 36. Receiver 固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.http.hdrdef.fromID	x-aux-sender-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.toID	x-aux-receiver-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.protocol	x-aux-protocol		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.protocolVersion	x-aux-protocol-version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.process	x-aux-process-type		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.processVersion	x-aux-process-version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.msgid	x-aux-msg-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.contentType	content-type		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.systemMsgId	x-aux-system-msg-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.RNResponseType	x-rn-response-type		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.RNVersion	x-rn-version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.productionFlag	x-aux-production		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.provSessionId	x-aux-prov-session-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.processInstanceId	x-aux-process-instance-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.contentLength	Content-Length		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー

表 36. Receiver 固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.http.hdrdef. as2From	AS2-From		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. as2To	AS2-To		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. as2Version	AS2-Version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. mimeVersion	Mime-Version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. messageId	Message-ID		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. date	Date		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. from	From		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. subject	Subject		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. contentTransferEncoding	Content-Transfer-Encoding		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. contentDisposition	Content-Disposition		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. dispositionNotificationTo	Disposition-Notification-To		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. dispositionNotificationOptions	Disposition-Notification-Options		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. receiptDeliveryOption	Receipt-Delivery-Option		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. toPackagingName	ToPackaging Name		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. asDocType	ASDocType		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー

表 36. Receiver 固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.http.hdrdef. recipientAddress	Recipient-Address		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. authorization	Authorization		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef. soapAction	SOAPAction		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー

表 37. ルーター固有のプロパティ

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
##### これを設定して viacore.prproperties のロギング設定が無視されるようにします。			
bcg.use_container_logging	TRUE	true、false	
##### サード・パーティーの duns #####	105217165		
bcg.duns			
##### BCG DB ##			
bcg.co.db.DBType	\$ROUTER.DB.TYPES	db2、oracle	データベース・タイプ
bcg.co.db.DBPoolName	\$ROUTER.JNDI\$	datasources/DB2DS,datasources/OraclePool	データ・ソース JNDI プレフィックス
bcg.co.jndiContextURL	corbaloc:iiop:localhost:56809		JNDI プロバイダー URL
bcg.co.jndiFactory	com.ibm.websphere.naming.WsnInitialContextFactory		JNDI コンテキスト・ファクトリー
bcg.co.db.schema	\$ROUTER.DB.SID\$		スキーマ情報 (DB2 - データベース所有者、Oracle - スキーマ所有者)
##### MQ PROPS			
bcg.use_oaq	FALSE	true、false	
bcg.jms.queue.factory	WBIC/QCF		JMS キュー接続ファクトリー名
bcg.jms.topic.factory	WBIC/TCF		JMS トピック接続ファクトリー名
bcg.jms.jndi_factory	com.sun.jndi.fscontext.RefFSContextFactory		JNDI サーバーに接続するために使用されるクラス

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.jms.context_url	file:\$ROUTER_ INSTALL_DIR\$ /jndi		JMS 情報で使用される .binding フ ァイルの場所
##### BPE #####			
bcg.oaq_log_q	WBIC/datalogQ		JMS Log Receiver のキュー名
# Document Manager によってサポート されている最大ファイル・サイズ # (バイト単位)。例: 52000000 = 52MB。0 = 制限なし。			
bcg.bpe_max_file_size	0		最大ファイル・サイズ (バイト単 位)
bcg.bpe_in_workflow	com.ibm.bcg. server.transport. Transport UnPackaging Factory com.ibm. bcg.server. ChannelParse Factory com.ibm .bcg.destination. DestinationParse Factory com.ibm. bcg.destination. Destination ProcessFactory com.ibm.bcg. server.Channel CheckFactory com.ibm.bcg. server.transport. Transport LoggingFactory com.ibm.bcg. duplicate. Duplicate ProcessFactory		
bcg.bpe_out_workflow	com.ibm.bcg. server.pkg. PackagingFactory com.ibm.bcg. server.transport. Transport PackagingFactory		
## MAIN RTR ##			
bcg.oaq_bpe_in.main	WBIC/main_ InboundQ		JMS メインのインバウンド・キュ ー名

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.oaq_bpe_out.main	WBIC/delivery ManagerQ		JMS Delivery Manager キュー名
bcg.inbound_poll_interval.main	1000		ディレクトリー・スキャンごとの 時間 (ミリ秒)
bcg.inbound_files_per_pass.main	5		スキャンごとに取得できる最大フ ァイル数
bcg.in_thread_count.main	2		メイン・ルーターのインバウン ド・スレッドの数
bcg.bpe_thread_count.main	2		メイン・ルーターの BPE スレ ッドの数
bcg.vms_inbound_directory.main	\$\$SHARED_DATA _DIR\$/router_in		メイン・ルーターのインバウン ド・ディレクトリー
bcg.bpe_temp_directory.main	\$\$SHARED_DATA _DIR\$/dat		メイン・ルーターのデータ・ディ レクトリー
## SIGNAL RTR ##			
bcg.oaq_bpe_in.signal	WBIC/signal _InboundQ		JMS シグナルのインバウンド・キ ュー名
bcg.oaq_bpe_out.signal	WBIC/delivery ManagerQ		JMS Delivery Manager キュー名
bcg.inbound_poll_interval.signal	1000		ディレクトリー・スキャンごとの 時間 (ミリ秒)
bcg.inbound_files_per_pass.signal	5		スキャンごとに取得できる最大フ ァイル数
bcg.in_thread_count.signal	2		シグナル・ルーターのインバウン ド・スレッドの数
bcg.bpe_thread_count.signal	2		シグナル・ルーターの BPE スレ ッドの数
bcg.vms_inbound_directory.signal	\$\$SHARED_DATA _DIR\$/signal_in		シグナル・ルーターのインバウン ド・ディレクトリー
bcg.bpe_temp_directory.signal	\$\$SHARED_DATA _DIR\$/data		シグナル・ルーターのデータ・デ ィレクトリー
## SYNCHRONOUS RTR ##			
bcg.oaq_bpe_in.synchronous	WBIC/sync _InboundQ		JMS 同期インバウンド・キュー名
bcg.oaq_bpe_out.synchronous	WBIC/delivery ManagerQ		JMS Delivery Manager キュー名
bcg.inbound_poll_interval. synchronous	1000		ディレクトリー・スキャンごとの 時間 (ミリ秒)
bcg.inbound_files_per_pass. synchronous	5		スキャンごとに取得できる最大フ ァイル数
bcg.in_thread_count.synchronous	2		同期ルーターのインバウンド・ス レッドの数
bcg.bpe_thread_count.synchronous	2		同期ルーターの BPE スレッドの 数

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.vms_inbound_directory.synchronous	\$\$SHARED_DATA_DIR\$/sync_in		同期ルーターのインバウンド・ディレクトリー
bcg.bpe_temp_directory.synchronous	\$\$SHARED_DATA_DIR\$/data		同期ルーターのデータ・ディレクトリー
## DESTINATION ##			
bcg.destination.destination_class	com.ibm.bcg.destination.H2DestinationProcess		宛先クラス
### RECEIVER MBEAN ###			
bcg.vms_receiver_reject_dir	\$\$SHARED_DATA_DIR\$/receiver/reject		Receiver が拒否したメッセージを格納するファイル・システム・パス
bcg.vms_receiver_tmp_dir	\$\$SHARED_DATA_DIR\$/receiver/tmp		Receiver が一時メッセージを保管するファイル・システム・パス
### DUPLICATE ###			
bcg.duplicate.DupField1	x-aux-system -msg-id		
bcg.duplicate.DupField2	なし		
bcg.duplicate.DupField3	なし		
bcg.duplicate.DupField4	なし		
bcg.duplicate.DupField5	なし		
bcg.duplicate.DupField6	なし		
bcg.duplicate.DupField7	なし		
bcg.duplicate.DupField8	なし		
bcg.duplicate.DupField9	なし		
bcg.duplicate.DupField10	なし		
### LogReceiver ###			
bcg.logReceiver.queue	WBIC/datalogQ		JMS Log Receiver のキュー名
bcg.logReceiver.initialNumberOfReceivers	4		Log Receiver の数
bcg.dberrors.queue	WBIC/datalogErrorQ		JMS Log Receiver のエラー・キュー名
### アラート・エンジン ###			
bcg.alertQueue.queue	WBIC/alertQ		JMS アラート・キュー名
bcg.alertQReceiver.initialNumberOfReceivers	1		Alert Receiver の数
bcg.alertQReceiver.maxRetries	100		アラート再試行の最大回数
bcg.alertQReceiver.retryInterval	60000		アラートの再試行間隔 (ミリ秒)
bcg.eventAlertQReceiver.queue	WBIC/alertEventQ		JMS アラート・イベント・キュー名

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.eventAlertQReceiver. initialNumberOfReceivers¥	1		Alert Event Receiver の数
# ボリューム・アラート終了時刻の長時間後にこれを設定し、文書をシステムで受け取ったことを記録してから、 # アラートを評価できるようにします。			
bcg.volumeAlertScheduler.allowance ForProcessingReceivedDocInMins	10		
# これらのパラメーターにより、過剰な E メール通知を防止できます。 「maxNotificationIntervalInMins」の時間間隔に、同じアラートが # 「maxNotificationsInInterval」より多く発生する場合、 「minNotificationQuietInterval InMins」の時間間隔内に同じタイプのアラートを # アラトを受け取らなくなるまでアラートは保持され、 「heldAlertsBatchTimeInMins」ごとにバッチ処理されます。			
bcg.alertNotifications. maxNotificationsInInterval	10		
bcg.alertNotifications. maxNotificationIntervalInMins	30		
bcg.alertNotifications. minNotificationQuietInterval InMins	30		
bcg.alertNotifications. heldAlertsBatchTimeInMin	30		
# パートナーの E メール・アドレスが無効などの理由によって戻された通知は、 # bcg.alertNotifications. mailEnvelopeFrom に移動します。			
bcg.alertNotifications. mailHost	\$ROUTER.ALERT S.SMTP_RELAY\$		SMTP リレー・ホスト
bcg.alertNotifications. mailFrom	\$ROUTER.ALERT S.MAIL_FROM\$		「送信元」メール・アドレスのアラート
bcg.alertNotifications. mailReplyTo	\$ROUTER.ALERT S.MAIL_FROM\$		「送信元」メール・アドレスのアラート
bcg.alertNotifications. mailEnvelopeFrom	\$ROUTER.ALERT S.MAIL_FROM\$		「送信元」メール・アドレスのアラート

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
# 証明書有効期限イベント生成プログラムの実行時刻 # <分> <時間> <クラス名> # これは午前 1:13 に実行されます。			
alert.eventGenerator.schedule	13 1 Certificate Expiration		
### Delivery Manager ###			
bcg.delivery.gatewayDirectory	\$_SHARED_DATA _DIR\$/gateways		Gateways ディレクトリーの場所
bcg.delivery.smtpHost	\$_ROUTER.DM. SMTP_RELAYS\$		SMTP メール・ホスト
bcg.delivery.smtpHostPort	\$_ROUTER.DM. SMTP_RELAY. PORTS\$		SMTP メール・ポート
bcg.delivery.responseDir	\$_SHARED_DATA _DIR\$/sync_in		Synchronous ディレクトリーの場所
bcg.delivery.msMaxFileLockLife	180000		ファイルがロックされる最大時間 (ミリ秒)
bcg.delivery.threadPoolMaxThreads	50		
bcg.delivery.gatewayMaxThreads	20		ゲートウェイ・スレッドの最大数
bcg.delivery.gwTransportMaxRetries	3		ゲートウェイごとの再試行回数
# ミリ秒単位で、すべてのゲートウェイに適用されます。			
bcg.delivery.gwTransport RetryInterval	3000		ゲートウェイの再試行間隔 (ミリ秒)
bcg.delivery.queue	WBIC/delivery ManagerQ		JMS Delivery Manager キュー名
bcg.deliveryQReceiver. initialNumberOfReceivers	10		Gateway Receiver の数
bcg.delivery.numberOfLoggers	10		
# 応答サーブレットへの同期応答の配信			
bcg.syncdelivery.queue	WBIC/sync DeliveryManagerQ		JMS 同期 Delivery Manager キュー名
bcg.syncdeliveryQReceiver. initialNumberOfReceivers	3		同期 Delivery Manager Receiver の数
#bcg.deliveryQReceiver.jmsLog	jms.log		
bcg.delivery.jmstimeout	60000		
# 通知に関するソケットのタイムアウト (ミリ秒)			
bcg.http.socketTimeout	120000		HTTP ソケットのタイムアウト
bcg.http.version	1.1	1.0, 1.1	HTTP バージョン

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
### RosettaNet ###			
bcg.rosettanet.retryWaitTmMS	5000		
bcg.rosettanet.strictBoundaryParse	FALSE	true、false	
bcg.rosettanet.mimeBoundaryValidate	FALSE	true、false	
## プロパティが存在し、それが「Literal」である場合は、 x-aux-production が文字どおり ## 「Production」、「Test」であると想定します。プロパティが存在しないか、または ## 「Literal」ではない場合は、 x-aux-production が「True」または「False」であると想定します。 ## どの値も大/小文字を区別しません。			
bcg.rosettanet.globalUsageCode	Literal	Literal、 Production、Test	
## x-aux-production ヘッダーが「Production」、「Test」、「True」、「False」のいずれでもなく、 ## このプロパティが「1」に設定されている場合は、プロパティ viacore.rosettanet.defaultGlbUsageCd の ## 値セットをデフォルトに設定します。			
bcg.rosettanet.default UsageCdOnErr	1		
bcg.rosettanet.defaultGlbUsageCd	Production	Production、Test	
## プロパティが存在し、「1」に等しい場合は、ビルダーが x-aux-process-instance-id を ## 提供し、これをアウトバウンド要求のプロセス・インスタンス ID として使用することを ## 想定しています。			
bcg.rosettanet.useBuilder ProcessInstanceId	1		
## ビルダーから提供された process-instance-id が (理由のいかんを問わず) 無効の場合は、 ## 新規の process-instance-id を生成できます。			

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rosettanet.genProcess InstanceIdOnError	1		
#####			
bcg.receiver.persistpath	\$SHARED_DATA _DIR\$/router_in/		
### RNE ###			
bcg.rne.inbound_poll_interval	1000		RosettaNet エンジンのポーリング 間隔 (ミリ秒)
bcg.rne.in_thread_count	2		RosettaNet エンジンのスレッド数
bcg.rne.work_size	50		
bcg.OA1.fromContactName	\$ROUTER. CONTACT_ NAMES\$		OA1 の連絡先名
bcg.OA1.fromEMailAddr	\$ROUTER. CONTACT. MAIL_FROM\$		OA1 の E メール・アドレス
bcg.OA1.fromPhoneNbr	\$ROUTER. CONTACT. PHONE_NO\$		OA1 の電話番号
bcg.OA1.fromFaxNbr	\$ROUTER. CONTACT. FAX_NO\$		OA1 の FAX 番号
## HTTP/S 関連プロパティ			
bcg.http.CRLDir	\$SHARED_DATA _DIR\$/security /crl/		CRL ディレクトリーへのパス
bcg.http.SSLDebug	FALSE	true、false	
## デジタル署名関連プロパティ			
bcg.rosettanet.signature.CRLDir	\$SHARED_DATA _DIR\$/security /crl/		CRL ディレクトリーへのパス
# 可能な値: SHA1,MD5			
bcg.rosettanet.signature. DigestAlgorithm	SHA1	sha1、md5	
# 可能な値: true、false			
bcg.rosettanet.signature. RejectIfFailVal	TRUE	true、false	
# 可能な値: true、false			
bcg.rosettanet.signature. VerifySigner	TRUE	true、false	
## 暗号化プロパティ			

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.rosettanet.encrypt.CRLDir	\$\$SHARED_DATA _DIR\$/security /crl/		CRL ディレクトリーへのパス
bcg.rosettanet.encrypt. CertDbRefreshInterval	600000		
# 有効な値: 3des、rc5、rc2-40			
bcg.rosettanet.encrypt.Algorithm	3des	3des、rc5	暗号化アルゴリズム
# 署名を検証するために証明書を読み込みます。VTP 署名の検証に使用します。			
bcg.certs.vtp.CertificateDir	\$\$SHARED_DATA _DIR\$/security /vtp		
## サブレット・プロパティ ## Receiver のサブレットによってメタデータとして保持される HTTP ヘッダー ## 「viacore.http.hdrdef」で始まるすべてのプロパティは、 ## 保持されるヘッダーとして解釈されます。			
bcg.http.hdrdef.fromID	x-aux-sender-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.toID	x-aux-receiver-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.protocol	x-aux-protocol		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.protocolVersion	x-aux-protocol -version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.process	x-aux-process -type		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.processVersion	x-aux-process -version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.msgid	x-aux-msg-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.http.hdrdef.contentType	content-type		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.systemMsgId	x-aux-system -msg-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.RNResponseType	x-rn-response -type		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.RNVersion	x-rn-version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.productionFlag	x-aux-production		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.provSessionId	x-aux-prov -session-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.processInstanceId	x-aux-process- instance-id		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.contentLength	Content-Length		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.as2From	AS2-From		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.as2To	AS2-To		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.as2Version	AS2-Version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.mimeVersion	Mime-Version		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.messageId	Message-ID		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.date	Date		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.from	From		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
bcg.http.hdrdef.subject	Subject		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.contentTransferEncoding	Content-Transfer-Encoding		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.contentDisposition	Content-Disposition		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.dispositionNotificationTo	Disposition-Notification-To		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.dispositionNotificationOptions	Disposition-Notification-Options		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.receiptDeliveryOption	Receipt-Delivery-Option		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.toPackagingName	ToPackagingName		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
bcg.http.hdrdef.asDocType	ASDocType		BPE によって処理され、メタデータ・ファイルに保持される HTTP ヘッダー
# パッケージ化関連プロパティ # 次のいずれかのコンテンツ・タイプを持つ添付ファイルには、Base64 エンコードは行なわれません。			
bcg.pkg.sponsor.contenttypes	bcg.pkg.sponsor.contenttypes		
### スポンサー・エンジンの開始 ###			
bcg.sponsor.inbound_poll_interval	10000		
bcg.sponsor.in_thread_count	2		スポンサー・エンジンのインバウンド・スレッドの数
bcg.sponsor.work_size	10		
bcg.delivery.sponsor.eventMsgClass	com.ibm.bcg.delivery.sponsor.SponsorEventMessage		
### DB プロシーチャーのデバッグ・プロパティ ###			
DBProcDebug	1		データベースのデバッグ・フラグ
# グローバル状態エンジンのインスタンス ID			

表 37. ルーター固有のプロパティ (続き)

項目	デフォルト値	可能な設定	説明
GlobalStateEngInstanceId	bcg		
# EDIINT のデフォルト値			
bcg.ediint.reportingUA	WBI_Connect		
bcg.ediint.retry WaitTmMS	5000		

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director
IBM Burlingame Laboratory
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

Websphere Business Integration Connect には、ICU4J というコードが含まれています。ICU4J のコードは、IBM の「プログラムのご使用条件」に基づきその「適用除

外コンポーネント」の条項に従うことを条件に使用許諾されます。ただし、IBM は以下の条項を明示することを義務付けられています。

著作権および許可に関する注意事項

本「プログラム」は、IBM 社およびその他の著作権により保護されています。

Copyright (c) 1995-2003

All rights reserved.

このソフトウェアおよびその関連文書ファイル (以下「ソフトウェア」といいます) を取得する人には、この「ソフトウェア」の、使用、複製、変更、結合、出版、配布またはソフトウェアの複製を販売する権利を含め、制約なく取引する権利を無償で許可し、また、「ソフトウェア」を与えられた人にも、この権利が与えられます。ただし、上記の著作権表示およびこの許可通知が、すべてのこの「ソフトウェア」の複製に記載され、また上記の著作権表示およびこの許可通知が、関連文書に記載されている場合に限りです。

ソフトウェアは、特定物として現存するままの状態を提供され、第三者の権利の不侵害の保証、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含む、すべての明示もしくは黙示の保証責任または保証条件を負わないものとします。さらに、著作権者またはこの注意事項に含まれている権利の所有者は、このソフトウェアの使用または実行に起因するものであれ、関連するものであれ、契約、過失、不法行為のいずれによるものであれ、使用、データまたは利益の喪失から発生する請求、あるいは特別、直接的、間接的、結果的損害、または他の一切の損害について、何等の責任も負いません。

この通知に記されているもの、および事前の書面による承認がある場合を除き、著作権者の名前を、このソフトウェアの広告、または販売、使用、取引の促進のためにご使用になることはできません。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、存在する場合、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する上で役立つことを目的としています。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、このプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
IBM ロゴ
AIX
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
Lotus
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
Tivoli
WebSphere

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX、Pentium、および ProShare は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

他の会社名、製品名またはサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



WebSphere Business Integration Connect Enterprise and Advanced Editions バージョン 4.2.2

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

- アカウント管理アクティビティー 17
 - 拡張検索の実行 28
 - ゲートウェイ構成の管理 19
 - ゲートウェイ構成の削除 20, 21
 - ゲートウェイ構成のための情報 22
 - ゲートウェイの表示および編集 19
 - 参加者接続の管理 25
 - 参加者の検索 18
 - 参加者の属性値の変更 29
 - 参加者プロフィールの管理 17
 - 参加者プロフィールの表示および編集 17
 - 証明書の管理 23
 - 除外リストの管理 30
 - 除外リストの編集 31
 - 除外リストへの参加者の追加 30
 - 新規アクションの選択 30
 - 接続構成の変更 29
 - 接続コンポーネント 26
 - 接続の基本検索の実行 27
 - 接続の検索 27
 - 接続の使用不能化または非アクティブ化 30
 - 接続の重複 26
 - ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイの変更 30
 - デジタル証明書の使用不能化 24
 - デジタル証明書の表示および編集 24
 - デフォルト・ゲートウェイの表示 20
- アクション
 - 使用可能化または使用不能化 11
 - 新規の選択 30
- アクセス権
 - 詳細の表示および編集 12
- アクティビティー
 - アカウント管理 17
 - ハブ管理者 7
- 値
 - 参加者接続のテスト 41
 - 文書ビューアー 50, 51, 55, 56
- イベント
 - 検索 47
 - 検索条件 48
- イベント、再処理 79
- イベント・コード
 - 管理 12

- イベント・コード (続き)
 - 名前の保管 13
- イベント・コード名の保管 13
- イベント・タイプ 47
 - 説明 47
- イベント・ビューアー
 - イベント詳細の表示 48
 - 検索条件 48
 - 説明 46
- エクスポート
 - 文書ボリューム・レポート 40
- エラー・イベント・タイプ 47
- エラー・フィールド
 - 検証エラー 56
- お客様サービス x
- オンライン・ヘルプ x

[カ行]

- 会社
 - Web サイト x
- 拡張検索
 - 接続 28
- 画面
 - 「ユーザー・パスワードのリセット」メッセージ 18
- 管理
 - イベント・コード 12
 - ゲートウェイ構成 19
 - 参加者接続 25
 - 参加者プロフィール 17
 - 証明書 23
 - 除外リスト 30
 - パスワード・ポリシー 7
 - XML 形式 10
 - 基本検索、接続 27
 - キュー、文書の削除 35
 - キューからの文書の削除 35
 - キュー内の文書、表示 34
- ゲートウェイ
 - キューからの文書の削除 35
 - キュー内の文書の表示 34
 - キューの使用 33
 - 構成の管理 19
 - 構成の削除 20, 21
 - 状況の変更 35
 - 詳細の表示 35
 - ソースまたはターゲットの変更 30
 - デフォルトの表示 20
 - 必要な構成情報 22
 - 表示および編集 19
 - リストの表示 33

- ゲートウェイ構成のために必要な情報 22
- ゲートウェイ・キューの使用 33
- 警告イベント・タイプ 47
- 結果コード
 - Web サーバー 41
- 検索
 - イベント 47
 - 参加者 18
 - 接続 27
 - 接続の拡張 28
 - 接続の基本 27
 - 文書 54
 - メッセージ、AS1/AS2 ビューアー 49
 - RosettaNet プロセス 52
- 検索条件
 - イベント・ビューアー 48
 - 文書ビューアー 54
 - 文書分析 38
 - 文書ボリューム・レポート 40
 - AS1/AS2 ビューアー 50
 - RosettaNet ビューアー 52
- 検証エラー
 - 表示 56
- 構成
 - ゲートウェイに必要な情報 22
 - ゲートウェイの管理 19
 - ゲートウェイの削除 20, 21
 - 接続の変更 29
 - ターゲット 8
 - ダウンロード・パッケージ 9
 - 文書フロー定義 9
- コンポーネント
 - 接続 26

[サ行]

- 削除
 - ゲートウェイ構成 20, 21
 - ターゲット 9
 - XML 形式 10
- 作成
 - 文書ボリューム・レポート 39
- 参加者
 - 検索 18
 - 除外リストへの追加 30
 - 接続コンポーネント 26
 - 接続の拡張検索 28
 - 接続の管理 25
 - 接続の基本検索 27
 - 接続の検索 27
 - 接続の重複 26
 - 属性値の変更 29
 - プロファイルの管理 17
 - プロファイルの表示および編集 17
- 参加者接続のテスト
 - 値 41

- 参加者接続のテスト (続き)
 - 説明 41
 - Web サーバー結果コード 41
 - システム・イベントの非作動 80
- 実行
 - 接続の拡張検索 28
 - 接続の基本検索 27
- 重大イベント・タイプ 47
- 使用可能化
 - アクション 11
 - ターゲット 9
- 状況、ゲートウェイの変更 35
- 詳細、ゲートウェイの表示 35
- 使用不能化
 - アクション 11
 - 接続 30
 - ターゲット 9
 - デジタル証明書 24
- 証明書
 - 管理 23
 - 使用不能化 24
 - 表示および編集 24
- 除外リスト
 - 管理 30
 - 参加者の追加 30
 - 編集 31
- 新規アクション、選択 30
- 接続
 - 基本検索の実行 27
 - 検索 27
 - 構成の変更 29
 - コンポーネント 26
 - 参加者の管理 25
 - 使用不能化または非アクティブ化 30
 - 重複 26
- 接続の非アクティブ化 30
- 選択
 - 新規アクション 30
- ソース・ゲートウェイ、変更 30
- 属性
 - 参加者の値の変更 29

[タ行]

- ターゲット
 - ゲートウェイの変更 30
 - 構成 8
 - 削除 9
 - 使用可能化または使用不能化 9
 - 詳細の表示および編集 8
- ダウンロード・パッケージ、構成 9
- ツール
 - 参加者接続のテスト 41
 - 説明 37
 - 文書分析 37
 - 文書ボリューム・レポート 39

追加

除外リストへの参加者 30

通知イベント・タイプ 47

データベース、イベントおよびビジネス文書の再処理 79

データベース照会効率、最適化 77

データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス
文書の再処理 79

停止

ルーターおよび Receiver 5

Community Console 5

デジタル証明書

管理 23

使用不能化 24

表示および編集 24

デバッグ・イベント 47

デフォルト

ゲートウェイ 20

トラブルシューティング

再処理 79

シャットダウン 81

データベース照会効率の最適化 77

データベースへのログ記録に失敗したイベントおよびビジネス
文書の再処理 79

低性能およびシステム・イベントの非作動 80

破損後のルーターの再始動 82

マシン・シャットダウン後のシステムの始動 81

メモリー不足エラーの回避 78

ルーターの再始動 82

[ハ行]

破損、後の再始動 82

破損後のルーターの再始動 82

パッケージの詳細

AS1/AS2 ビューアー 51

ハブ管理者のアクティビティ 7

アクションの使用可能化または使用不能化 11

アクセス権の詳細の表示および編集 12

イベント・コードの管理 12

イベント・コード名の保管 13

ターゲットの構成 8

ターゲットの削除 9

ターゲットの使用可能化または使用不能化 9

ターゲットの詳細の表示および編集 8

パスワード・ポリシーの管理 7

文書フロー定義およびダウンロード・パッケージの構成 9

XML 形式の値の編集 10

XML 形式の管理 10

XML 形式の削除 10

必要な情報、ゲートウェイ構成 22

ビューアー

イベント・ビューアー 46

説明 45

文書ビューアー 53

AS1/AS2 ビューアー 49

RosettaNet ビューアー 51

表示

アクセス権の詳細 12

イベント 55

イベント詳細、イベント・ビューアー 48

キュー内の文書 34

ゲートウェイ 19

ゲートウェイの詳細 35

ゲートウェイ・リスト 33

検証エラー 56

参加者プロファイル 17

ターゲットの詳細 8

デジタル証明書 24

デフォルト・ゲートウェイ 20

プロセスおよびイベント詳細、文書分析 39

文書処理の詳細、RosettaNet ビューアー 53

文書の詳細 55

メッセージの詳細、AS1/AS2 ビューアー 50

ロー文書 53, 55

documents

文書分析 38

RosettaNet プロセスの詳細 52

プロファイル

参加者の管理 17

文書

キューからの削除 35

キュー内の表示 34

検索 54

再処理 79

詳細、文書ビューアー 55

処理の値、文書ビューアー 55

文書状態

定義 37

文書ボリューム・レポート 39

文書処理用語 viii

文書ビューアー

値 50, 51, 55, 56

検索条件 54

説明 53

文書処理の値 55

文書の詳細 55

文書フロー定義

構成 9

文書分析

検索条件 38

説明 37

プロセスおよびイベント詳細の表示 39

文書の表示 38

文書ボリューム・レポート

印刷 40

エクスポート 40

検索条件 40

作成 39

説明 39

文書状態 39

ヘルプ x

ヘルプの参照先 x

変更

- ゲートウェイ状況 35
- 参加者の属性値 29
- 接続構成 29
- ソース・ゲートウェイまたはターゲット・ゲートウェイ 30

編集

- アクセス権の詳細 12
- ゲートウェイ 19
- 参加者プロフィール 17
- 除外リスト 31
- ターゲットの詳細 8
- デジタル証明書 24
- XML 形式の値 10

[マ行]

- メモリー不足エラー、回避 78

[ヤ行]

- 「ユーザー・パスワードのリセット」メッセージ 18
- 用語 viii

[ラ行]

- ルーター、再始動 82
- ルーター、破損後の再始動 82
- ルーターおよび Receiver、停止 5
- レポートの印刷
 - 文書ボリューム・レポート 40
- ロー文書
 - 表示 53
- ログアウト 5
- ログイン 1
- ログ記録の失敗、イベントおよびビジネス文書の再処理 79

A

- AS1/AS2 ビューアー 53
 - 検索条件 50
 - 説明 49
 - パッケージの詳細 51
 - メッセージの検索 49
 - メッセージの詳細の表示 50

C

- Community Console
 - アイコン 3
 - 移動 3
 - 停止 5
 - ログアウト 5
 - ログイン 1
- Community Console 内の移動 3

- Community Console のアイコン 3
- Community Participant Simulator
 - オープン文書の検索 65
 - オープン文書の削除 65
 - オープン文書への応答 65
 - 説明 59
 - テスト・シナリオの設定 61
 - テスト・プロセスの準備 60
 - 文書フローの開始および表示 64
 - 要求と応答のアップロードおよび表示 63

R

- RosettaNet ビューアー
 - 検索条件 52
 - 説明 51
 - プロセスの検索 52
 - プロセスの詳細の表示 52
 - 文書処理、詳細 53

V

- VTP デジタル証明書 60

W

- WBIC 用語 viii
- Web サーバー結果コード 41
- WebSphere Business Integration Connect
 - 始動 1
 - マシン・シャットダウン後の始動 81
- WebSphere Business Integration Connect の始動 1

X

- XML
 - 形式の値の編集 10
 - 形式の管理 10
 - 形式の削除 10



Printed in Japan